佐賀県文化財調査報告書第44集

赤司遺跡群

――小城郡三日月町所在――

昭和54年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県教育庁文化課

はじめに

この調査報告書は、佐賀県農業基盤整備事業の施行に先がけて、昭和53年度国庫補助金を得て実施した確認調査の記録であります。

第Ⅰ部に、農業基盤整備計画地区について、埋蔵文化財の確認調査を実施した経過及び結果を概観し、第Ⅱ部で小城郡三日月町赤司遺跡B地点、第Ⅲ部で赤司遺跡A地点についてまとめたものであります。

ここ赤司遺跡B地点は、古墳時代に形成された県内初の掘立柱建物跡が確認されたのをはじめ、赤司遺跡A地点は中世の館址が確認され、古代史・中世史の究明に資するものがあろうと考えます。

なお、調査に関して、文化庁、県農林部をはじめ、関係機関の御協力をいただき、ここに厚くお礼を申し上げます。

おわりに、本報告書の御活用を期待しつつ発刊のことばといたします。

昭和54年3月20日

佐賀県教育委員会
教育長　古　藤　　浩

総　目　次

第Ⅰ部

農業基盤整備事業に係る文化財調査 ……1

第Ⅱ部

赤司遺跡　B地点 ……7

第Ⅲ部

赤司遺跡　A地点 ……73

第 Ⅰ 部

農業基盤整備事業
に係る文化財調査

もくじ

１．発掘調査委員会……２
２．発掘調査の経過……２

第Ⅰ部　佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査

1．発掘調査委員会

(ア)　委員

委員長	古藤　浩	佐賀県教育委員会教育長	
委　員	鏡山　猛	佐賀県文化財保護審議会委員	
〃	木下之治	〃	
〃	岡崎　敬	〃	
〃	小田富士雄	〃	

(イ)　事務局

局　長	田中寿義雄	佐賀県教育庁文化課課長	
次　長	川久保松広	〃	課長補佐
庶　務	片渕　正美	〃	庶務係長
会　係	大塚　博昭	〃	庶務係
〃	野口　茂実	〃	
〃	森　由紀子	〃	

(ウ)　発掘調査員

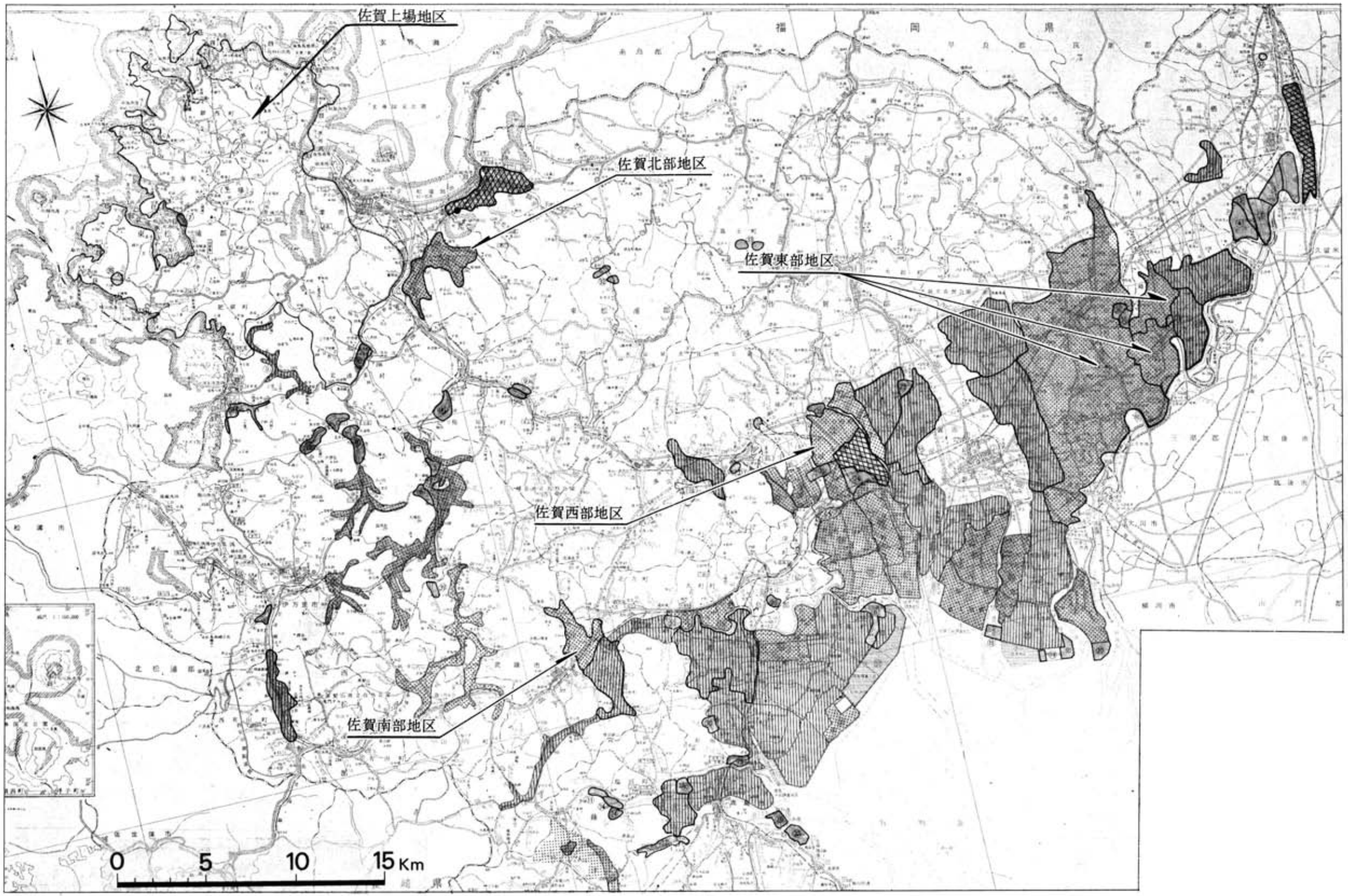
調査主任	木下　　巧	佐賀県教育庁文化課文化財調査第二係長	
調査員	中島　弘之	〃	第二係
〃	堀川　義英	〃	〃
〃	天本　洋一	〃	〃
〃	七田　忠昭	〃	〃
〃	多々良友博	〃	〃
〃	高山久美子	〃	〃

協　力　　文化庁、県農林部、各農林事務所、農政局上場農業水利事業所、関係市町村教育委員会、各土地改良区

2．発掘調査の経過

農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の調査は、文化財調査第二係が担当している。

昭和53年度に於ける佐賀県内農業基盤整備事業は約1900 ha にも及んでいる。即ち、圃


佐賀上場地区
佐賀北部地区
佐賀東部地区
佐賀西部地区
佐賀南部地区
0
5
10
15 Km

昭和53年度埋蔵文化財確認調査一覧

地区名	面積	調査年月	担当者	結果
神埼町伏部他	110 ha	昭和53年4月 ～7月	七田　忠昭 多々良友博 天本　洋一	弥生甕棺墓 住居址等確認
肥前町塔ノ木	32 ha	昭和53年4月	堀川　義英	
肥前町満越	15 ha	昭和53年4月	堀川　義英	
唐津市柏崎	30 ha	昭和53年4月	堀川　義英 多々良友博 中島　弘之	弥生時代住居址
唐津市 一本松遺跡	700 m²	昭和53年4月 ～5月	堀川　義英	
三田川町 下中杖遺跡	3,000 m²	昭和53年4月 ～10月	七田　忠昭 中島　弘之	弥生時代～中世 墳墓・住居址
東背振村	28 ha	昭和53年5月	木下　巧	遺構等確認されず
三田川町箱川	80 ha	昭和53年5月	木下　巧	遺構等確認されず
神埼町 尾崎西分遺跡	3,500 m²	昭和53年5月 ～9月	天本　洋一 多々良友博	古墳時代～中世 住居址
唐津市 柏崎遺跡	4,500 m²	昭和53年5月 ～8月	堀川　義英	弥生時代住居址
武雄市朝日町	60 ha	昭和53年7月	木下　巧	遺構等確認されず
三日月町 赤司遺跡	1,500 m²	昭和53年7月	中島　弘之	住居址・集落址
神埼町 野田遺跡群他	14,000 m²	昭和53年7月 ～54年3月	多々良友博 天本　洋一 中島　弘之	弥生時代・古墳 時代墳墓・住居址
唐津市 枝去木遺跡	1,200 m²	昭和53年8月 ～10月	堀川　義英	縄文時代生活址
上峰村	25 ha	昭和53年8月	木下　巧	遺構等確認されず
三根町	77 ha	昭和53年8月	木下　巧	遺構等確認されず
三日月町 高田遺跡	4,700 m²	昭和53年9月 ～10月	木下　巧	中世館址
三日月町 赤司遺跡	4,500 m²	昭和53年10月 ～54年1月	木下　巧	古墳時代・住居址
鎮西町中野遺跡	1,800 m²	昭和53年10月 ～11月	堀川　義英	縄文時代生活址

地区名	面積	調査年月	担当者	結果
神埼町平ケ里他	120 ha	昭和53年11月～12月	七田　忠昭	甕棺墓他確認
三日月町袴田	30 ha	昭和53年11月	木下　巧	弥生時代・古墳時代住居址・墳墓
塩田町馬場下	10 ha	昭和53年11月	七田　忠昭	縄文時代・弥生時代住居址・墳墓
有明町	30 ha	昭和53年11月	木下　巧	遺構等確認されず
唐津市柏崎	40 ha	昭和53年11月	木下　巧	遺構等確認されず
小城町吉田	20 ha	昭和53年12月	木下　巧	遺構等確認されず
三日月町本告	30 ha	昭和53年12月	木下　巧	弥生時代墳墓・住居址等確認
鹿島市伏原	25 ha	昭和53年12月	木下　巧	遺構等確認されず
芦刈町	4,500 m²	昭和54年1月	木下　巧 七田　忠昭	中世館址が確認
佐賀東部導水路（佐賀市 神埼郡 三養基郡）	300 ha	昭和54年1月	天本　洋一 多々良友博 七田　忠昭 中島　弘之 高山久美子	延長 18000 m 中 12000 m にわたり遺跡等確認された

場整備事業が約1500 ha その他に唐津市、東松浦郡一帯では、国営の総合かんがい排水事業、県営の畑地帯総合土地改良事業など400 ha が取り組まれている。

これらの事業によって予想される埋蔵文化財を破壊から保護するため、県教育委員会は、事業に先立って予備調査を実施した。その結果、遺跡等が確認された場合は遺跡等の現状保存を原則とし、当該事業の設計・工事上やむを得ない部分については発掘調査を実施してきた。

調査の概要は前の表の通りである。

（中島　弘之）

第 Ⅱ 部

赤司遺跡Ｂ地点

もくじ

１．赤司遺跡群の発掘調査の経過……10

２．赤司遺跡の環境……12

３．赤司遺跡Ｂ地点の遺構と遺物……17

(1) 溝状遺構……17

(2) 掘立柱建物跡……24

(3) 祭祀場遺構……28

(4) 結　　語……42

挿　図　目　次

第１図　赤司遺跡近郊の遺跡分布図…… 11
第２図　赤司遺跡群分布図…… 12
第３図　赤司遺跡Ｂ地点遺構分布図…… 15
第４図　溝状遺構出土土器実測図（1）…… 18
第５図　溝状遺構出土土器実測図（2）…… 19
第６図　溝状遺構出土土器実測図（3）…… 21
第７図　溝状遺構出土土器実測図（4）…… 22
第８図　掘立柱建物跡第５号実測図…… 24
第９図　掘立柱建物跡第12号実測図…… 25
第10図　掘立柱建物跡第11号実測図…… 26
第11図　掘立柱建物跡第10号実測図…… 27
第12図　横木実測図…… 27
第13図　祭祀場跡実測図…… 31
第14図　祭祀場跡出土土器実測図（1）…… 33
第15図　祭祀場跡出土土器・石鍋実測図（2）…… 35
第16図　祭祀場跡出土土器実測図（3）…… 36
第17図　祭祀場跡出土土器実測図（4）…… 37
第18図　祭祀場跡出土土器実測図（5）…… 38
第19図　祭祀場跡出土木製品実測図…… 39

図 版 目 次

図版 1　1.赤司遺跡B地点全景（東から西を望む）…… 49
　　2.溝状遺構（1）…… 49
図版 2　1.溝状遺構M－1遺物出土状況（1）…… 50
　　2.溝状遺構遺物出土状況（2）…… 50
図版 3　溝状遺構出土土器（1）…… 51
図版 4　溝状遺構出土土器（2）…… 52
図版 5　溝状遺構出土土器（3）…… 53
図版 6　1.第1号掘立柱建物跡…… 54
　　2.第2号掘立柱建物跡…… 54
図版 7　1.第3号掘立柱建物跡…… 55
　　2.第4号掘立柱建物跡…… 55
図版 8　第5号掘立柱建物跡…… 56
図版 9　第8号掘立柱建物跡…… 57
図版10　第9号掘立柱建物跡…… 58
図版11　1.第10号掘立柱建物跡…… 59
　　2.第11号掘立柱建物跡…… 59
図版12　第11号掘立柱建物跡柱穴…… 60
図版13　第12号掘立柱建物跡…… 61
図版14　1.M－3溝の状況…… 62
　　2.M－3溝出土土器…… 62
図版15　祭祀遺構全景…… 63
図版16　1.鋤・鍬出土状況…… 64
　　2.甕（須恵器）出土状況…… 64
図版17　1.土器出土状況…… 65
　　2.ミニチュア土器出土状況…… 65
図版18　1.土器出土状況…… 66
　　2.鍬・石鍋出土状況…… 66
図版19　祭祀遺構出土土器（1）…… 67
図版20　祭祀遺構出土土器（2）…… 68
図版21　祭祀遺構出土土器（3）…… 69
図版22　祭祀遺構出土土器（4）…… 70
図版23　祭祀遺構出土土器（5）…… 71
図版24　木製品　鍬・糸巻…… 72

1．赤司遺跡群の発掘調査の経過

(1) 発掘調査の経過

昭和53年度三日月東部の圃場整備事業に先立って、昭和52年度に実施した予備調査により確認された埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

(ア) 赤司遺跡A地点

発掘調査期間　自昭和53年7月8日　至昭和53年8月30日

遺跡の概要　中世の館址

(イ) 赤司遺跡B地点

発掘調査期間　自昭和53年10月23日　至昭和54年1月19日

遺跡の概要　古墳時代の溝状遺構・掘立柱建物跡および祭祀場跡

(2) 調査団

担　　当　佐賀県教育委員会

事 務 局　佐賀県教育庁文化課

調査主任　木下　巧、佐賀県教育庁文化課文化財調査第二係長

調 査 員　中島弘之、　〃　第二係

調査補助員　堤　信之、広橋三洋他

協　　力　県農林部、中部農林事務所、三日月町教育委員会、三日月町土地改良区
三日月町赤司、深川・高田・久米の有志、中島工務店

（中島弘之）

第１図　赤司遺跡近郊の遺跡分布図

先土器・縄文時代

1 竜王遺跡
2 岡本遺跡
3 佐織遺跡
4 三日月中学校遺跡

弥生時代

5 久留間遺跡
6 東分弥生甕棺遺跡
7 戌遺跡
8 西仁俣遺跡
9 土生遺跡
10 下久米遺跡
11 寺浦弥生遺跡
12 晴田小学校庭遺跡
13 宿遺跡

古墳時代

14 赤司遺跡
15 深川遺跡
16 久米遺跡
17 船　塚
18 西野古墳群
19 姫　塚
20 円山古墳
21 地蔵山前方後円墳
22 城側山古墳
23 コウザン古墳群
24 一本松古墳群
25 米ノ隈古墳群
26 峰古墳群
27 姫御前古墳
28 弁財天古墳
29 丹坂峠古墳
30 篭原古墳群
31 渋木古墳群
32 深底龍古墳群
33 久蘇遺跡

歴史時代

34 東分蔵骨器出土遺跡
35 峰山蔵骨器出土遺跡
36 石木遺跡
37 高田城
38 持永城
39 平井館
40 千葉城
41 松尾城
42 晴気城
43 星巌寺
44 晴気廃寺跡

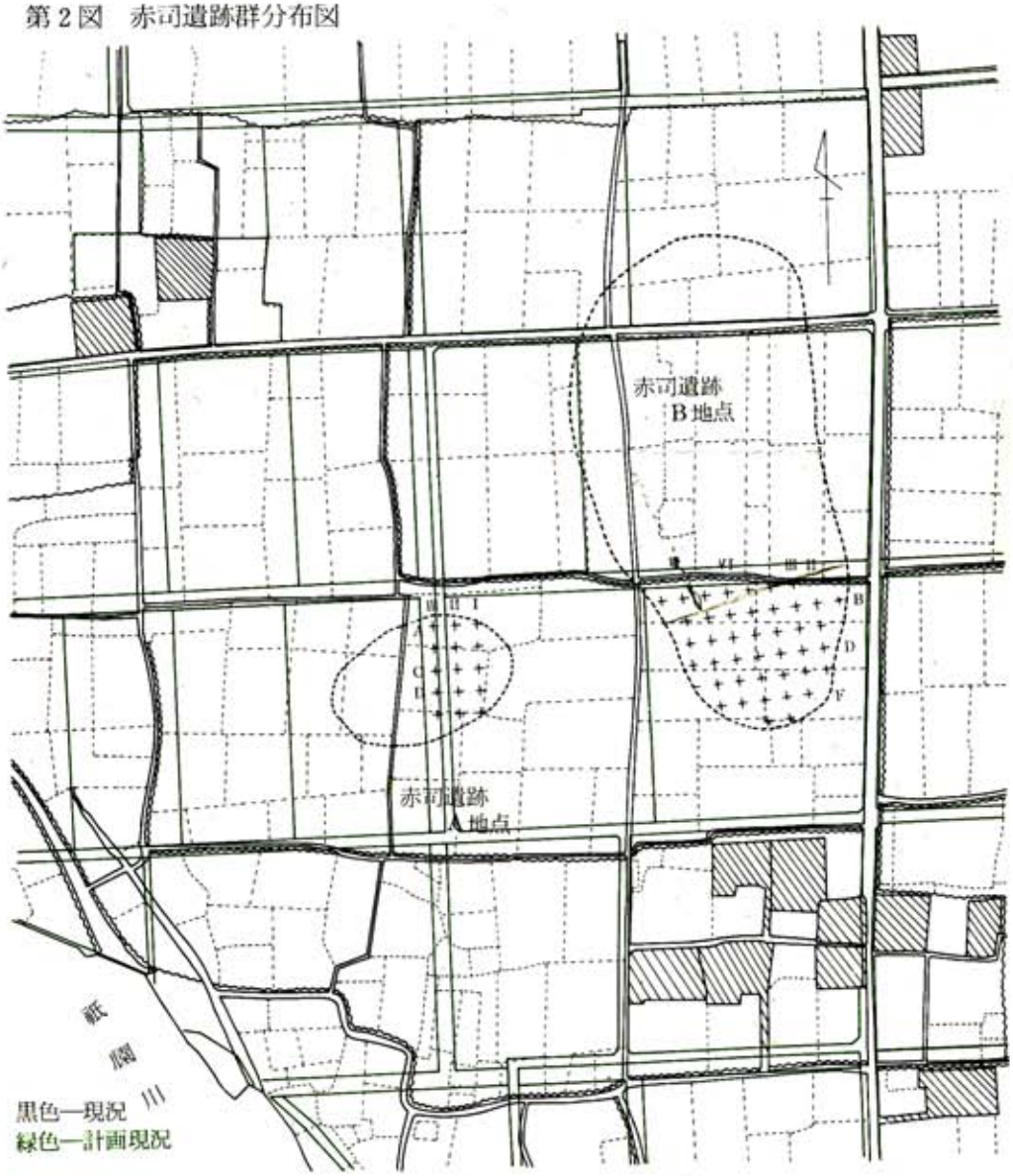
2．赤司遺跡の環境

(1) 地理的環境

小城郡三日月町は佐賀平野の西の端に位置し、行政区割上は、東は佐賀郡大和町に、西は小城郡小城町と境している。北部一帯は天山山系南麓を形成し、南へ向かって、天山（標高1046m）から流下する晴気川、祇園川の堆積作用によって形成されたゆるやかに傾斜した標高12m～20mの平野である。

赤司遺跡群は、天山から岩蔵谷を流下する祇園川の北東岸に広がり標高13mから14m

第2図　赤司遺跡群分布図



の間に位置している。

(2) 歴史的環境

三日月町が歴史の舞台に現われたのはおよそ4万年前で、東分下古賀大塚山、あるいは岡本先土器遺跡に始まると考えられている。縄文時代晩期の遺跡として、竜王遺跡[1]、三日月中学校遺跡、佐織遺跡などが知られている。弥生時代になると、土生遺跡、西仁俣遺跡、寺浦弥生遺跡[3]、久留間遺跡[4]、戍B遺跡[6]、東分弥生甕棺遺跡、玉竜寺裏弥生遺跡[5]、吉田弥生遺跡、晴田小学校校庭弥生遺跡[7]、宿遺跡、秋葉神社境内遺跡[8]、下久米遺跡[9]など、この地域一帯に広く稲作農耕生活集落を形成していたことを物語っている。

古墳時代に入ると、久蘇遺跡の住居址、戍遺跡の方形周溝墓につづき、久米遺跡B地点[9]や下久米遺跡にこの墳墓形式が見られる。

大和町船塚（県史跡前方後円墳）、地蔵山前方後円墳、小城町の宮戸前方後円墳[10]などが5世紀後半頃から山麓が平野と出合う一帯に築造され、さらにコーザン山古墳群、丹坂峠古墳、姫御前古墳などを経て、6世紀後半から大和町との境に男女山古墳群、西野古墳群が構築[11]され、西には小城町西部の笠頭山から南につき出している峰山山系に、一本松古墳群、米の隈古墳群、峰古墳群、坂井山古墳群、山崎山古墳群と続き、牛尾山の深底籠古墳群[12]の群集墓が形成されており、この地域における農村集落の定着を想起させる。[8]しかし、8世紀以降中世までの間は遺跡は姿を消し、考古学的には空白時代となる。この間、8世紀初頭に編纂された肥前風土記に「小城郡」の記載があり、和名抄には「小城郡甕調（美加都岐）あり、名義は上古に土師部住て甕を造りて御調に奉りしなどにておわせたるべし」と記され、10世紀前葉にいたる三日月町の片鱗を記載しているが延喜式（50巻—927年完成）には肥前国から焼物を調納した記録はなく、「甕調」の地名起源の根拠は明らかでない。しかし、弥生時代から古墳時代にかけて、すでに農耕集落の原形が成立しており、条里制の施行により農耕集落の原形が完成されたといえるであろう。三日月町内における条里制に関する遺名は、「四条」「五条」「生立ケ里」「練ケ里」などの地名としてよく残っているが、律令制についての資料がほとんど無いため不詳な点が多い。また荘園制については、『宮事縁事抄』の宇佐宮司解案によれば、宇佐八幡宮領として、乙柳付近の「大場荘」（承暦5年—1081年の立券）83町1段、赤司付近の「赤自荘」（永承元年—1046年立券）24町2段として、宇佐八幡宮の神領となっている。詳しくは、三好不二雄氏の「佐賀県史」[1]岩松要輔氏の「小城町史」[8]の中世史の項を参照していただければ幸いである。

（参考文献）

①七田忠志「佐賀県史一原始時代」　昭和43年９月

②志佐輝彦「竜王縄文遺跡調査概報」教育佐賀　昭和33年12月

③佐賀県教育委員会「佐賀県の遺跡」佐賀県文化財調査報告書第13号　昭和39年３月

④高島忠平「三日月町佐織夜臼式土器」新郷土第319号　昭和50年10月

⑤木下之治・木下巧他「土生・久蘇遺跡」佐賀県文化財調査報告書第25集　昭和48年３月

木下巧「土生遺跡群」佐賀県文化財調査報告書第37集　昭和52年３月

木下巧「久蘇遺跡の土器」小城の歴史第19・21号　昭和52年６月

⑥松尾禎作・七田忠志「久留間遺跡調査概報」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告第10集　昭和26年３月

⑦木下巧「戍遺跡」佐賀県文化財調査報告書第36集　昭和51年３月

⑧木下巧「小城町史一原始時代」昭和49年３月

⑨木下巧「久米遺跡群」佐賀県文化財調査報告書第42集　昭和53年３月

⑩吉村茂三郎「宮戸古墳」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第８集　昭和24年５月

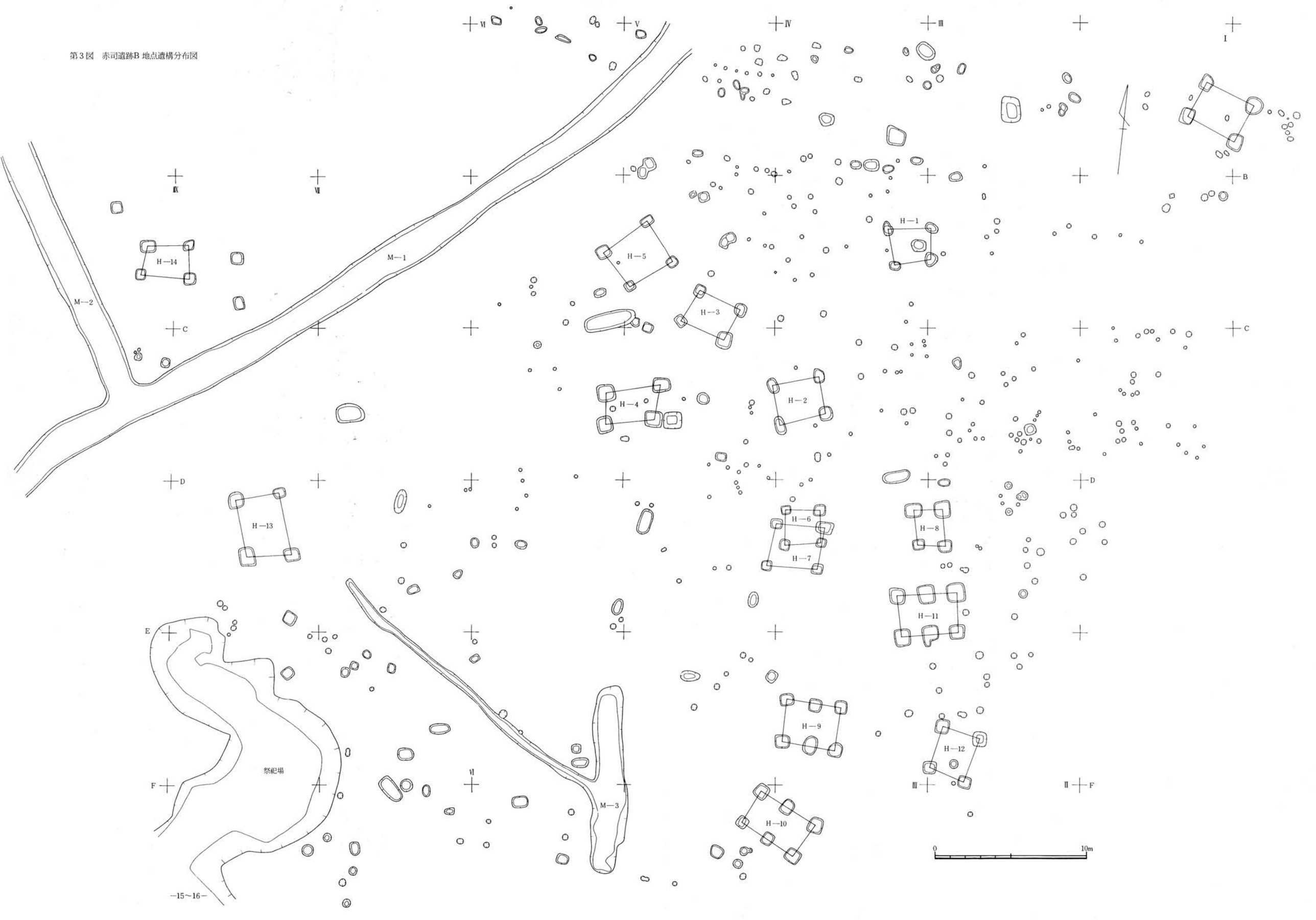
⑪木下巧「丹坂峠古墳の調査」小城の歴史第14号　昭和48年３月

⑫木下巧「一本松古墳群」小城町史料第１号　昭和45年３月

木下巧「一本松古墳群調査概報」小城町史料第４号　昭和46年３月

（中島弘之）

第3図　赤司遺跡B 地点遺構分布図



3．赤司遺跡Ｂ地点の遺構と遺物

赤司遺跡Ｂ地点は下赤司集落の北側（標高13.3m）から北へ約230m（標高14.1m）、緑ケ里へ通ずる南北へ走る町道から西へ約100m の間楕円形状に広がる遺跡である。

今回の調査は、下赤司集落の北部に隣接する遺跡の南部5000m²が対象であった。

調査対象とした赤司遺跡Ｂ地点の南部には、古墳時代に造営された16棟の掘立柱建物跡、遺跡の南西端に淀水があって、木製農耕用具・土器等などの遺物を出土する祭祀遺構、また、北西部には東北に走る溝状遺構がある。

(1) 溝状遺構

ⅨＤからⅣＡ方向―Ｎ46°Ｅへ M―１溝がほぼ直線に穿たれており、約85m である。この溝の先端はそれぞれ北東へ、南西部へ延びるものと推察される。また、M―１溝のⅢＣからⅨＢ方向―Ｎ30°Ｗへほぼ直角に交わるM―２溝があって更に北西へ延びるものと推察される。溝底幅1.8m 程度・現存の深さ27cmを測り、断面は浅いＵ字状をなしている。

M―１・２溝ともに、溝内には帯状に土器の堆積群がみられる。堆積した土器群は壺形土器を主体として、鉢形土器・高坏形土器・器台形土器などがある。土器のほとんどが破壊された状態であるが、壺形土器には完形品も存在し、一様な出土状態ではない。また、いずれの土器群も最下部は溝底より10cm程度浮いた状態であり、一時期に投棄され堆積したものと推定される。

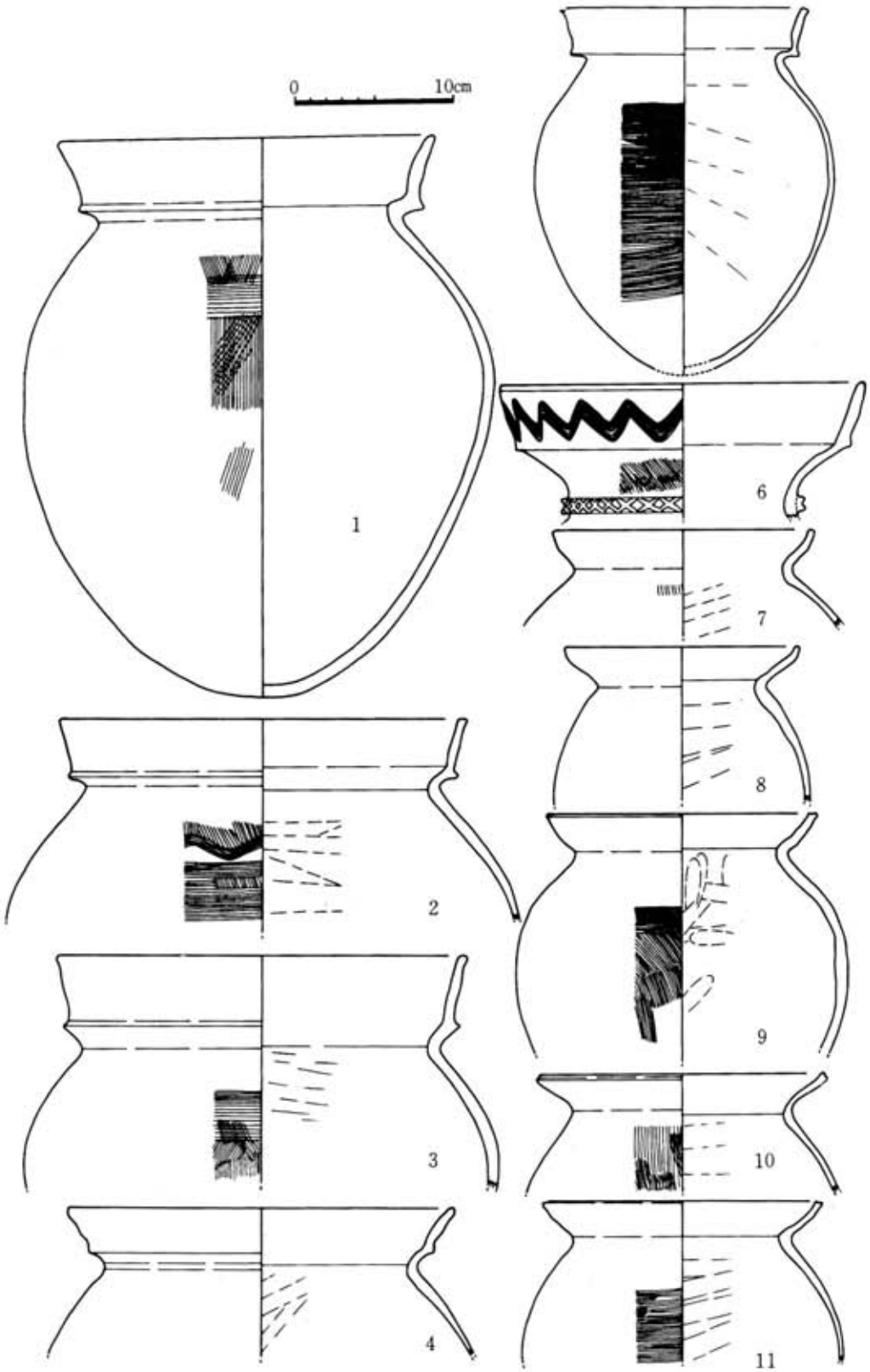
壺形土器１（第４図・図版３）　やや肩部に張りがある卵形の器体に、頸部で鋭く外反する口縁部は、更に逆く字状に内彎してゆるやかに外方へそりながら口唇に至る。所謂二重口縁を形成している。器体内面は篦による粗削り、外面は肩部に刷毛目を付し、最後に口縁部内外を横撫で仕上げている。焼成も良く外面は黒褐色、円面は明褐色を呈する。

精選された粘土に微細砂粒を含む胎土である。器高35.6cm。

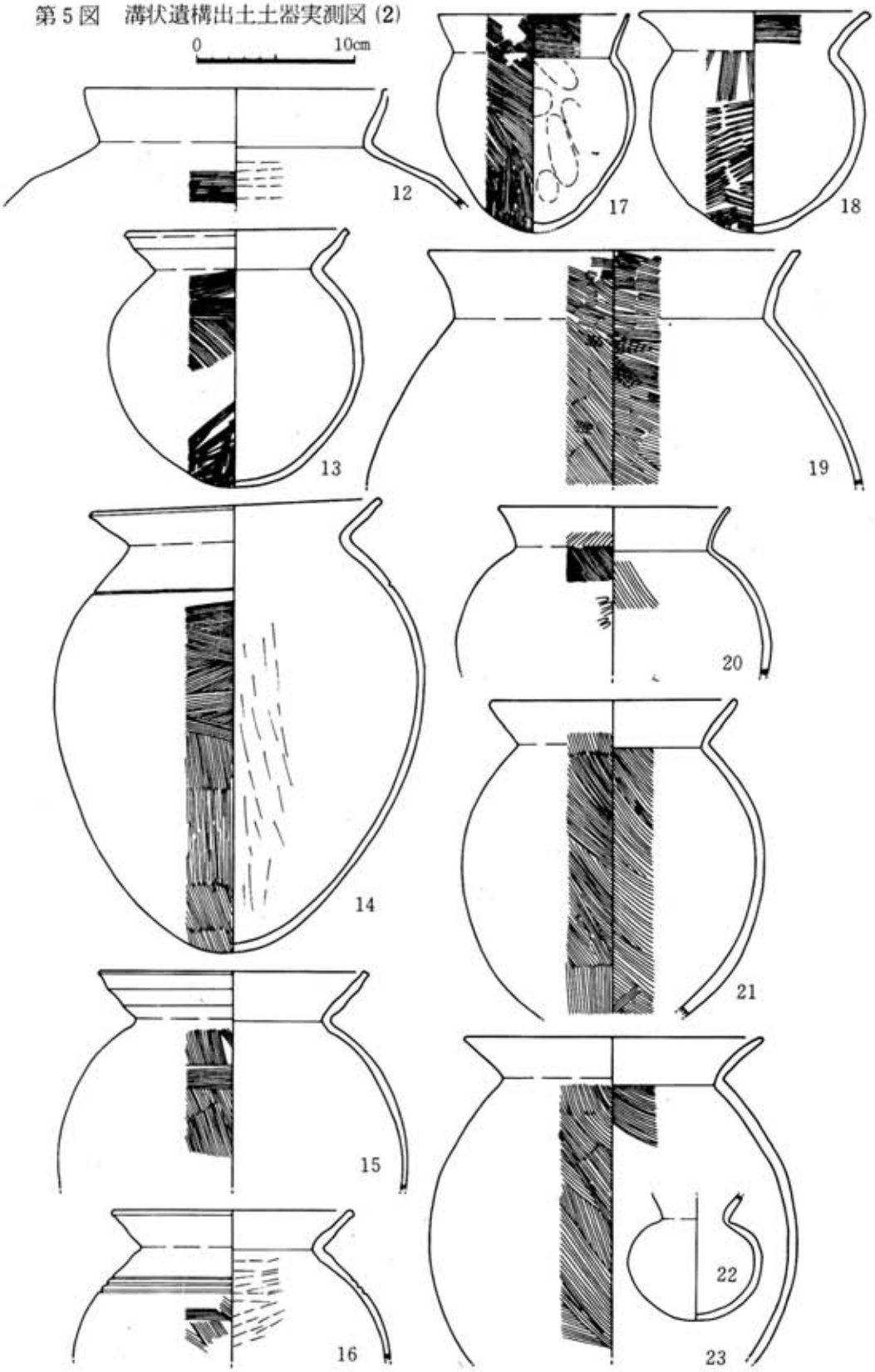
壺形土器５（第４図・図版３）　卵形の器体に頸部で鋭く外返した口縁部は、逆く字形に立ち上がりゆるやかに外反する二重口縁部である。器体の内面は斜位の篦削り、外面は肩部から下腹部に横位の刷毛目で調整を成した後、口縁部内外と底部を横撫で仕上げている。焼成良好で淡茶色を呈する。精選された粘土に若干の砂粒を含む胎土である。器体外面に煤が付着している。口縁径15.5cm。

壺形土器３（第４図・図版３）　やや肩の張る器体に、頸部からく字状に外反する口縁部を付し、更に、逆く字状に立ち上がる口縁部を付し二重口縁をなしている。器体の

第4図　溝状遺構出土土器実測図 (1)



第５図　溝状遺構出土土器実測図（2）



内面は斜位の篦削り、外面の頸部から下位に斜・横位の刷毛調整を、そして肩部には横位の櫛目を付し、最後に口縁部内外を横撫で仕上げている。焼成良好で黄褐色を呈する。精選された粘土に砂粒を含む胎土である。

壺形土器4（第4図・図版3）　頸部からゆるやかに外反した口縁部は、一旦立ち上がりを見せるが、頸部からのカーブの延長上に外開する二重口縁部である。

壺形土器6（第4図・図版3）　頸部から弓状に外反するやや長い口縁部に、更に逆く字状に外開する二重の口縁部を付して口縁部を成している。頸部にはM状凸帯を貼り廻らせ、X状の刻目を施している。下部口縁部には斜位の刷毛目を繰り返し、内外を横撫で仕上げた後、10条からなる櫛目の波状文を施している。

壺形土器8（第4図）　卵形の器体にく字状に外反する口縁部はやや内側にカーブを見せている。器体の内面は斜位の篦削りであるが、外面は摩耗しているため不明である。赤燈色を呈する。精選された粘土に砂粒を含む胎土である。口縁径14.8cm。

壺形土器9（第4図）卵形の器体にく字状に外彎する口縁部は、やや内側に反りながら口唇部に至り、口唇部は嘴状を呈する。器体内側は不定方向の篦削りの後撫で上げ、外面は肩部で横位、胴部は斜位の刷毛調整。最後に口縁部の内外を横撫で仕上げている。焼成はやや不明で淡茶褐色を呈する。良質の粘土に砂粒を含む胎土である。器体外全面に煤が付着している。口縁径17.2cm。

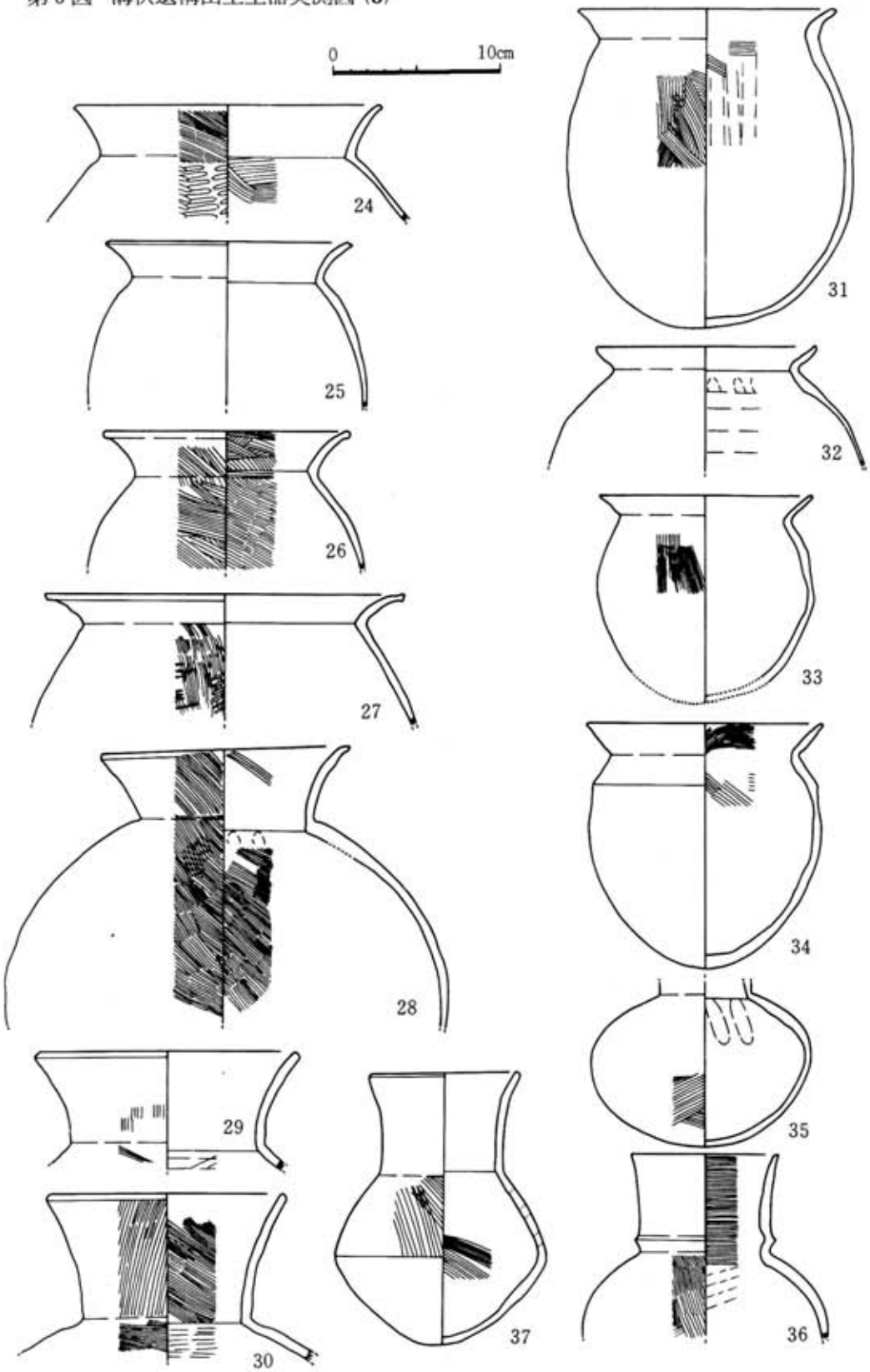
壺形土器11（第4図）　卵形の器体にく字状に外反する口縁部は、やや内側に反りながら口唇部に至る。口唇部は嘴状を呈する。器体内面は斜位の篦削り、外面は頸部から下位を横位の刷毛調整をした後に、口縁部内外と肩部を横撫で仕上げている。焼成やや良好で淡茶褐色を呈する。精選された粘土に砂粒をやや多量に含む胎土である。器体外面に煤が付着している。口縁径17.7cm。

壺形土器13（第5図・図版3）　やや尖底をなすが、球状の器体にく字状に外開する口縁部を付している。器体内面は粗い撫で上げ、外面は肩部を横位、腹部を斜位の刷毛目、底部は不定方向に刷毛目調整をし、口縁内外を横撫で仕上げている。精選された粘土に若干の砂粒を含む胎土で焼成も良く淡茶褐色を呈する。器高16.7cm。

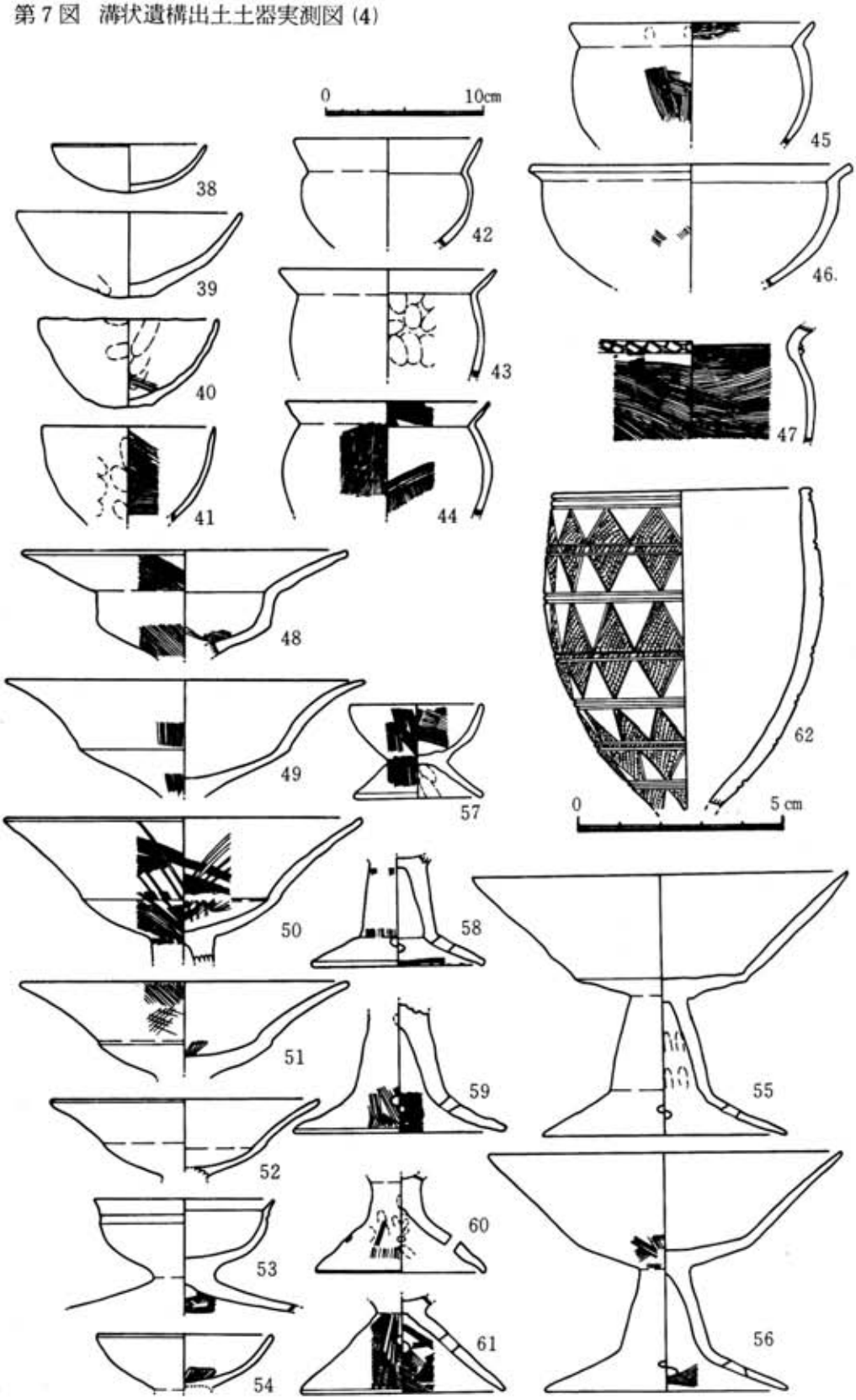
壺形土器14（第5図・図版3）　卵形の器体にく字状に外反する口縁部を付している。器体内部は粗い撫で上げ、外面頸部から腹部に横位の刷毛、下腹部から底部には縦位の刷毛調整をなした後、肩部から口縁部内外を横撫、そして肩部に1条の沈線を横に施している。精選された粘土に小砂粒を若干含む胎土で焼成も良好である。口縁部と底部は茶褐色、胴部は黒褐色を呈する。器高28.5cm。

壺形土器17（第5図・図版3）　やや不整形ではあるが卵形の器体に開きの大きいく字状に外開する口縁部を付している。器体内面は撫で上げで調整し、口縁部内側は横位の刷毛。外面は斜位の刷毛により調整し仕上げている。焼成良く淡橙色を呈する。良質

第６図　溝状遺構出土土器実測図（3）



第７図　溝状遺構出土土器実測図（4）



の粘土に多量の砂粒を含む胎土である。器高14cm。

壺形土器18（第５図・図版３）　やや尖底状の球形器体にく字状に外開する口縁部を付している。口縁部は外反するに従って外下方にやや彎曲する。肩部下位を叩き上げた後、器体内側は撫で上げ、口縁部内側を横位の刷毛、外面の頸部から肩部に縦位の刷毛調整を施し、最後に口縁部内外を横撫で仕上げている。良質の粘土に砂粒を含む胎土で焼成良く茶褐色を呈する。（完形）器高14.1cm。

壺形土器20（第５図）　球状の器体にく字状に外反する口縁部をもつ土器である。口縁部は口唇部がより外方へ開く形態である。器体内部は肩部に斜位の刷毛目、外面は肩部から下位に叩き手法、頸部の上下に斜位の刷毛目を施した後に口縁部内外を横撫で仕上げている。良質の粘土に細砂粒を含む胎土で焼成良く淡い赤褐色を呈する。口縁径14.7cm。

壺形土器22（第５図）　卵状の器体にく字状に外反する口縁部を付している。口縁部は口唇部に向けやや外下方へ彎曲している。器体内部の肩部は斜位の刷毛、外面の頸部から下位は斜位の刷毛調整をなし、口縁部内外を横撫で仕上げている。精選された粘土に小砂粒を含む胎土であって、焼成良く明茶褐色を呈する。口縁径19.2cm。

長径壺形土器36（第６図）　玉葱形の器体に二重口縁をもつ長形壺形土器である。器体内面は斜位の篦の削り上げ、口縁内面は横位の刷毛目調整を施す。外面の頸部下位は縦位の短かい刷毛目調整。口唇部から肩部にかけて横撫をし、その後上部口縁部に篦による磨きをかけている。良質の粘土に細砂粒を多量に含む胎土で、焼成良好で淡橙色を呈する。

長径壺形土器37（第６図・図版４）丸底で鋭角に張った胴をもつ器体に直立する長い口縁を付し、口唇部で外方に開く。器体内部の腹部に斜位の刷毛目をつけ、底部・肩部は撫でつけ、外部は頸部から胴部に斜位の粗い刷毛目調整、底部を撫でつけ、更に口縁部内外を横撫で仕上げ、淡褐色を呈する。精選された粘土に砂粒を含む胎土であって焼成良好である。

台付鉢形土器62（第７図・図版５）　砲弾型を呈する器体に小さく低い台が付くものと考えられる。器体の内部は撫でつけ、口縁部は横撫で調整し、器体外面は丁寧な篦磨きを施している。口縁部から底部にかけて２条１組の沈線を１cmの等間隔で７組直線的に描いている。この上下の沈線組の間に底辺径13mmの三角形文を２条の沈線で施す。第２・３沈線組の間は逆三角形をなし、交互にそれが施されている。この三角形の中に櫛歯による刺突文が付されている。上段の三角形内には刺突した後櫛を下方に引きながら力を抜き、逆三角形内では櫛を刺突した後櫛を上方へ引きながら力を抜いている。

精選された粘土を使用しており焼成良好で黒色を呈する。

掘立柱建物群の西側―ＶＥ・ＶＧの間に南北12m、東西２m・深さ60cm、断面浅いＵ

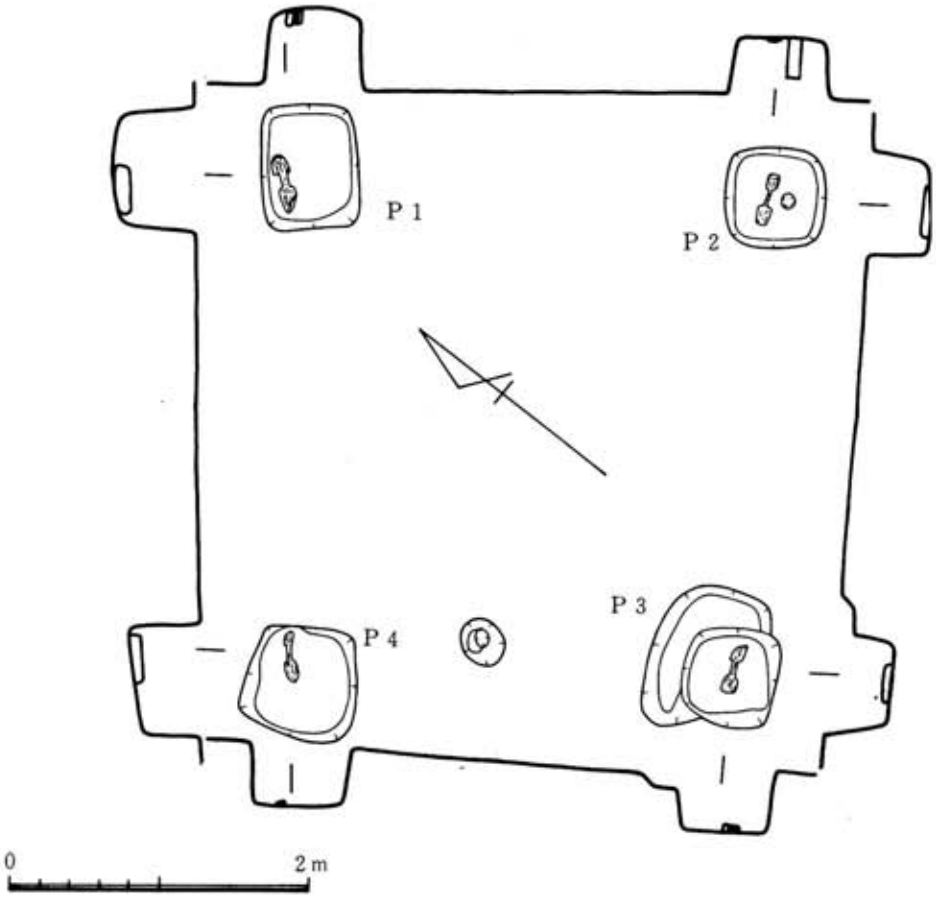
字状の窪地がある。この窪地の西壁中央部から北西へ直線に延びる小溝（M—3）が付設されている。長さ21m・上面幅60cm・深さ40cm・断面U字状を呈する。小溝の中央部に完形の壺形土器1個が検出された。この5m北西部に破壊された土器群が確認され、いずれも溝底より10cm程度浮いた状態で出土している。

壺形土器120（第16図・図版14）　球状の器体にく字状に外反する口縁部を付した壺形土器である。器体の内外は凹凸が顕著で粗雑な製作である。器体の内側および外面底部は粗い撫でつけ、頸部から肩部には縦位の粗い刷毛、腹部には不定方向の粗い刷毛目調整を施している。黄褐色を呈する。良質の粘土に砂粒を含む胎土である。底部は二次焼成痕、胴部に煤が付着している。

(2) 掘立柱建物跡

赤司遺跡B地点南部の発掘調査範囲内に15棟の掘立柱建物跡が確認された。建物跡は全域に存在するが、ⅣCを中心とするⅠ群（A群）、ⅣFを中心とするⅠ群（B群）と

第8図　掘立柱建物跡第5号実測図



群をなさない建物跡に大別される。

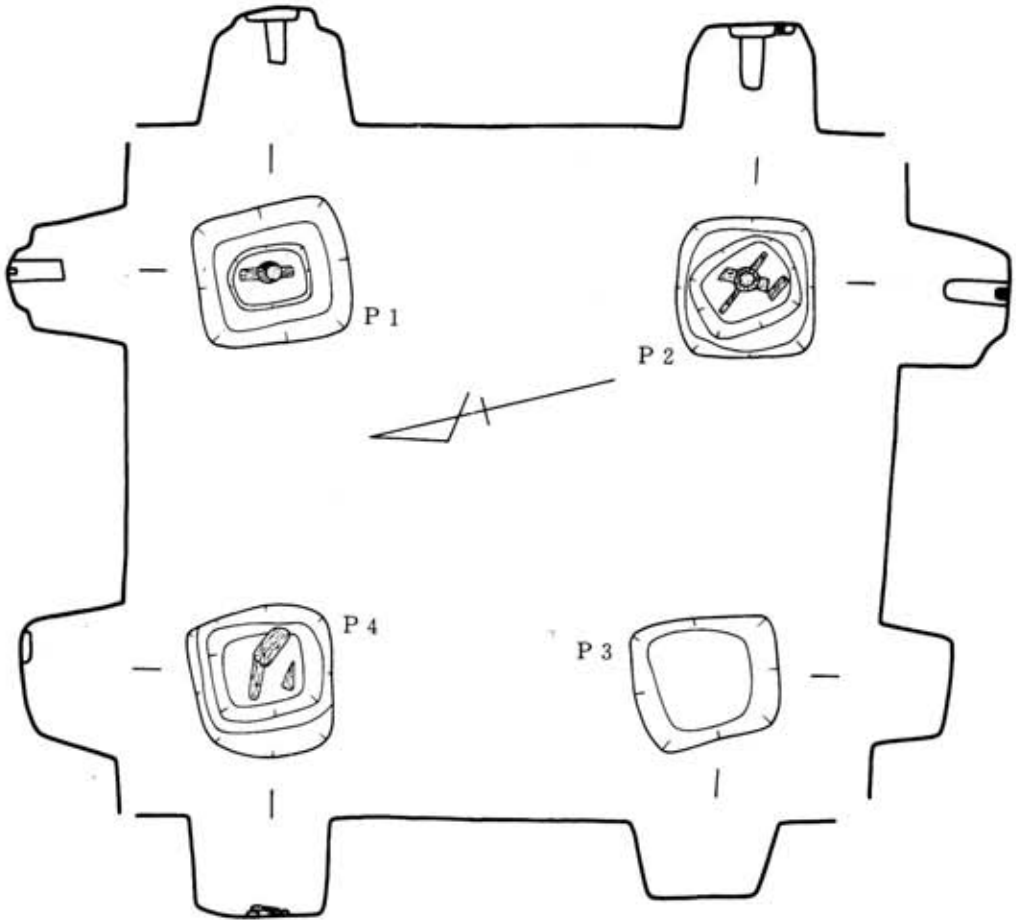
(1) 掘立柱建物跡A群

ⅣCを中心にA群はあって南北に20m・東西15mの範囲の中に5棟が存在する。

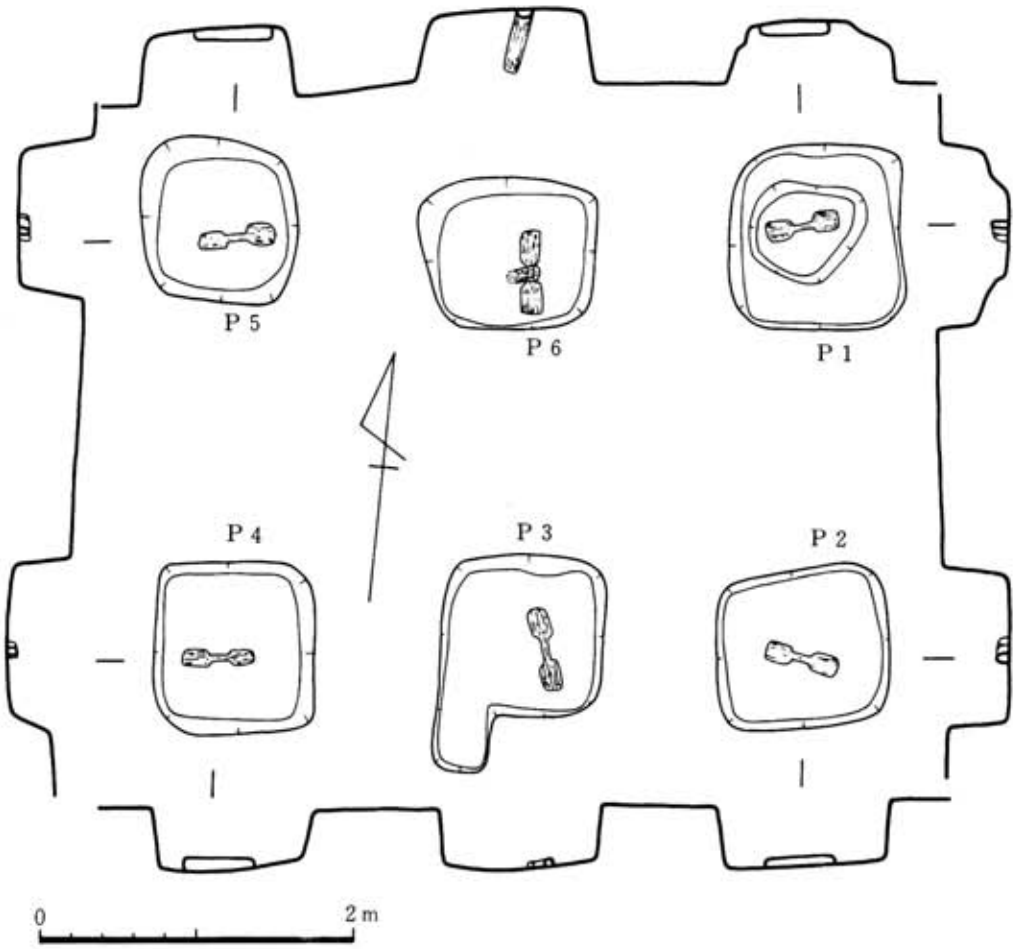
第5号掘立柱建物跡（第8図・図版8） 柱穴P1は底面径70×55cmの長方形を呈し（上面径および深さは削平されているので正確な数値ではない）柱穴底部の北壁に沿って西寄りに横木（柱の沈下防止の為の加工木材）が在る。柱穴P2はP1の南東 2.5m地点に在って、底面径56×55の略隅丸正方形である。柱穴の中央北寄に横木をあつらえ、その南に径10cmの柱を配しているのが副木であろうか。柱穴P3はP2の南西 2.5mに在って、底面径50×53cmであって、略中央部に横木がある。柱穴P4はP3の北西2.2mにあって底面径65×60cmであり、北隅に接して横木の東端があって、北壁に沿うように置かれている。

柱を支える横木の存在から、必らずしも柱穴の中心に柱が設置されたのではないことが分る。また、P1－P2の柱（心）間は322cmであり、P3－P4の柱（心）間は297

第9図 掘立柱建物跡第12号実測図



第10図　掘立柱建物跡第11号実測図



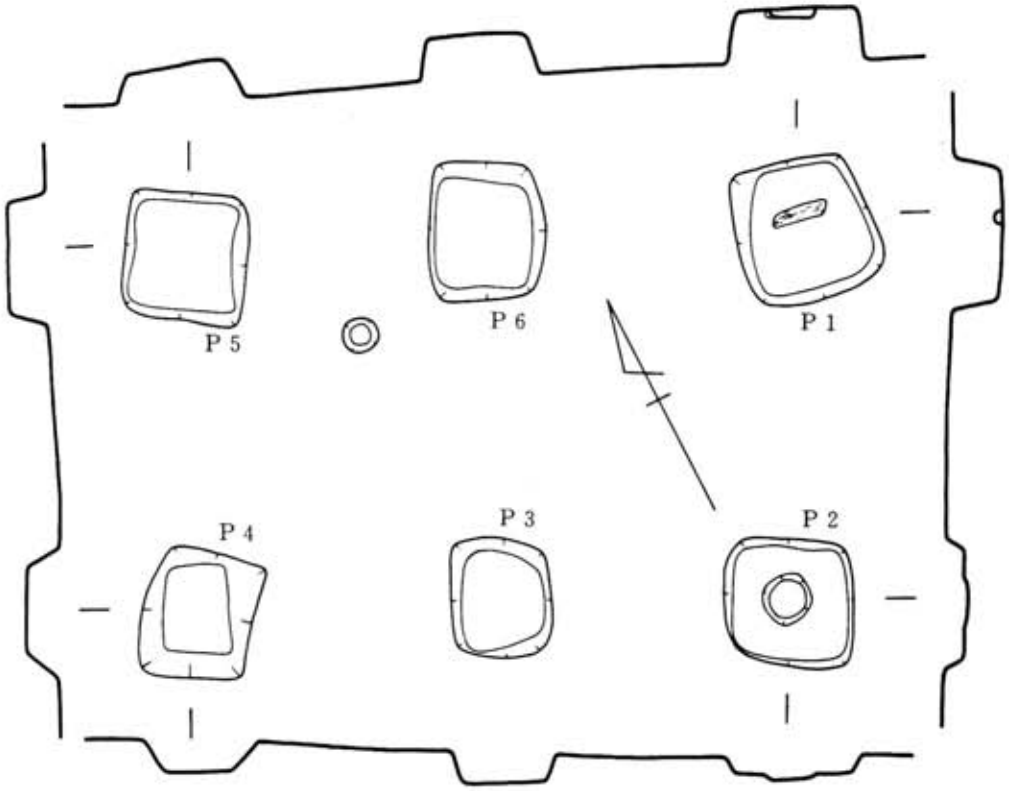
cm、P１—P４・P２—P３はともに315cmである。従って、梁方向と桁方向は直交していない。桁方向は南面するがやや東向である。つまり、桁方向は57°Eである。４つの柱穴に敷いている横木は、直径10cm程度の丸太を35cmに切り—利器で叩き切る手法—それを中心から２つ割りにし、中央部約10cmを底部4.5・上面４cm程度に削っている。利器の種類は不明であるが、ノミ状の刃で削られている（第12図）。

第３号掘立柱建物跡（第３図・図版７）第５号址の南東２m・第２号址の北西 3.5mおよび、第４号址の東北４mに第３号址がある。３号址は４本柱の掘立柱であるが、全ての柱およびP４柱の横木は残されていない。梁行P１—P２は230cmであるがP３—P４は不明であるけれどもP１—P２に近い数値であろう。P１—P２の方向はN25°Eである。P２—P３の桁行は310cmでありE25°Sをとっている。

(2)　掘立柱建物跡B群

遺跡の南端ⅣFをほぼ中心として東西20m・南北30mの範囲内にB群の掘立柱建物跡

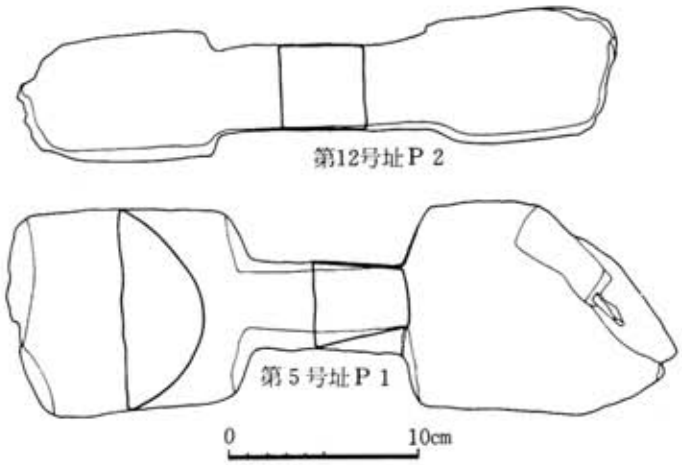
第11図　掘立柱建物跡第10号実測図



があって、A群の南10m 地点である。B群には 6 号址から12号址までの 7 棟の掘主柱建物跡がある。しかし、第 6 号址と第 7 号址は建て替えと考えられるので実数は 6 棟である。B群には 4 本柱の掘立柱建物 4 棟と 6 本柱をもつ掘立柱建物 3 棟がある。

第 8 号掘立柱建物址（第 3 図・図版 9）　A群の東北部に位置し 4 本柱の掘立柱建物である。北部のＰ１・Ｐ４は底面長径100cm程の長方形を呈し、Ｐ１は底部の東北寄り

第12図　横木実測図



に横木が東西に置かれ、Ｐ４のほぼ中央部に横木が東西方向に敷かれている。南部のＰ２は底面長径78cmで北部柱穴より小さい。横木は中央やや北寄りに東西位に敷かれている。Ｐ３は底面長径66cmと他の柱穴に比して極度に小さく、やや東北に偏して穿たれている。横木は確認されていない。また全ての柱穴に柱は残っていない。

Ｐ１－Ｐ４の梁行は205cm（横木の心心）を測りＮ87°Ｅである。またＰ１－Ｐ２の桁行は258cmでＮ８°Ｗであって、梁・桁は直行しない。東向きの家で4.6m²（2.8畳）である。

第12号掘立柱建物址（第９図・図版13）　Ｂ群の南東部に位置する４本柱の掘立建物である。柱穴底はいずれも長径70cm程度の長方形を呈し同規模である。Ｐ３は素掘りであるが他の柱穴は２段掘りの型態をとっている。底面を更に50cm×40cmの面積で５cm程度掘り下げて横木を南北位に敷き柱を立てている。Ｐ２の横木の下には径３cm・長さ50cmの丸太を敷き横木を補強している。

Ｐ１－Ｐ２の桁行は305cmで、Ｎ15°Ｅをとりともに直径13cmの柱を立てている。柱根には横木に嵌込む柄が一柱の中心部に幅5.5cm・深さ５cm一穿たれている。Ｐ１－Ｐ４の梁行は257cmであってＮ76°Ｗをとる。これも梁行と桁行は直行していない。7.6m²(4.6畳）をもち東向きの家である。

第11号掘立柱建物址（第10図・図版11）　第８号址と第12号址の中間やや８号北寄りに第11号掘立柱建物がある。いずれの柱穴底も長径90cm以上の大形長方形を呈する。Ｐ１のみは２段掘りであるが他は素掘りである。Ｐ１の横木は柱穴の中央やや北西寄りに（２段掘りの中央）、Ｐ２は中央やや南寄りに、Ｐ４は中央西寄りに、Ｐ５は中央やや南東寄りに敷かれいずれも東西位をとっている。Ｐ３とＰ６の間柱は桁行の内側にあって、横木は梁行方向に敷かれている。Ｐ６の柱は径10cmである。

Ｐ１－Ｐ２の梁行は275cmでＮ６°Ｗ、Ｐ４－Ｐ５は270cmでＮ４°Ｗ方向をとる。Ｐ１－Ｐ５の桁行は360cmでＮ83°Ｅ、Ｐ２－Ｐ４は370cmでＮ84°Ｅ方向をとる。9.9m²（6.0畳）で南向きの家である。

第13号掘立柱建物址（第３図）　掘立柱建立跡Ｂ群の西方30m、祭祀場跡の北４mに第13号址はある。柱穴底部は長径90cm前後の長方形を呈するが、Ｐ１は65cmで他と比べて小さい柱穴である。横木が無い為に柱位置が不明であるが、柱穴の心に柱が据えられたものと仮定すると、Ｐ１－Ｐ２の桁行は418cmでＮ16°Ｗをとり、Ｐ３－Ｐ４は375cmである。Ｐ１－Ｐ４の桁行292cm、Ｐ２－Ｐ３は300cmでＮ83°Ｗ方向をとる。11.7m²（7.1畳）の広さをもち東向きの家である。

(3) 祭祀場遺構（第13図・図版15）　掘立柱建物Ｂ群の西方30m地点に南北16mの孤状を呈する水の淀がある。淀の北部は袋状で幅４m・深80cmを測り、南東８m地点で西岸が逆く字状に曲る。東岸は12m地点でゆるやかに南方向へカーブし淀の最大幅東西８

掘立柱建物跡計測一覧表

M＝面積　※＝近以値

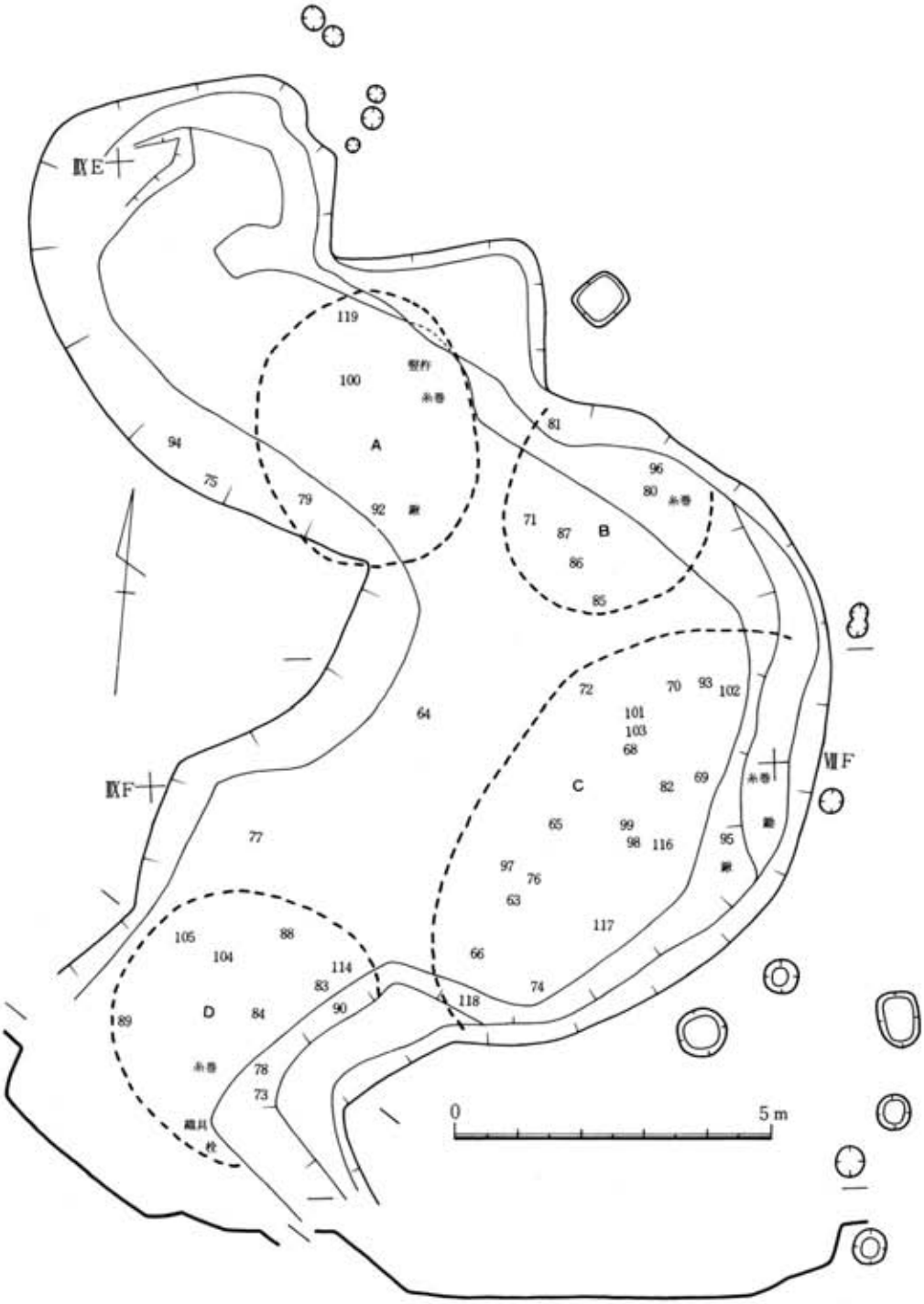
番号	桀行 P cm	桀行 方向	桁行 P cm	柱穴 P	上面径	底面径	深さ	備考（横木長CM）
1	1－2 ※210	N 1°W	1－4 ※ 285	1	70×77	48×62	36	
	3－4 ※230	N 11°W	2－3 ※ 240	2	82×90	58×70	30	
			2－3 ※N 91°E	3	58×75	45×56	41	
A群	M※5.8㎡（3.5畳）			4	62×66	48×47	45	
2	1－2 ※250	N14° W	1－4 ※ 305	1	70×90	60×75	53	
	3－4 ※270	N11° W	2－3 ※ 305	2	86×95	72×75	52	
			2－3 ※N 73°E	3	68×76	50×88	51	
A	M※7.9㎡（4.8畳）			4	70×100	50×80	38	
3	1－2 230	N25° E	1－4 ※ 292	1	80×88	53×70	50	横木片あり（—）
	3－4 ※240	E25° S	2－3 310	2	100×93	80×83	52	横木あり（40）
			2－3 N114°E	3	60×80	43×58	51	〃（32）
A	M※7.1㎡（4.3畳）			4	70×80	50×55	38	
4	1－2 ※242	N13° W	1－4 ※ 355	1	90×120	70×65	48	横木あり（40）2段掘り
	1－2′ ※250	N16° E	2－3 ※ 320	2	105×115	80×90	41	
	3－4 ※200	N10° E	2′－3 ※ 433	2	110×120	55×67	42	2段掘り
			2′－3 ※N 83°E	3	100×110	80×85	45	
A	M 2 ※6.7㎡（4.1畳）M 2 ※8.1㎡（4.9畳）			4	116×115	97×90	60	2段掘り
5	1－2 322	N36° W	1－4 315	1	83×65	70×55	55	横木あり（35）
	3－4 297	N36° W	2－3 315	2	68×67	56×55	37	〃（35）
			2－3 N 57°E	3	67×64	50×53	41	〃（35）
A	M※9.8㎡（5.9畳）		1－4 N 43°E	4	77×75	65×60	41	〃（35）
6	1－2 ※213	N 9° W	1－4 ※ 220	1	82×75	64×58	37	
	3－4 ※230	N 4° W	2－3 ※ 240	2	65×62	48×50	14	
			2－3 N 80°E	3	68×72	53×60	10	
B群	M※5.1㎡（3.1畳）			4	65×55	54×43	13	
7	1－2 ※280	N 4° E	1－4 ※ 313	1	113×80	72×62	38	
	3－4 ※280	N 8° E	2－3 ※ 330	2	75×70	58×48	19	
			2－3 N 88°E	3	70×65	53×55	23	
B	M※9.0㎡（5.4畳）			4	77×67	58×48	33	
8	1－4 205	N87° E	1－2 258	1	108×117	92×98	44	横木あり（43）
	2－3 ※170	N85° W	3－4 ※ 223	2	90×80	78×67	55	〃（45）
			1－2 N 8°W	3	77×70	66×56	41	
B	M※4.6㎡（2.8畳）			4	115×96	100×82	52	横木あり（45）

掘立柱建物跡計測一覧表

M―面積　※―近似値

番号	桁行 P	cm	方向	梁行 P	cm	柱穴 P	上面径	底面径	深さ	備考 (cm)
12	1―4	257	N76°W	1―2	305	1	90×97	43×46	75	2段掘り横木(34)柱
	2―3	※260	N72° W	3―4	※ 285	2	90×87	40×54	66	〃 (32) 〃
				1―2	N 15°E	3	80×93	62×60	46	
B	M※7.6㎡ (4.6畳)					4	97×90	45×50	63	2段掘り横木(30)柱あり
13	1―4	※292	N75° E	1―2	※ 418	1	65×80	50×65	44	
	2―3	※300	N83° W	3―4	※ 375	2	87×105	68×88	27	
				1―2	※N16°W	3	127×103	108×87	38	
	M※11.7㎡ (7.1畳)					4	110×105	80×80	42	
14	1―2	※267	N22° E	1―4	※ 345	1	110円	95円		
	3―4	※260	N25° E	2―3	※ 360	2	100×110	83×90		
				2―3	※N112°E	3	90×105	50×80		
	M※9.3㎡ (5.6畳)					4	80×100	70×80		
15	1―2	※218	N 7° W	1―4	※ 285	1	70×70	55×55	17	
	3―4	※190	N 9° E	2―3	※ 320	2	80×80	66×68	35	
				2―3	※N 93°E	3	75×65	63×55	15	
	M※6.2㎡ (3.8畳)					4	80×103	65×90	56	
9	1―2	※285	N 2° E	1―6	※ 165	1	80×88	68×75	33	
	3―6	※265		6―5	※ 195	2	95×90	80×75	34	
	4―5	※275	N 0° W	1―5	※ 360	3	95×120	78×108	18	
				2―3	※ 170	4	95×85	80×73	20	
	2―4		N95°E	3―4	※ 188	5	90×80	78×65	21	
B	M※10.9㎡ (6.6畳)			2―4	※ 358	6	80×85	70×70		
10	1―2	260	N29° E	1―6	※ 210	1	93×96	80×82	36	
	3―6	※250		6―5	※ 200	2	87×85	76×75	15	
	4―5	※240	N27° E	1―5	※ 410	3	67×80	55×65	19	
				2―3	※ 192	4	60×87	45×60	21	
	2―4		※N117°E	3―4	※ 204	5	82×86	65×72	24	
B	M※10.1㎡ (6.1畳)			2―4	※ 396	6	80×93	65×70	30	
11	1―2	275	N 6° W	1―6	175	1	110×120	50×52	39	2段掘り横木 (47)
	3―6	245		6―5	187	2	110×100	100×90	40	〃 (47)
	4―5	270	N 4° W	1―5	360	3	103×105	95×90	39	〃 (55)
				2―3	165	4	103×110	87×93	38	〃 (46)
	2―4		N84°E	3―4	210	5	100×105	83×83	45	〃 (50)
B	M9.9㎡ (6.0畳)			2―4	370	6	107×97	92×85	52	〃 (55)柱あり

第13図　祭祀場跡実測図



m・南北10mとなる。東岸は北西へ進み西岸との距離6m地点からく字状に南西へカーブし、更に2m進んだ地点―西岸との距離4.5m―で鋭く南東に岸線を向けている。この淀の南側に川の本流があるものと推定される。

淀の中央部分の断面は、第Ⅰ層が耕作土で23cm、その下位の第Ⅱ層は極微細砂を含む土層8cm、第Ⅲ層は黒色沼粘土層約20cmが堆積している。その下に微細砂質粘土層20cmの第Ⅳ層がある。第Ⅲ層の下面つまり第Ⅳ層の上面に須恵器・木製品および土師式土器が出土する。出土品の一部には第Ⅳ層に喰い込むものもある。第Ⅴ層は砂層であって20cmを測る。第Ⅴ層は荒い砂層が2～3cm堆積し（A層）、その下に3～4cmの微細砂層（B層）がある。その下部にまたA層がありその下にB層と繰り返されている。第Ⅴ層から土師式土器のみが出土する。第Ⅳ層は黒色沼粘土層で25cmを測り、その下部は基盤の砂質土層となる。第Ⅵ層から土師式土器が出土する。

淀から出土する遺物群を面的にとらえると4つのグループに大別される。北部のA群で直径3.5mの範囲内で、須恵器・土師式土器・石鍋および木製農具・織具などが出土する。B群はA群の東側に在って直径3mをその範囲とし、土師式土器・木製織具が出土する。C群は淀の最大幅部を占拠しており東岸線8mをとっている。須恵器・土師器および木製農具・織具を出土する。D群は淀の頸部にあって直径4mをその範囲とし、土師式土器・木製農具・織具およびミニチュア土器を出土する。

出土遺物

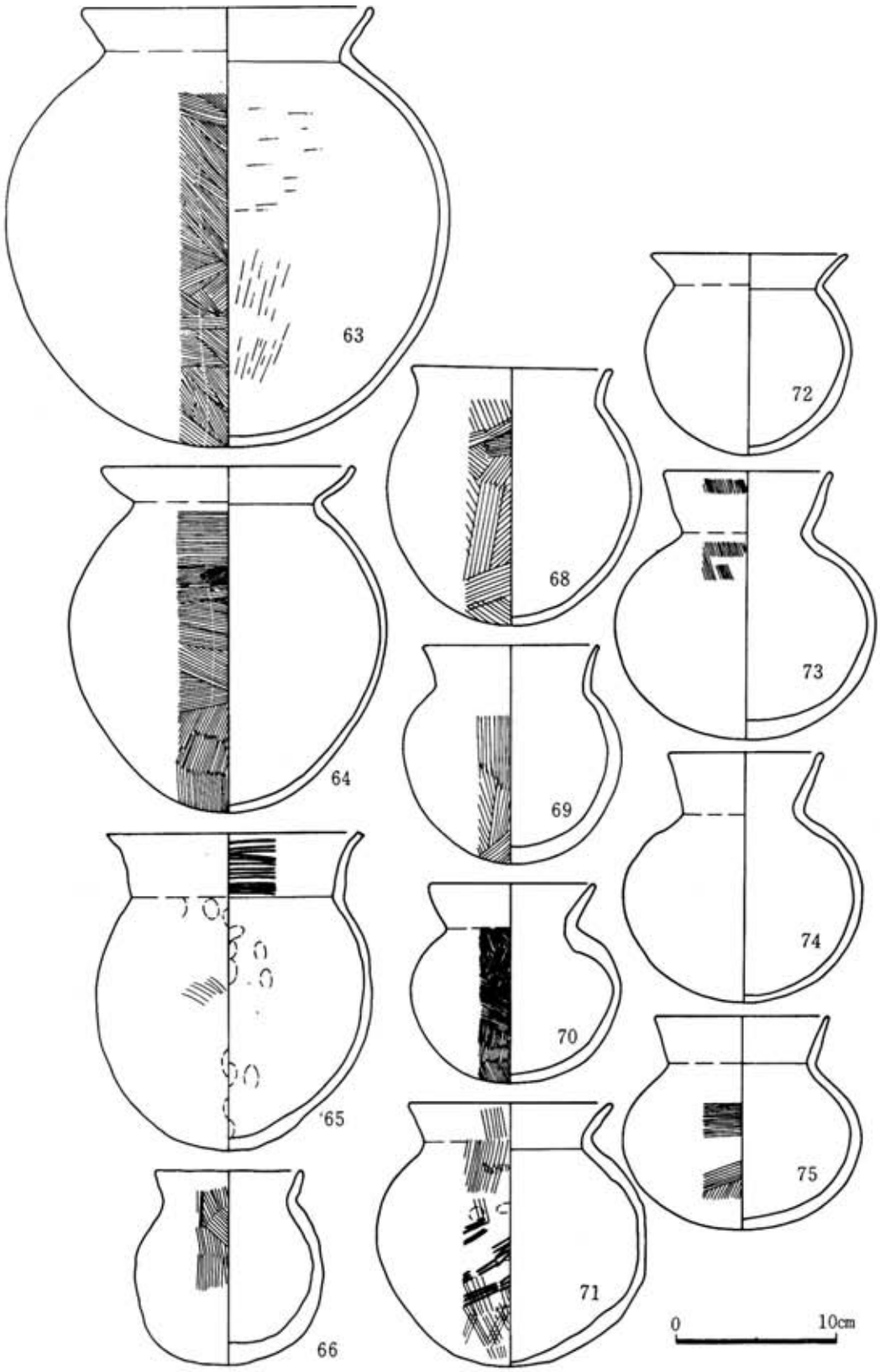
壺形土器

63　土師式土器C群第Ⅵ層（第14図）　球状の器体にく字状に外彎する口縁部を付した土器である。精選された粘土に砂粒を含む胎土である。器体内面の腹部から下位は粗い篦目が底部から腹部に向けて、腹部から頸部には横位の粗い篦削りがなされている。器体外面は短かい斜位の刷毛目が交錯し、口縁部は内外とも横撫で仕上げている。焼成良好で黒褐色を呈する。器高27.9cm。

64　土師式土器　C―Ⅵ（第14図・図版19）　やや上胴に張りの見られる卵状の器体にく字状に外反する口縁部を付している。外反した口縁部は口唇部に向うに従って内側へ反りを見せる。器体外部の頸部から肩部には横位の長い刷毛目調整、腹部は横・斜位の短かい刷毛目が交錯し、下腹部から底部には縦・横・斜位の刷毛目が短かく交錯する調整を施している。口縁部内外は横撫で仕上げている。精選された粘土に小砂粒を含む胎土であって焼成も良く黒褐色を呈する。器高21.9cm。

71　土師式土器　B―Ⅳ（第14図・図版19）　整形の粗い球形の器体にく字状に外反する口縁部を付している。器体の内面は撫調整、外面は口縁部から肩部にかけて縦位の刷毛目、下腹部から底部にかけては粗い斜位の刷毛目を付す。腹部には斜位の叩きがな

第14図　祭祀場跡出土土器実測図 (1)



されその上から指押えがなされている。口縁部の内外とも横撫で調整している。良質の粘土に砂粒を含む胎土で焼成も良い。口縁部を除いた全面に煤が付着している。器高16.6cm。

76　土師式土器　C—Ⅵ（第15図）　尖底状で球形をなす器体にく字状に外反する口縁部を付している。器体内部の頸部に斜位の粗い刷毛目を、外面の肩部から下位に斜位の粗い刷毛目調整をなし、口縁部内外を横撫で仕上げている。精選された粘土に小砂粒を含む胎土で焼成も良く赤褐色を呈する。器高14.3cm。

70　土師式土器　C—Ⅵ（第14図）　玉葱状の器体にく字状に外反する口縁部を付している。頸部から肩部にかけて部厚い。器体内部は粗い篦撫、外面は短かい斜位の刷毛目調整がなされ、口縁部は横位刷毛のあと横撫で仕上げている。良質の粘土に小砂粒を含む胎土であって焼成も良好であり、茶褐色を呈する（内面は赤褐色）。器高12.6cm。

73　土師式土器　D—Ⅵ（第14図・図版21）　球形に近い器体にく字状に外反する口縁部を付しているが立ち上りが大きい。口縁外部と肩部に斜位の短かい刷毛目が付され、口縁部は内外とも横撫で仕上げている。精選された粘土に微細砂粒を含む胎土で焼成も良好、茶褐色を呈する。器高17.0cm。

この土器にミニチュア土器7個が内蔵されたまま淀に投棄されていた。

75　土師式土器　A—Ⅴ（第14図・図版19）　玉葱状の器体にく字状に外反する口縁部をもつが、カーブがゆるくやや立ち上っている。肩部から胴部に横位の刷毛目、下腹部に横斜位の短かい刷毛目が付されている。口縁部内外に横位の刷毛目調整をした後、横撫で仕上げている。良質な粘土に小砂粒を含む胎土で、焼成も良く黒褐色を呈する。器高13.5cm。

65　土師式土器　C—Ⅵ（第14図・図版19）　卵子形の器体にラッパ状に外反する口縁部をもつ。器体の内面は指による撫、外面は刷毛目調整のあと指撫で、口縁内部は横位の刷毛位の刷毛目・外部は刷毛目調整のあと撫、口唇部は横撫で仕上げている。器体外面は煤で覆われている。器高20.1cm。

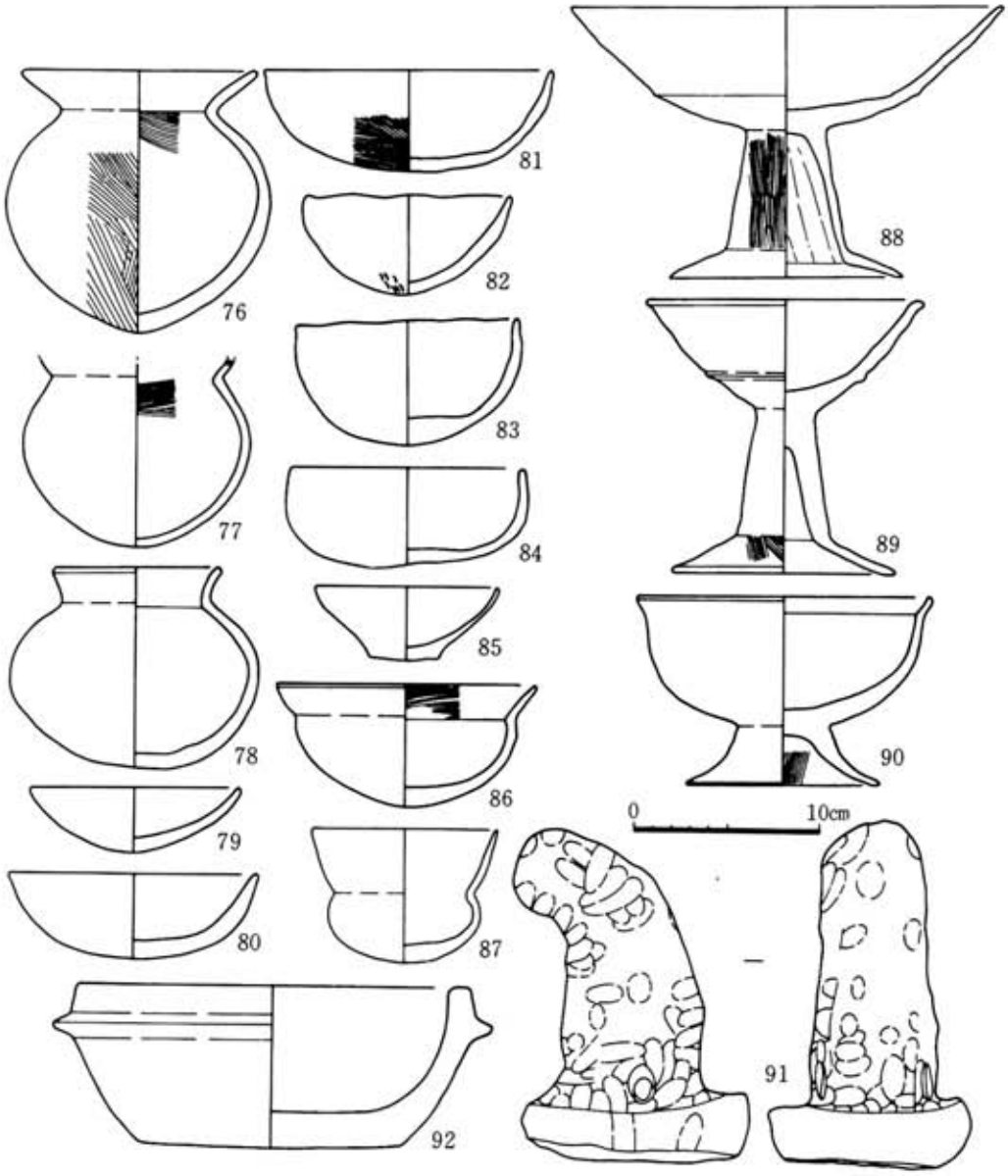
68　土師式土器　C—Ⅳ（第14図・図版19）　球状の器体にく字状に開く短かい口縁部を有する。肩部に叩きが施されたあと全面に粗く短かい刷毛目が斜位に交錯させる調整を行ない、口縁部内外を横撫で仕上げている。精選された粘土に小砂粒を含む胎土であって、焼成良好にして黒褐色を呈する。器高16.3cm。

鉢形土器

79　土師式土器　A—Ⅴ（第15図）　底部が尖るが浅い孤状を呈する器体である。器体の内外とも篦磨きが施されている。良質の粘土に砂粒を含む胎土で焼成良好であり暗褐色を呈する。口縁径11.5cm。

82　土師式土器　C—Ⅵ（第15図・図版20）　底部に尖りが見られやや深い手捏土器

第15図　祭祀場跡出土土器・石鍋実測図 (2)



である。器体の内外とも不規則な撫調整を施している。底部に爪傷を7ケ所付している。小砂粒を多量に含む胎土であり、焼成良好で赤黄褐色を呈する。口縁径11.3cm。

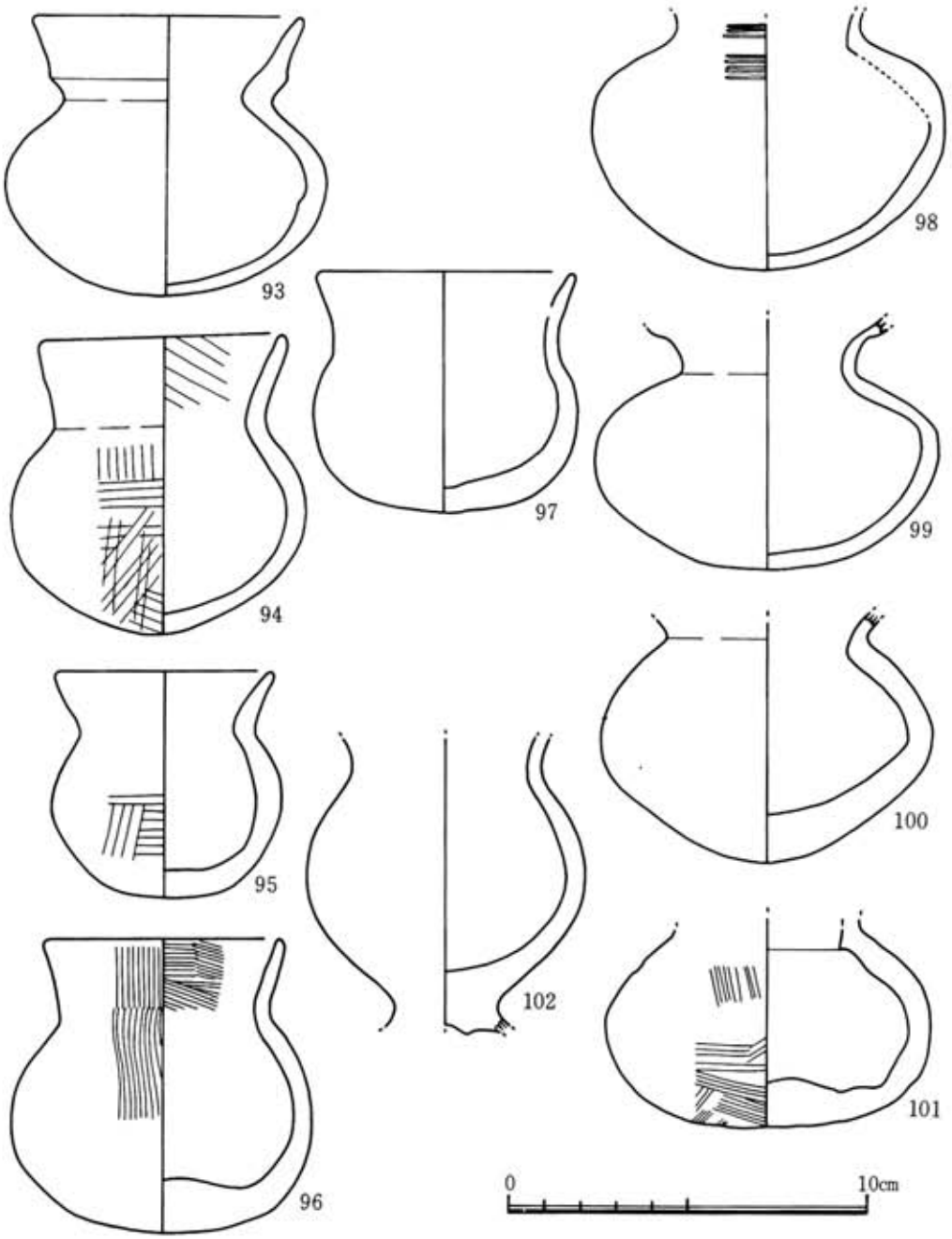
83　土師式土器　D—Ⅳ（第15図・図版20）　半球状を呈する深い土器であり、底部を肉厚にし内面底部が平坦にしている。器体内部は撫、器体外部は篦削り調整である。口唇部は外側に力を加えた撫調整であって、外部がややうすく整形されている。器高6.9cm。

86　土師式土器　B—Ⅴ（第15図・図版20）　尖底状の孤状をなす器体に外反する口

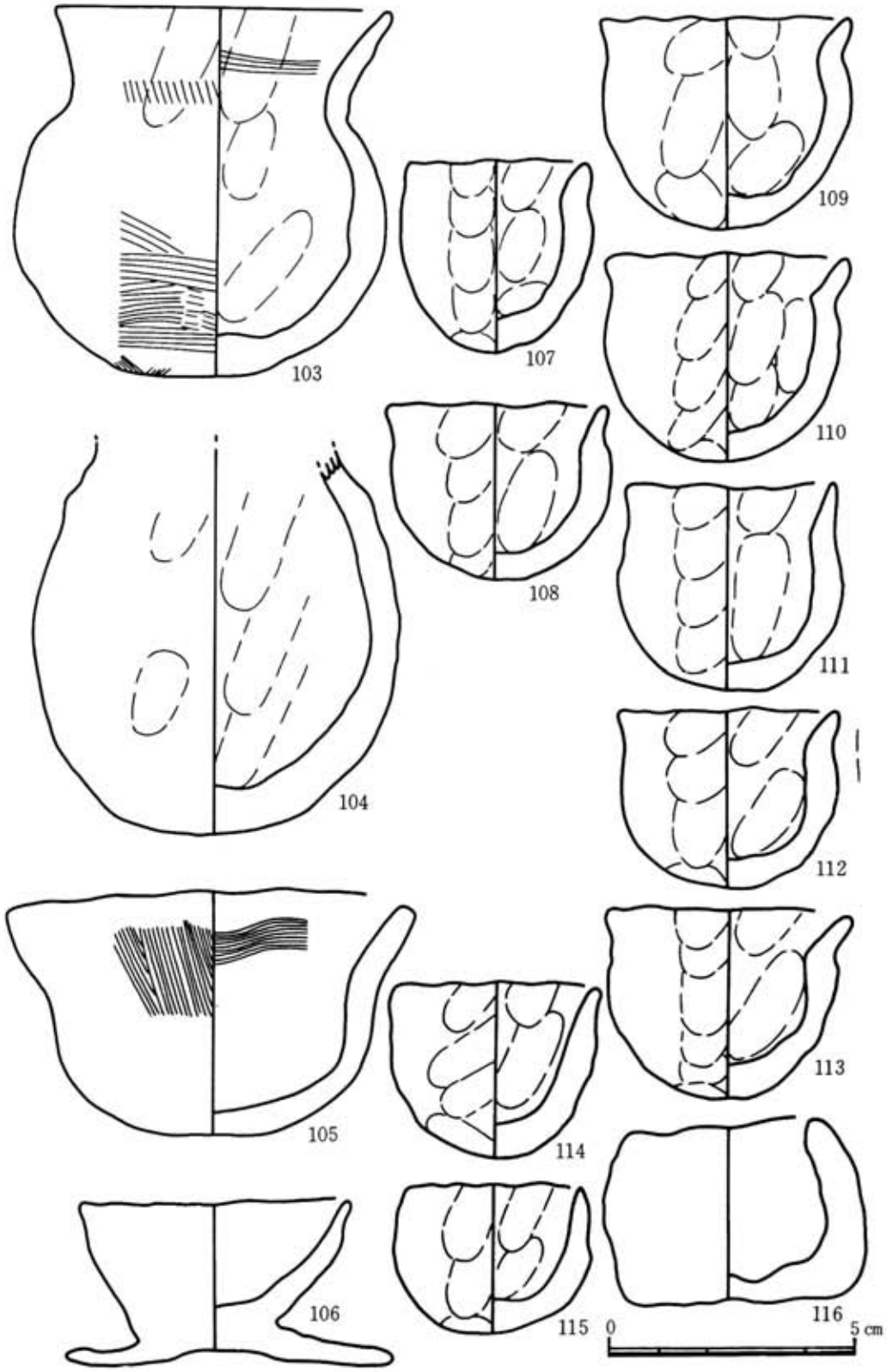
縁部を付す土器である。底部は内厚で内底部が平面に近い。器体内部は撫、口縁部は斜位の刷毛目調整である。外部は器体部を篦削りの後撫上げ、口縁部は横撫ている。良質の粘土に細砂粒を含む胎土であって焼成も良く淡茶色を呈する。器高9.6cm。

87　土師式土器　B—Ⅵ（第15図）　玉葱状の器体に立ち上がる長い口縁部をもつ土器である。器体外部の底部を篦削り、口縁外部を横撫した後、内部および外部の胴部ま

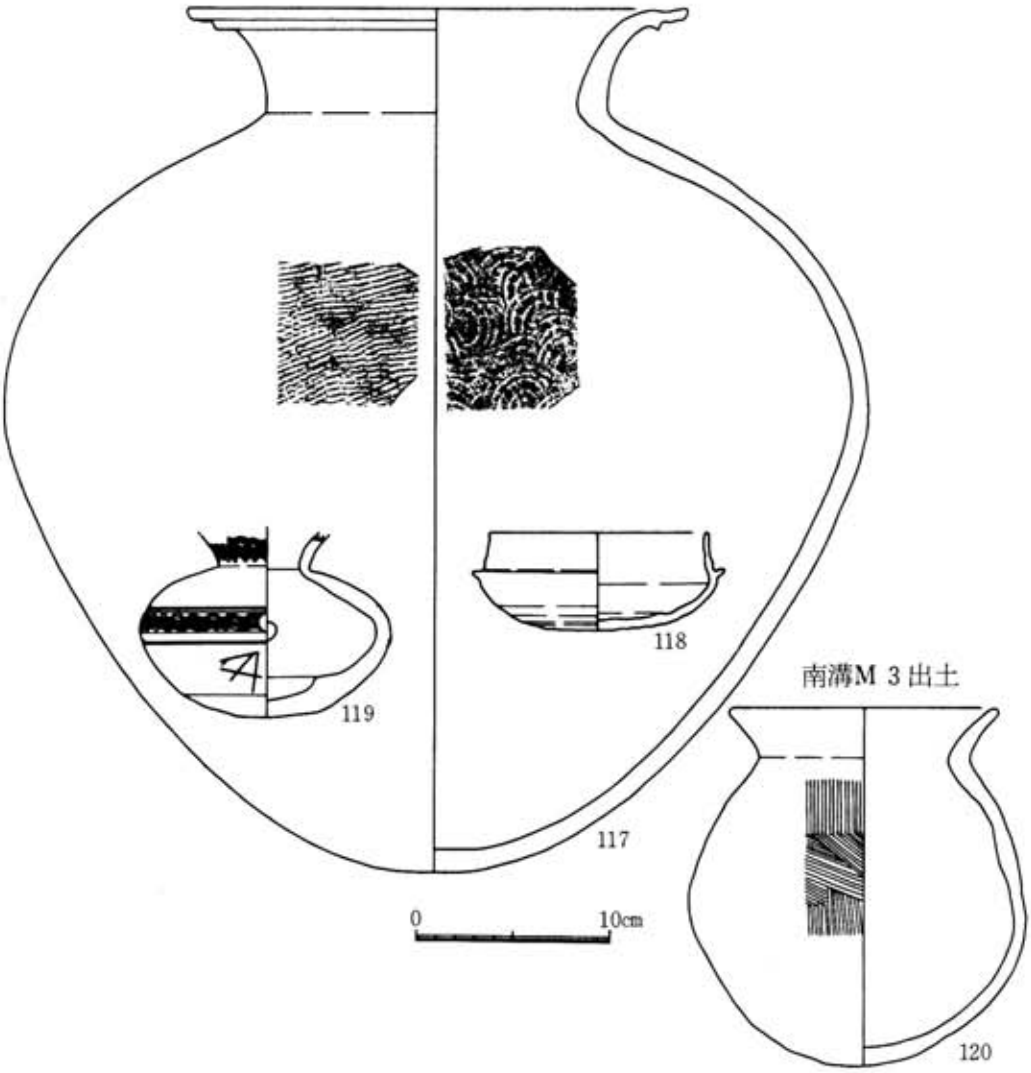
第16図　祭祀場跡出土土器実測図 (3)



第17図　祭祀場跡出土土器実測図（4）



第18図　祭祀場跡出土土器実測図（5）



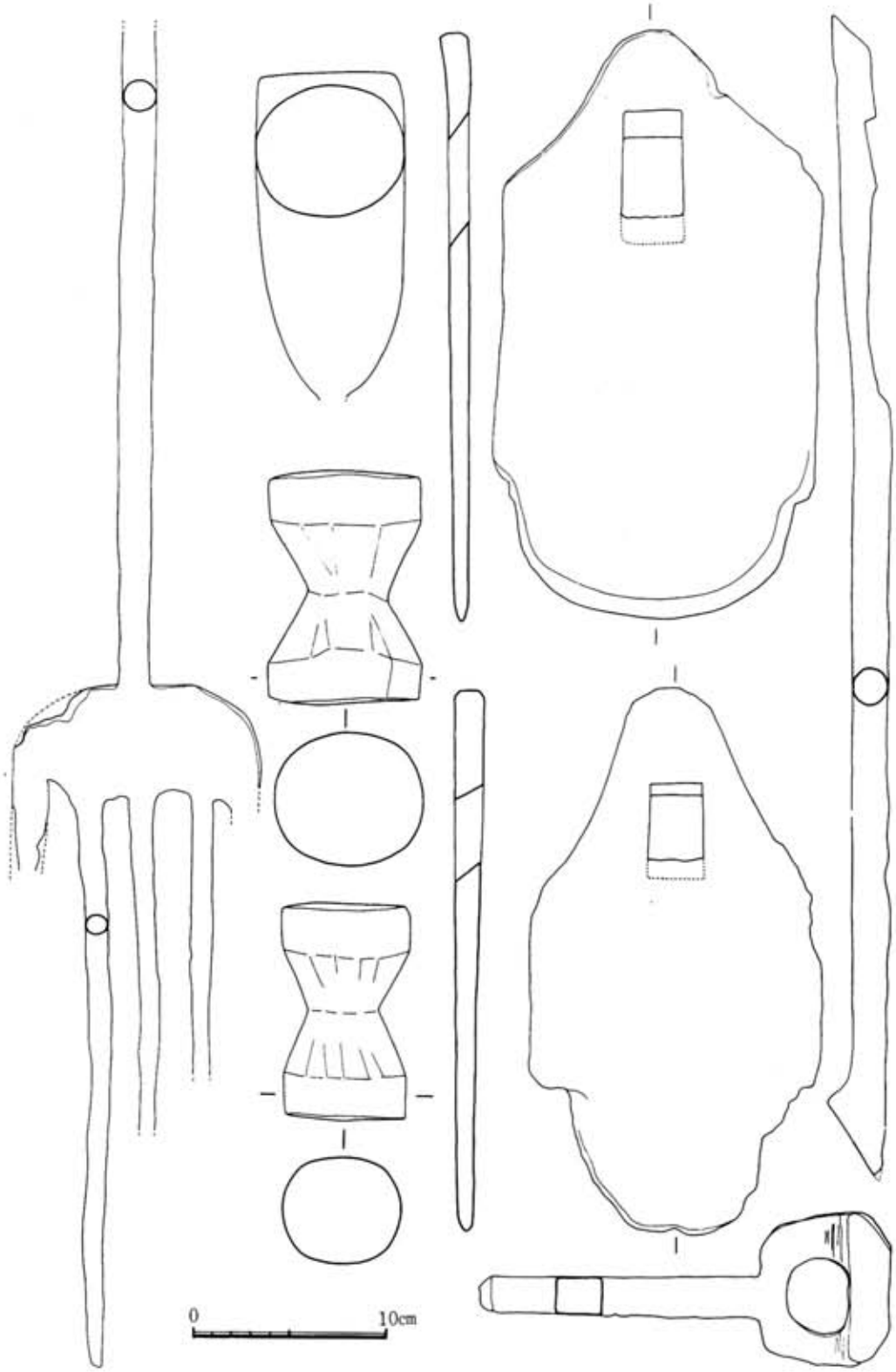
でを篦で磨き上げている。精選された粘土に砂粒を含む。焼成良好で淡茶色を呈する。器高7.3cm。

高坏形土器

88　土師式土器　D－Ⅵ（第15図・図版20）　坏部が大きくやや深い。脚部は高い台形状に鋭角に開く短い脚底部である。坏部は内外ともに横撫調整。脚部の内側は篦削りであり、外部は下から上方向への刷毛目調整。底部は内外とも横撫で仕上げている。小砂粒を含む胎土で淡橙色を呈する。口縁径23.4cm。器高14.8cm。

89　土師式土器　D－Ⅴ（第15図・図版20）　脚部に比して小さな坏部である。坏底部は肉厚くややせり上りながら稜をつくり立ち上る口縁部をもっており、口縁径の割に比して深い坏部である。脚部は細長い台形に鋭角に開く。坏の内底部は撫上げ、口縁内

第19図　祭祀場跡出土木製品実測図



外は横撫を施した後、外部を撫で上げている。脚部は横位の篦磨き、開脚部は斜位の刷毛調整の後撫ており、内部は横撫で仕上げている。良質の粘土に砂粒を含む胎土であり焼成も良く赤橙色を呈する。口縁形15.1cm・器高14.9cm。

90　土師式土器　D－Ⅳ（第15図・図版21）　半円形の器体に外反する短かい口縁部をつくり、ラッパ状に開く脚を付している。坏内底部は撫、腹部から口縁外部は横撫、頸部から底部に斜位の刷毛目調整をした後撫で上げている。脚内部の一部に刷毛目を付した後、内外とも横撫で仕上げている。砂粒を含む胎土で茶褐色を呈する。器体の一部に煤が付着する。口縁径15cm・器高10.2cm。

手捏土器（第17図・図版21・22）

103　壺形土器　　球形の器体にゆるやかに外反する口縁部を付している。器体の内外には指圧痕が残る。器体外面の腹部から底部にかけて横位の刷毛目調整がなされている。良質の粘土に細砂粒を少量含む胎土であって、淡橙色を呈する。器高7.6cm。

107　壺形土器　　73壺形土器に内蔵されていた7個の内の1個である。口縁径3.7cm・器高4cmのミニチュア土器であって、器体の内外に指圧痕を残す。良質の粘土に細砂粒を含む胎土であり、淡茶色を呈する。

105　鉢形土器　　手捏で器体を形成した後に器体の内外を篦で削りおとす調整をし、口縁内部には波状の刷毛、外部は縦位の刷毛で仕上げている。砂粒を含む胎土で焼成良く淡灰茶褐色を呈する。口縁形8.5cm・器高5cm。

106　高坏形土器を模して製作されたものであろう。口縁内部・脚部の内外に粗い刷毛目を付している。胎土に微砂粒を含み、赤茶色を呈し焼成も良好である。口縁径5.6cm・器高3.4cm。

須恵器（第18図・図版23）

117　甕C－Ⅳ　丸底で胴部から鋭く内彎する器体にラッパ状に開く口縁部を付している。口唇外部には△形凸帯を付している。器体の内面は◎形・外面は斜位の叩き痕が付されている。精選された粘土に砂粒を含む胎土をもち、焼成も良い。器高45.3cm。

119　甕A－Ⅵ　玉葱状の器体にラッパ状に開く短かい口縁部をもっている。器体内面は横撫、外面底部を篦削りの後全面を横撫で調整している。腹部に浅い沈線を2cm間隔に入れその間に櫛歯による波状文を施し、注口穴を穿っている。頸部にも波状文を付している。最後に注口穴の下に逆L字の中に×印の篦削文があるが意味は分からない。製作者のサインであろうか。肩部には焼きぶくれ、自然袖がある。最大胴径13.1cm。

石　鍋　A－Ⅴ（第15図）

92　滑石製であって口縁径23.8cm・器高8.9cmを測る。器体外面には煤が付着している。

木製品（第19図・図版23・24）

鍬　A－Ⅴ　身と柄が装着された状態で出土した。身の全長30.8cm、最大幅16.8cm、身上端の厚さ1.5cm、中央部厚さ1cmである。身の上部から8cm位を山形に整形し、身の下端部から8cm位から約1cm内側に切り込み、その下部を円形に整形し、先端から1cmを表裏から削り出している。上端から7cmの位置を中心に縦5.5cm・横3.1cmの穴を37°角で穿っている。

柄は直径1.8cmの丸材に加工し全長61cmを測る。装着部には柄を入れ、先端には滑り止の△形突起を造り出している。

鋤　A－Ⅴ（第19図・図版16）　1木造りのフォーク型を呈する。柄は現在40cmで、直径1.8cmの丸形である。身頭は幅13cmで両肩を丸く削り落し、6cmから5本の穂を造り出している。第4穂は直径1.2mであり29.6mである。他は欠陥しているが同じ規模をもつものと考えられる。

糸巻（大）A－Ⅵ（第19図・図版24）　直径8cmの心持材を12.2cmに削り、両端から2.5cmの位置から心に向けて直径42cmまで削りこんでいる。整形は鋭利な刃物で一気に削り上げている。

木製品には竪杵（A－Ⅵ）、栓ぬき状木製品（B－Ⅳ）（第19図・図版23）、板鍬（C－Ⅳ）（第19図・図版24）、横追（第19図・図版23）、鬼歯・織具部品・栓状木器（D－Ⅳ）などがある。

結　語

小城郡三日月町赤司に在る赤司遺跡B地点は山麓から1km南部の標高13～14m地点の水田地帯に在る。下赤司集落の北方、町道緑ケ里線の西側で東西100m・南北200mの約2万m²の範囲であって今回の調査対象面積は、遺跡の南部約5000m²である。

調査を実施した遺跡は、溝状遺溝・掘立柱建物跡および祭祀場跡から成立する。

赤司遺跡出土資料編年一覧表　（番号は土器番号）

時期	溝状遺構	祭祀場跡		
		土師式土器	須恵器	木製品
I	1～62	63・64・65・66・68・70・72 74・76・82・87・88・93・98 99・101・102・103	――	――
II	――	69・75・77・78・79・80・81 85・86・89・94・95・96 104・105	――	鍬・鬼歯・織具 栓（石鍋）
III	――	71・73・83・84・90・97・100 106・107～115	117・118・119	鍬・鋤・織具 竪杵 栓ぬき状木器

1．赤司遺跡B地点の土器

赤司遺跡B地点から出土する土器は、溝状遺構と祭祀場跡からの出土である。溝状遺構は古式土師器の単純層に対して、祭祀場跡は層位的に3層を把握することができた。祭祀場跡の最下層（第Ⅵ層）が溝状遺構出土の時期であり赤司第Ⅰ式土器と称する。須恵器の時期を赤司第Ⅲ式土器（第Ⅲ期）とし、5世紀後半としてとらえ、その中間の祭祀場跡第Ⅴ層から出土する土器群を赤司第Ⅱ式土器（第Ⅱ期）とする。各時期の土器の分類や説明はここでは省略させていただくが、前に掲げる編年表における分類と前章の土器説明を参照していただければ幸いである。

2．溝状遺構

溝状遺跡は幅2m・深さ27cmの浅いU字溝であって、調査区北端をⅣ46°Eで85m穿たれており、更に東北へ・南西へ延びるものと推察される。また、ⅨC地点で北西にほぼ直角で分岐している。溝中には処々に土器溜があるが、土器溜間の規測性は無い。投

棄された土器群は同一タイプであって古式土師器の範疇である。

溝状遺構はその規模が大きいこと、溝に囲まれる内側に掘立柱建物跡があること、溝の範囲外と推察される南側にも掘立柱建物群が存在することなど、この溝状遺構のもつ意義は大きいと云えよう。

3．祭祀場遺構

遺跡の南西端に川の本流から派生した淀一沼状池がある。淀は南北16m・最大幅8mをもち弧状を呈する。

淀は110m²余あって、集落民の生活用水源であると同時に、神聖な霊場であったものと考えられる。つまり、祭祀の型態は不明であるが何らかの型態をもつ農耕祭祀が終了した後、祭器をこの淀に投棄している一祭神は太陽の化身とされる天山（1046m）であると推察され、淀は水神の御座すところであり、水神は天山神の分身であるところから、祭器を淀に投棄する行為が、神への祈願伝達の達成と祈願成就を願ったものであろう。

祭器（供献品をも含めて）には固定されたものはない。彼らが日常茶飯時に使用するものが神聖な祭器となっている。煤の付着した土器は日常炊事に使用した釜であるし、壺形土器には五穀や酒を盛って奉げたであろう。農具も織具も完形品で使用に耐えうるものを神に奉納している。つまり農耕民である赤司の人々は常日頃から使用している用具を直接神に奉納することによってその用具を使用する作業が一農業が神から、庇護されるものと信じたものであろう。

農業の基本的要素である陽と水と土に関する農民の切実な願いが天山神信仰として定着していき祇園川上流に岩蔵天山社・晴気川上流に本山天山社、そして巌木川（松浦川上流）上流の広瀬天山社（共に下宮）の鎮座となっていくのである。（社殿が形成されるのは平安時代であり、広瀬天山社はそれより遅れると推察される。）ちなみに天山社は貞観2年（860）従五位上が授けられ、社記による祭神は田心姫命・市杵島姫命・湍津姫命の宗像三女神である。また肥前古跡縁起には「岩倉天山大明神本地弁財天」「晴気の庄天山宮弁財天」とあり天山宮が古代農耕社会の水信仰と深い係りのあったことが知られるのである。

さて、淀の利用の一面が祭祀場跡であり、遺物の堆積状況から4つのグループに大別される。このうちC群が最も早くから祭祀場として利用されている。古墳時代前期のことである。この遺跡に最初に住みついた人々の祭祀場であろうか（赤司第Ⅰ期）。祭祀は壺形土器（甕形土器も包含されるがあえて区別しない）のみである。日常使用する壺形土器・小形の壺形土器および手捏土器がある。小形壺形土器および手捏土器は祭祀を目的として造られたものであろう。なお、B群88（鉢形土器）・D群88（高坏形土器）はC群に属する投棄土器であろうと推察される。

赤司II期の時代になると4つの祭祀場が使用されている。C群は壺形土器と農具・織具が出土し、A群は壺形土器・鉢形土器・農具および石鍋がある。B群には鉢形土器と小形の壺・鉢形土器がある。D群には壺・高坏形土器の手捏の壺・鉢形土器および織具が出土している。この時代から祭器に小形土器が主流を占めるようになったこと、農具・織具などの生産用具が祭器の対象となったことが特筆される。この4つのグループは赤司遺跡B地点を形成する人々ではあろうが、同一遺跡における集落群の祭祀場と考えられる。つまり、この遺跡は4つの集落グループから成る遺跡であると云えよう。

赤司第III期の時代にも、第II期と同様な祭祀が各群で施行されている。日常の容器・小形土器・ミニチュア土器および木製の生産用具が祭器の対象とされている。この時代から須恵器が祭器として使用されていることは注目されるところであって5世紀後半に位置づけられよう。

祭祀場跡出土資料一覧表

(番号は土器番号)

時期＼群	A	B	C	D
(赤司III期)	100・119・竪杵・鍬	71・糸巻 詮ぬき状木器	97・106・117・118 鋤	73・83・84・90・ 107～115
(赤司II期)	75・79・94・石鍋・ 鍬	80・81・85・86・96	69・95・糸巻・鍬	77・78・89・104・105 糸巻・織具・鬼歯
(赤司I期)		87	63・64・65・66・68 70・72・74・76・82 93・98・99・101・ 102・103・116	88

4．掘立柱建物跡

調査区の北端部に北東に流れる溝状遺構の南部に14棟の掘立柱建物跡があり、溝状遺構の北部に1棟の掘立柱建物跡が確認された。

溝状遺構南部のⅣCを中心とする約300㎡の範囲内に第1号から第5号掘立柱建物跡が5棟存在する。この建物群をA群と称する。このグループの建物は4本柱で構成されている。柱の沈下を防止する横木が柱穴に敷かれているのは第3・4・5号址であるが、4穴ともに存在するのは第5号址のみである。第5号址の横木は梁方向に敷かれているのが注目されるが他の建物址には規律がない。これらの建物は第1号から第4号址は6㎡から7㎡前後で桁行が東西方向(つまり南向き)であるのに対して、第5号址は10㎡をもち南東向きである。遺跡の南端ⅣFを中心として600㎡の範囲内に第6号から第12号掘立柱建物址のB群がある。4本柱の建物が第6・7・8・12号址の4棟があるが第6号址と第7号址の建てられた前後関係は不明であるが、いずれにせよ、どちらかが建替

えられたものであるので実数は3棟である。第6・7号址はB群の北西端に在り、8号址はその東隣に在る。第12号址はB群の南東端に在る。柱穴内に横木をもつものは第8・12号址であって、いずれも一部欠損しているが、第8号址の場合横木は梁方向をとっている。第6・8号址が5㎡で、第6号址が南向き、第8号址が東向きである。

6本柱の建物跡はB群の南西に第9号址・第10号址と南北に併行し、第11号は第8号址と第12号址の中間に位置する。柱穴に横木が存在するのは第10・11号址であるが、第10号址はP1を除いて欠損しているがP2には最初から敷かれてなかったものと推察される。第11号址は桁方向に横木が整然と敷かれ、間柱P3・P6には梁方向に敷かれているのは注目される。3棟とも10㎡前後でありともに南向きである。

しかしながら、AおよびB群の建物は人々が居住する住居なのか、それとも倉庫であるのか判明しがたい。家の広さ・方向などの組み合せにおいてもその規範は見出せない。またこの群内に入らない建物―祭祀場北側の4本柱の掘立柱建物の意味、また溝状遺構南側にあってA群の東北方に弧立する4本柱の建物、更には、溝状遺構の北側にある第15号掘立柱建物などどのように解釈するのか。溝状遺構は古墳時代前期の一時期の所産ではあるが、溝内（北側）と外側（南側）に在る建物の意味を根本的に解決するヒントを抱いているように考えられる。

とにかく祭祀場は4つのグループの集団によって祭祀されたことはほぼ間違いないところである。仮りに建物群のA・B群が倉庫群であるとしても、溝状遺構の北側にはこの倉庫を管理する2つの集団が存在することは肯定されよう。溝状遺構は本来的に居住地を占有する為の溝ではなかっただろうか。将来の調査を待つと同時に、類例遺跡の発見がこの遺跡の建物群を始めとする諸々の謎を説き明かしてくれるであろう。

（木下　巧）

第 Ⅱ 部

赤司遺跡Ｂ地点

図

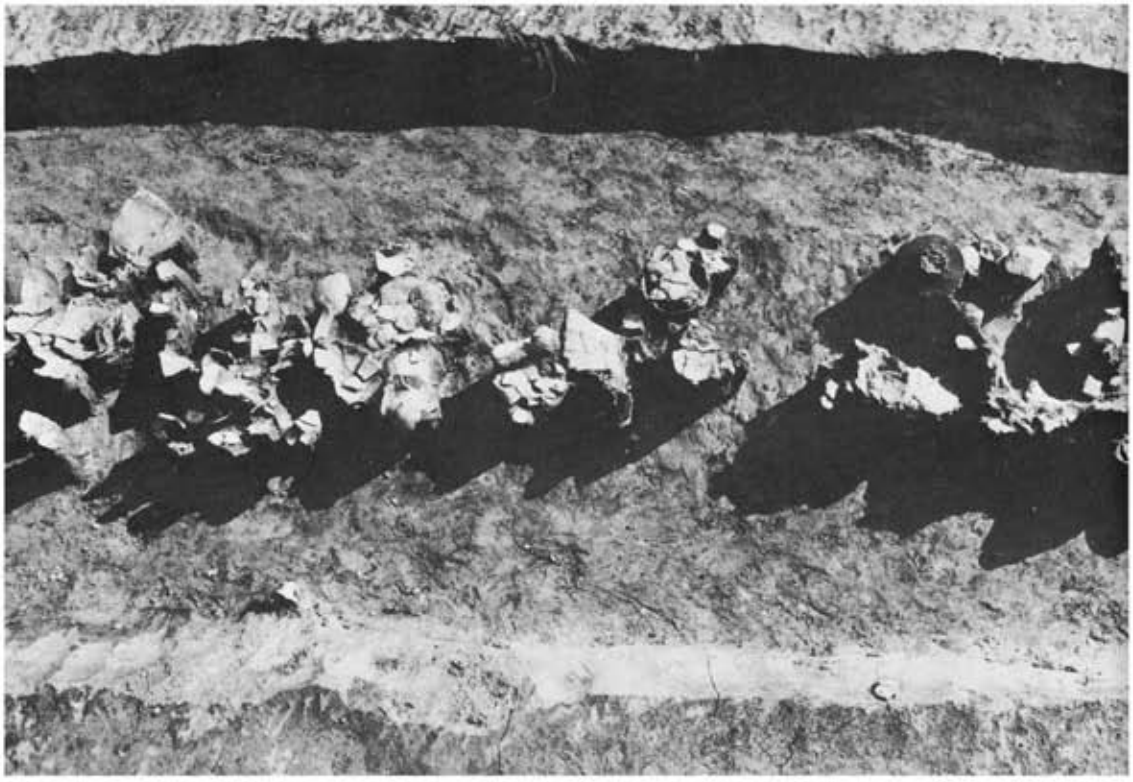
版

1．赤司遺跡B地点全景（東から西を望む）　図版1

2．溝状遺構(1)

図版 2　　1．溝状遺構M－1遺物出土状況(1)

2．溝状遺構遺物出土状況(2)



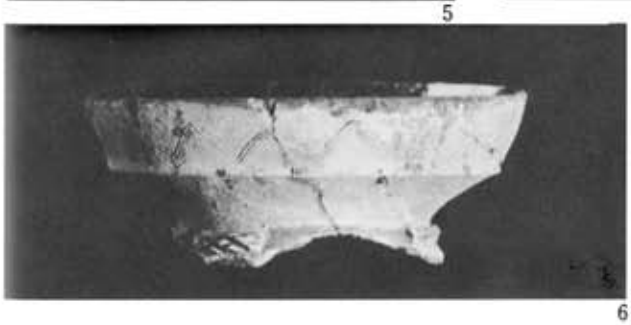
1

13

17

5

14


6

18

図版 4　　溝状遺構出土土器(2)

23

35

31

37

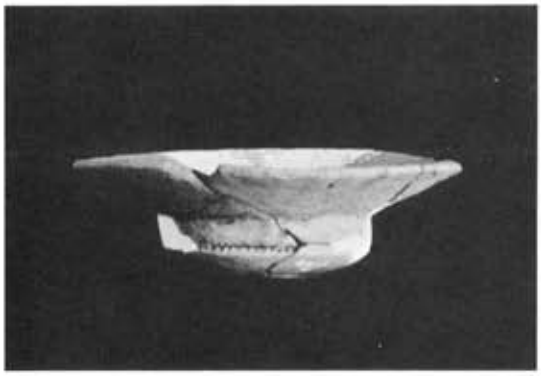
33

67

34

38

40


48

53

49

55

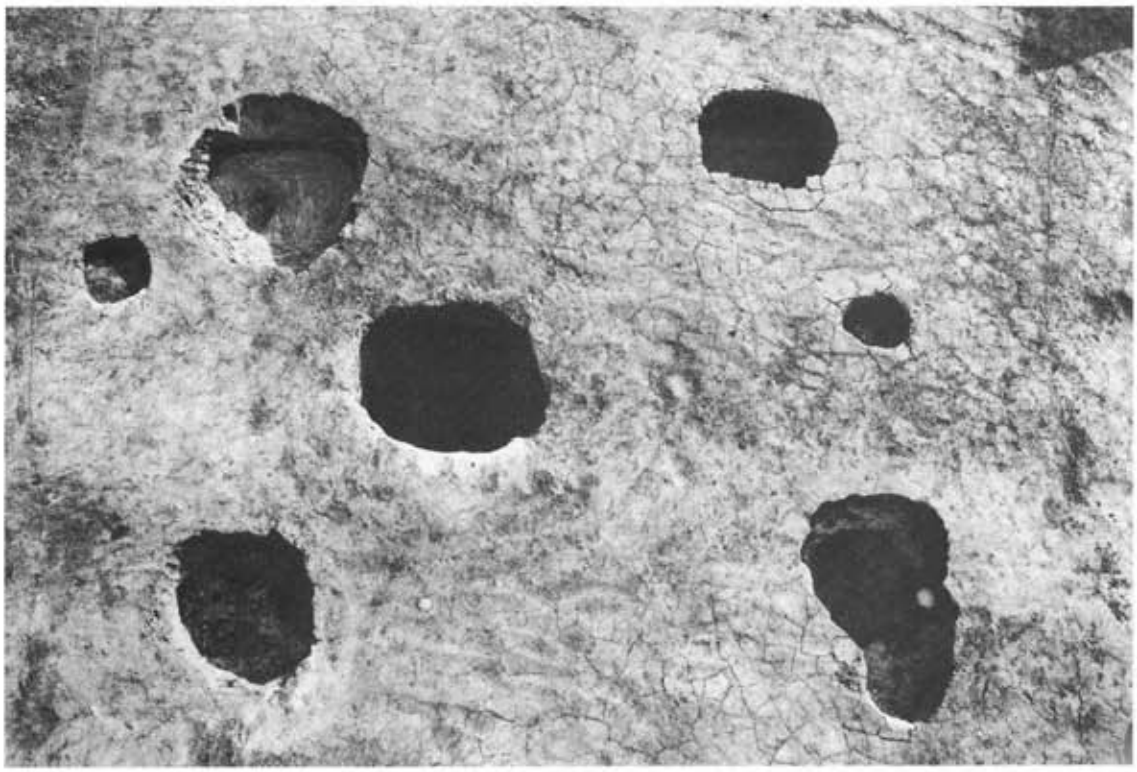
50

66

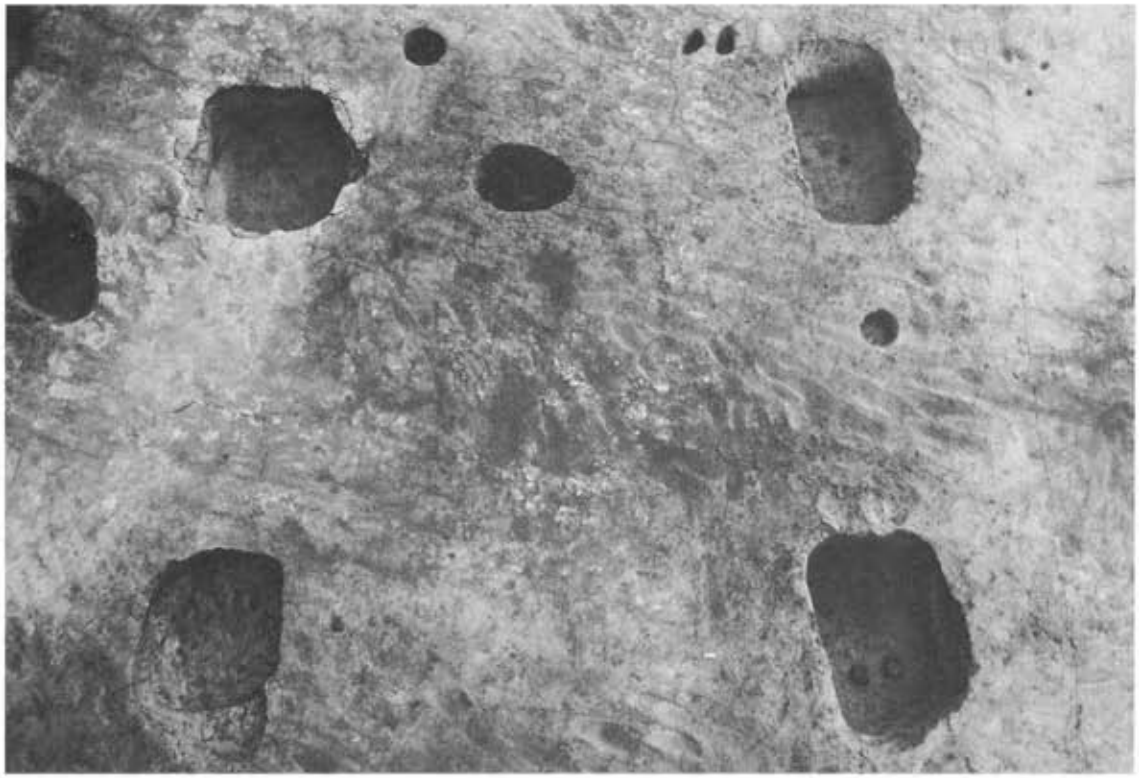
57

72

図版 6　　1.第 1 号掘立柱建物跡

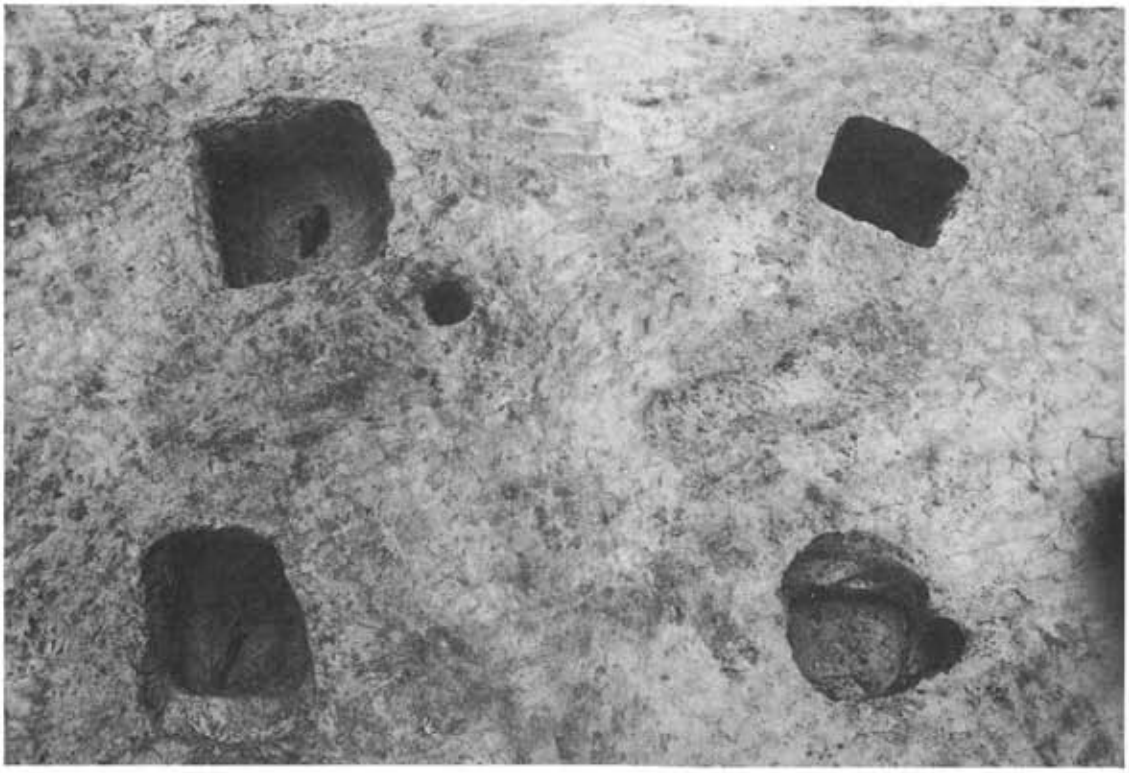


2.第 2 号掘立柱建物跡

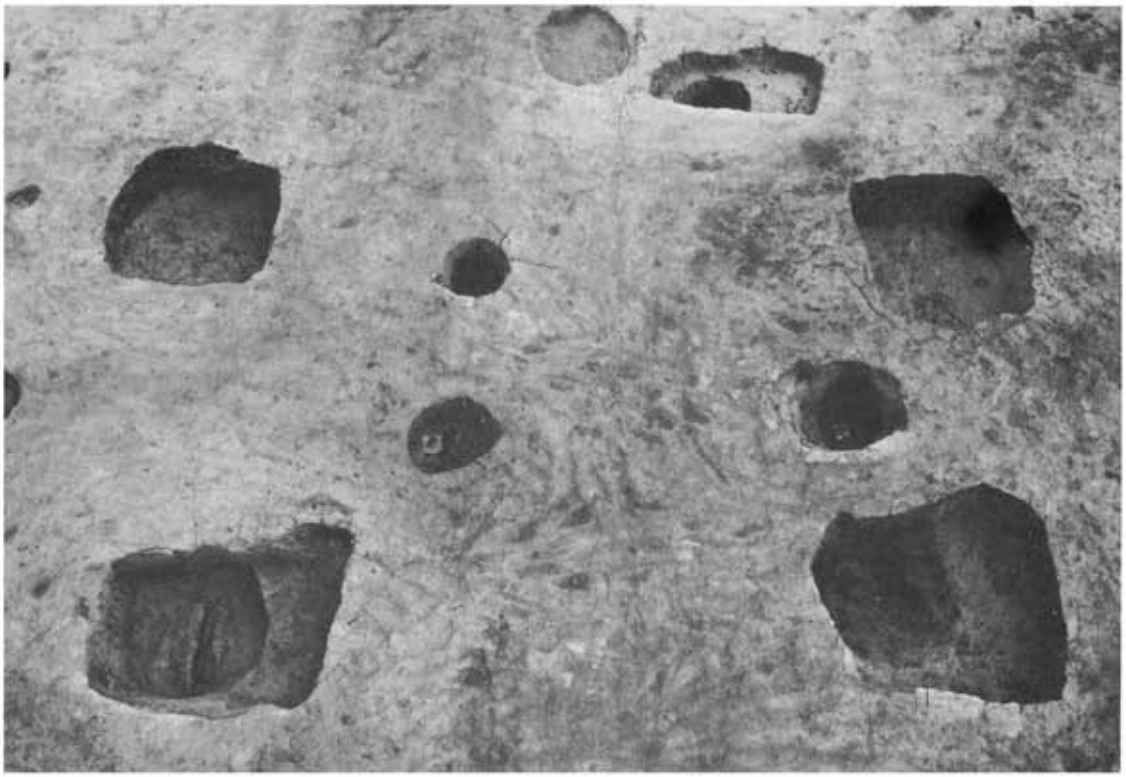


1．第３号掘立柱建物跡

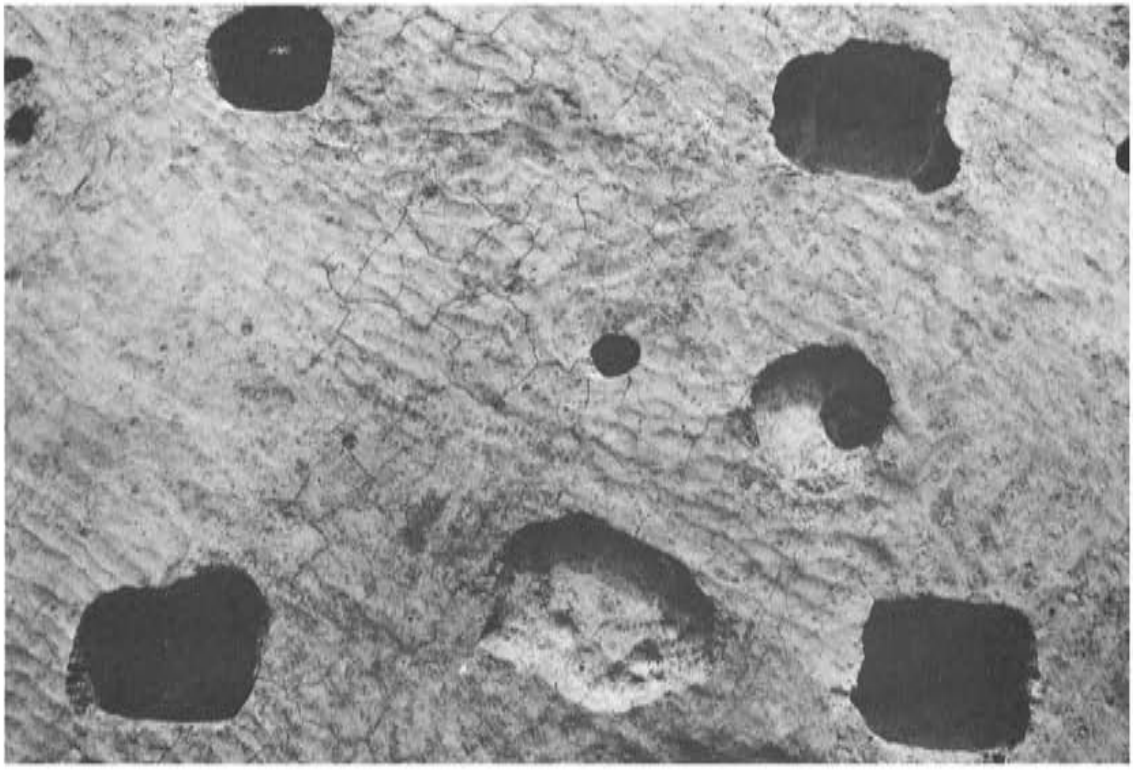
図版７

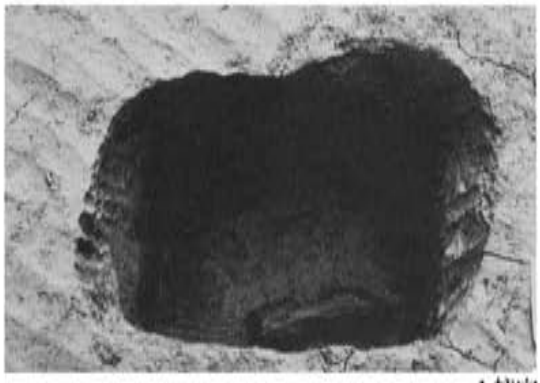


2．第４号掘主柱建物跡

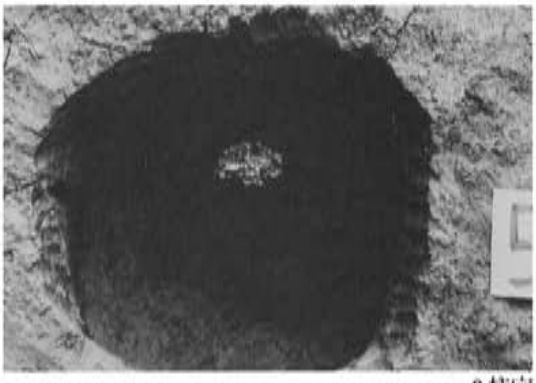


図版 8　　第 5 号掘立柱建物跡

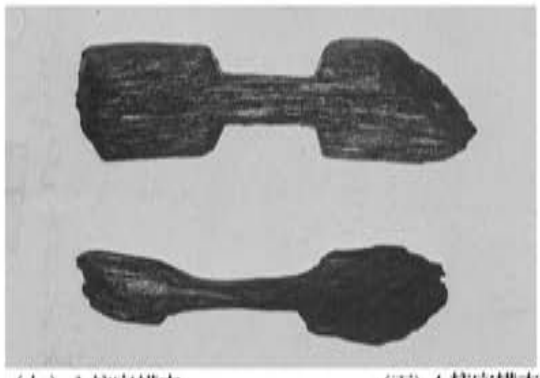




1 柱穴

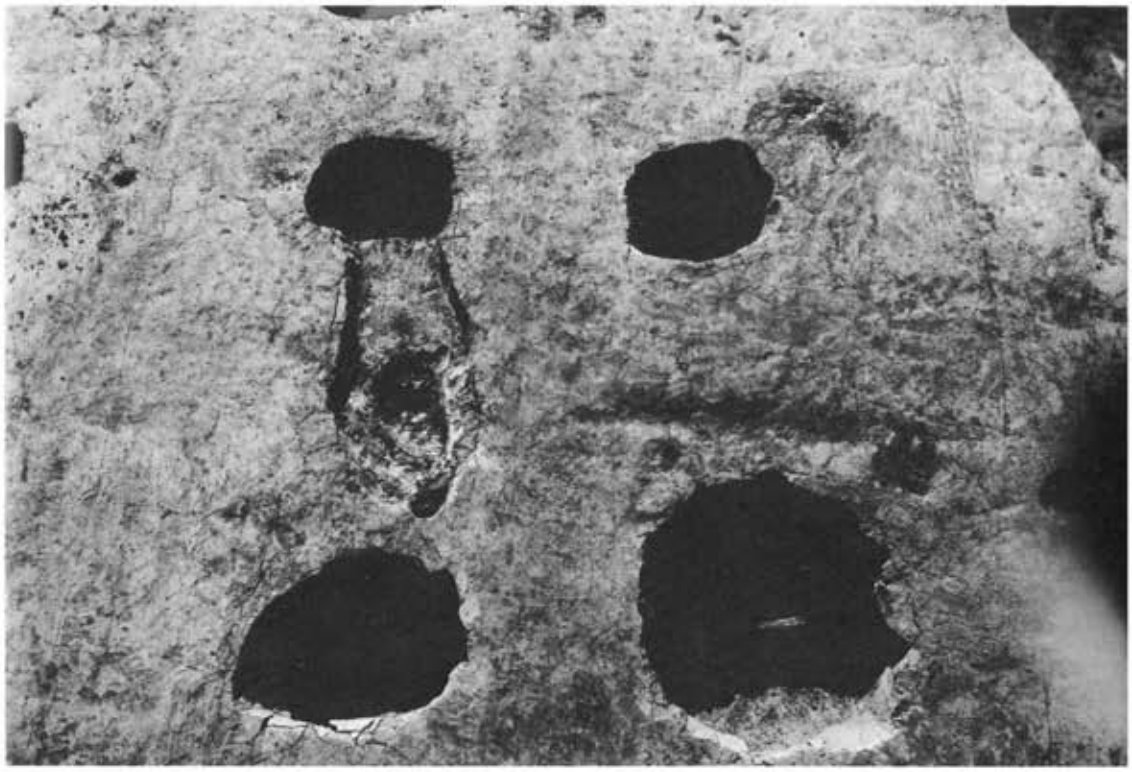


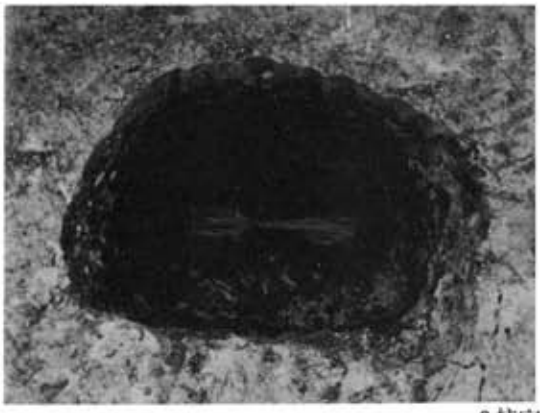
2 柱穴



（上）1 柱穴横木　　（下）4 柱穴横木

2 柱穴断面

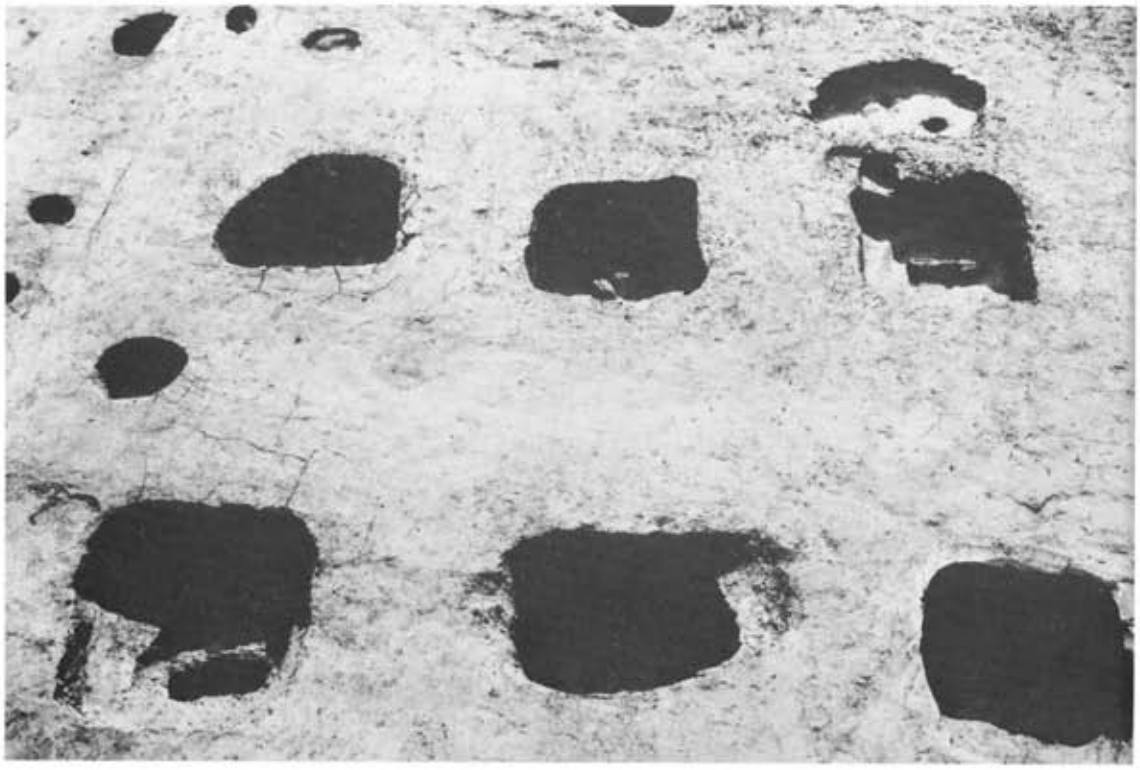


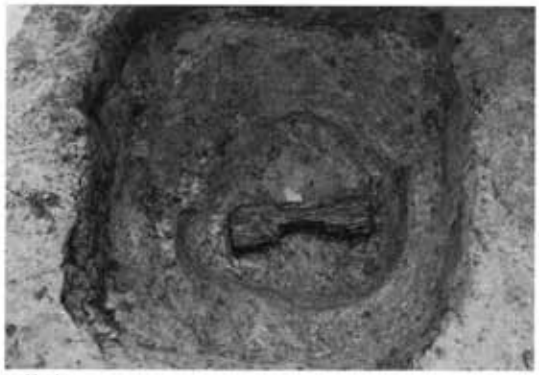


２柱穴

２柱穴断面

図版10　　第９号掘立柱建物跡





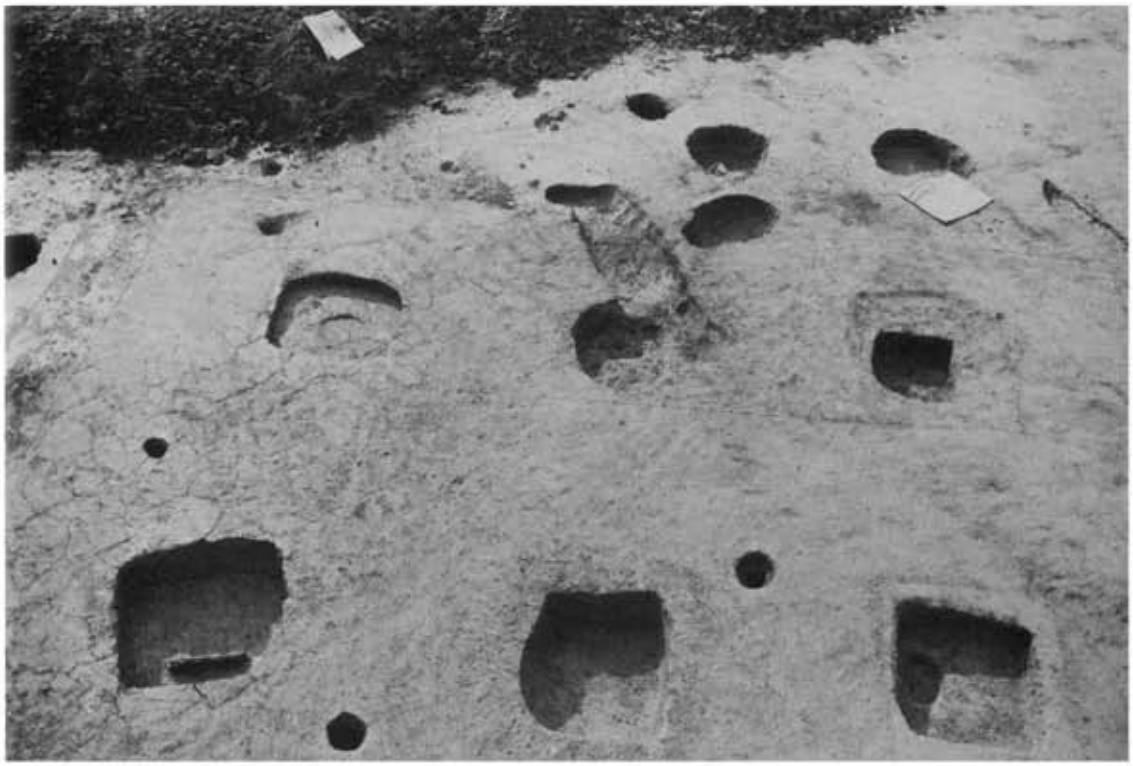
1柱穴

4柱穴

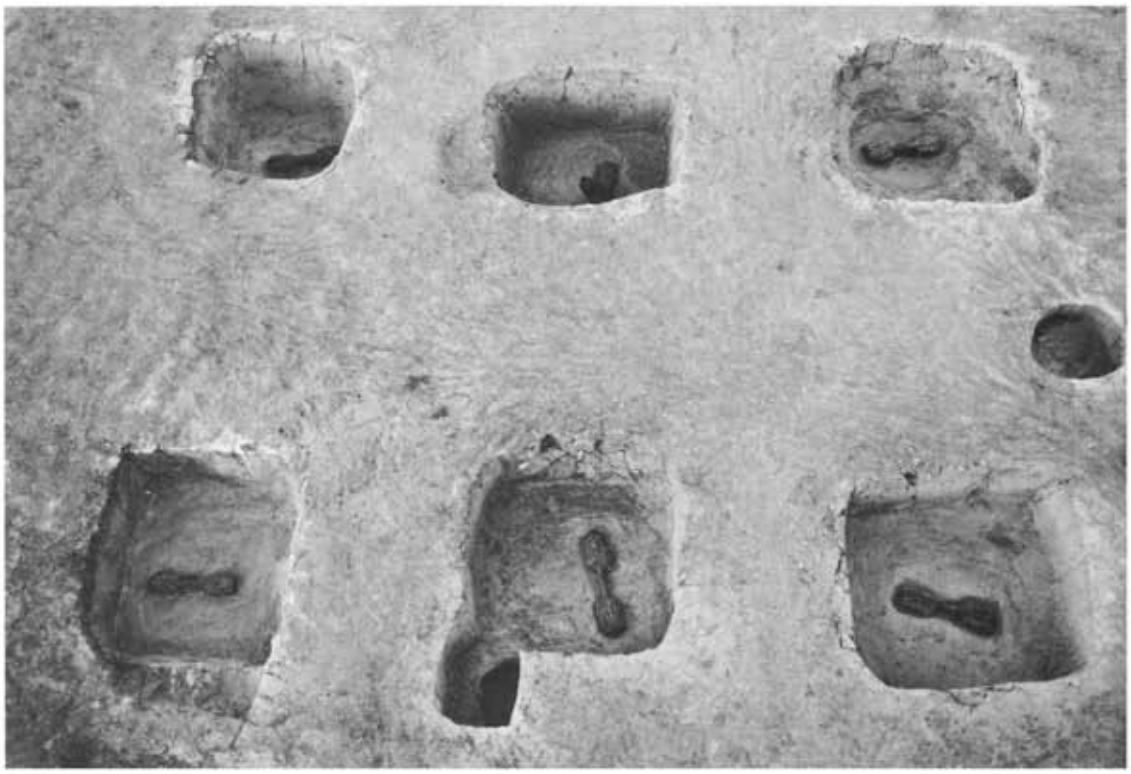
3柱穴

5柱穴

1．第10号掘立柱建物跡



2．第11号掘立柱建物跡



図版12　　第11号掘立柱建物跡柱穴

1柱穴

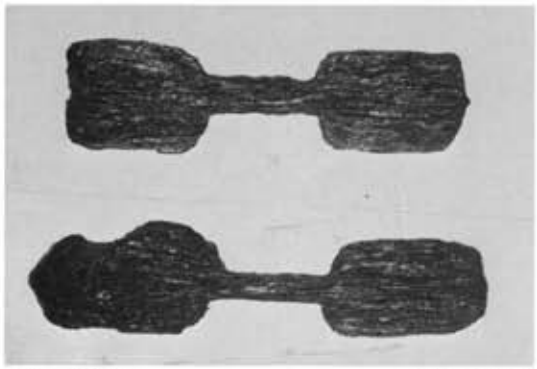
4柱穴

2柱穴

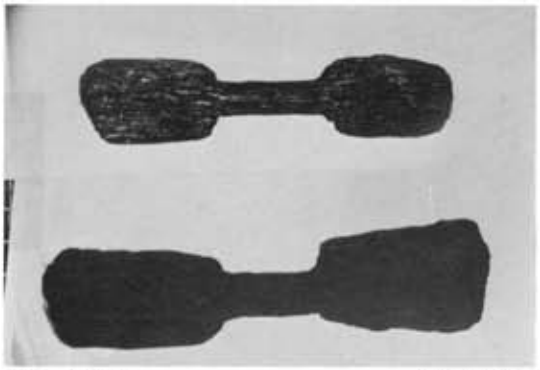
5柱穴

3柱穴

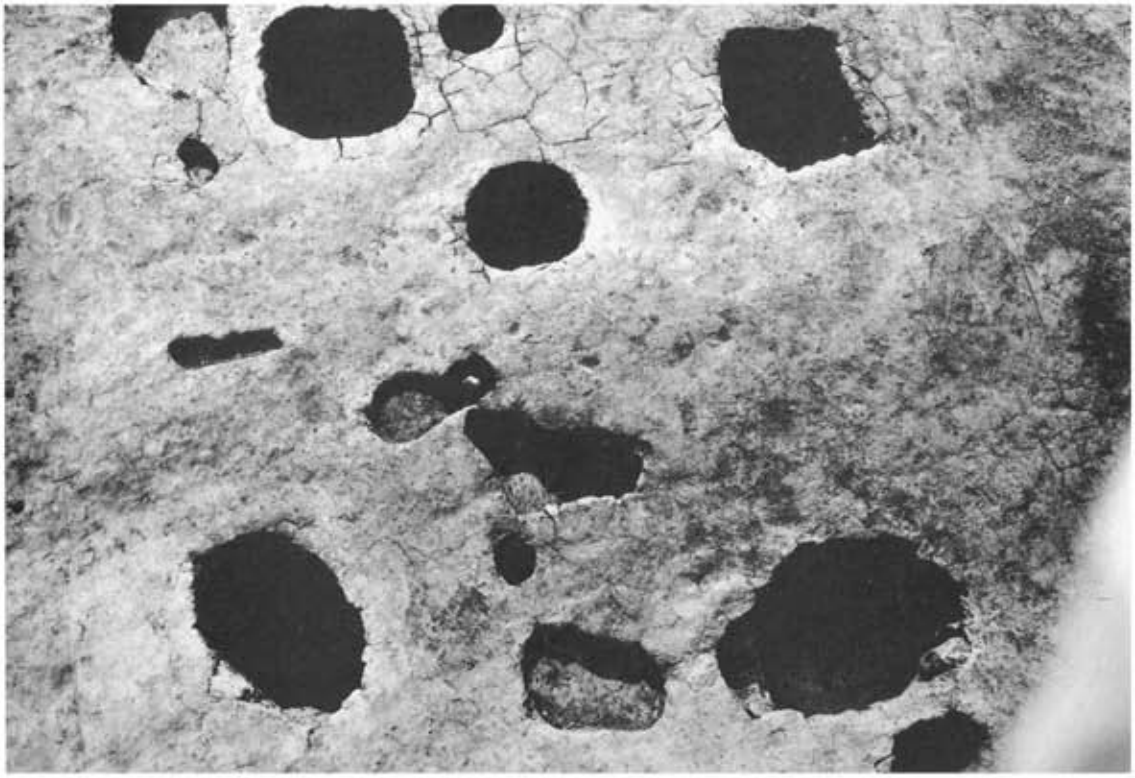
6柱穴

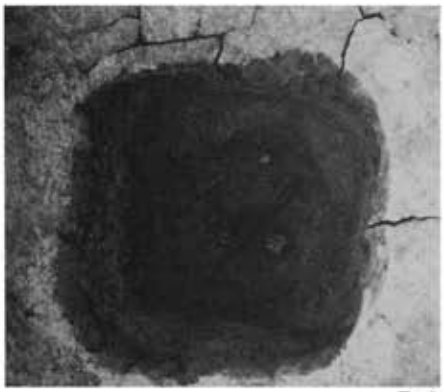


（上）2横木　（下）3横木



（上）5横木　（下）6横木

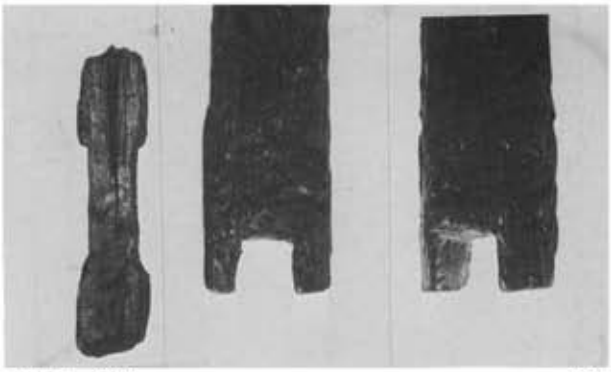




P 2

P 1

P 2

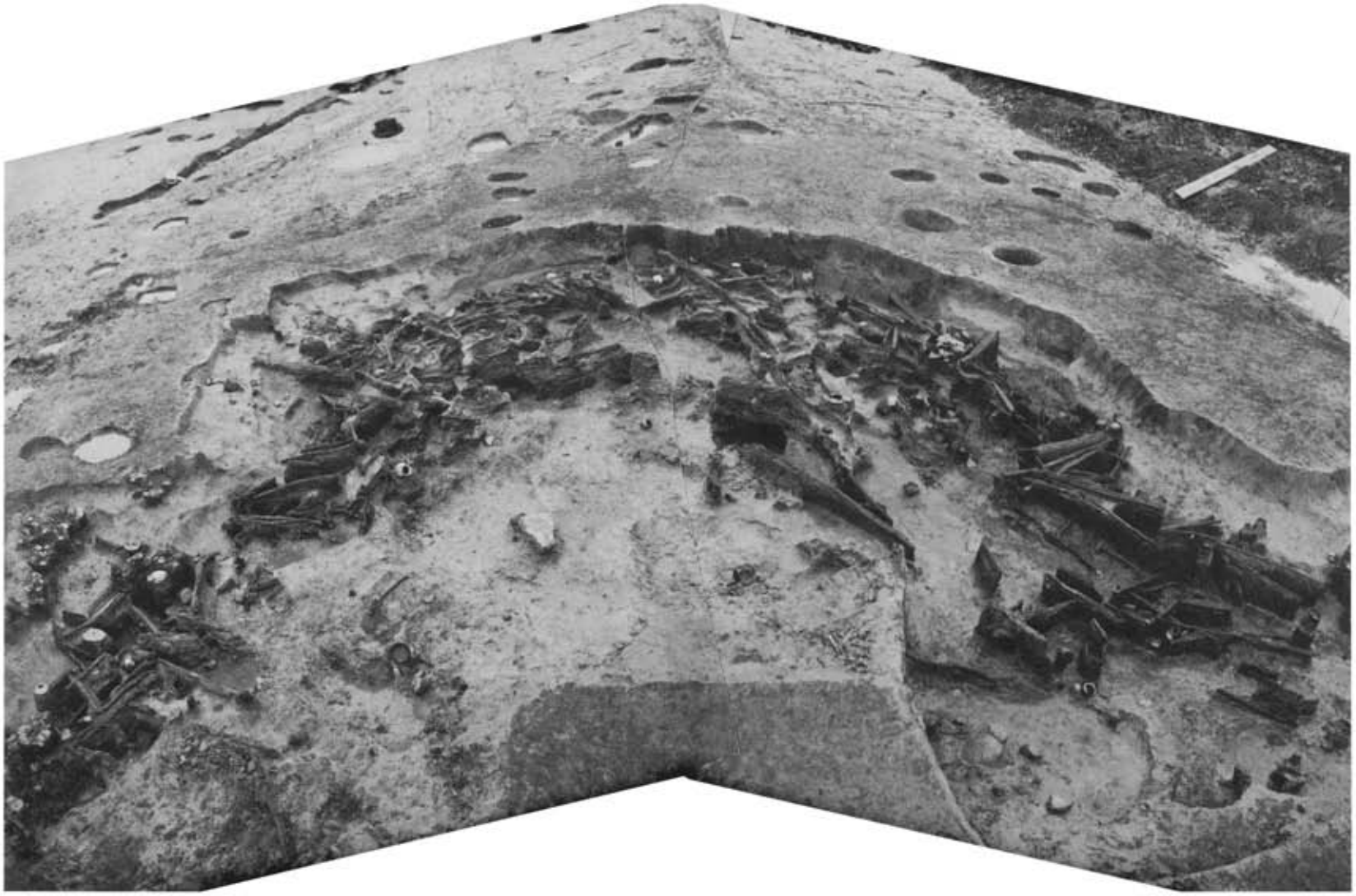


2横木・2柱　　1柱

図版14　　1．M－3溝の状況

2．M－3溝出土土器

図版15　　祭祀遺構全景



図版16　　1．鋤・鍬出土状況

2．甕（須恵器）出土状況

1．土器出土状況

図版17

2．ミニチュア土器出土状況

図版18　　1．土器出土状況

2．鍬・石鍋出土状況

64

65

66

72

68

71

74

75

図版20　　祭祀遺構出土土器(2)

80

84

81

86

82

88

83

89

90

支脚

73．手捏土器

93

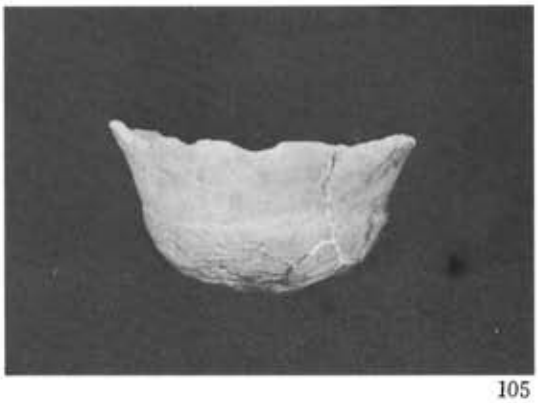
94

図版22　　祭祀遺構出土土器(4)

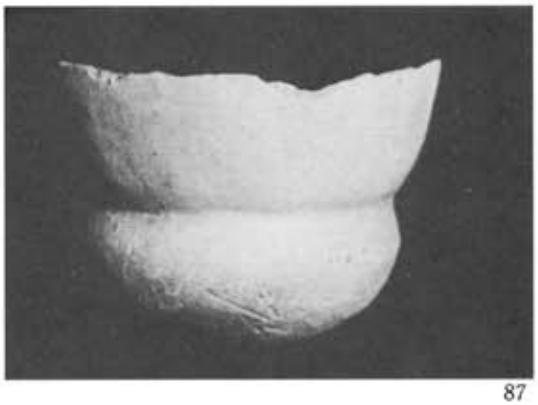
95

104

96


105

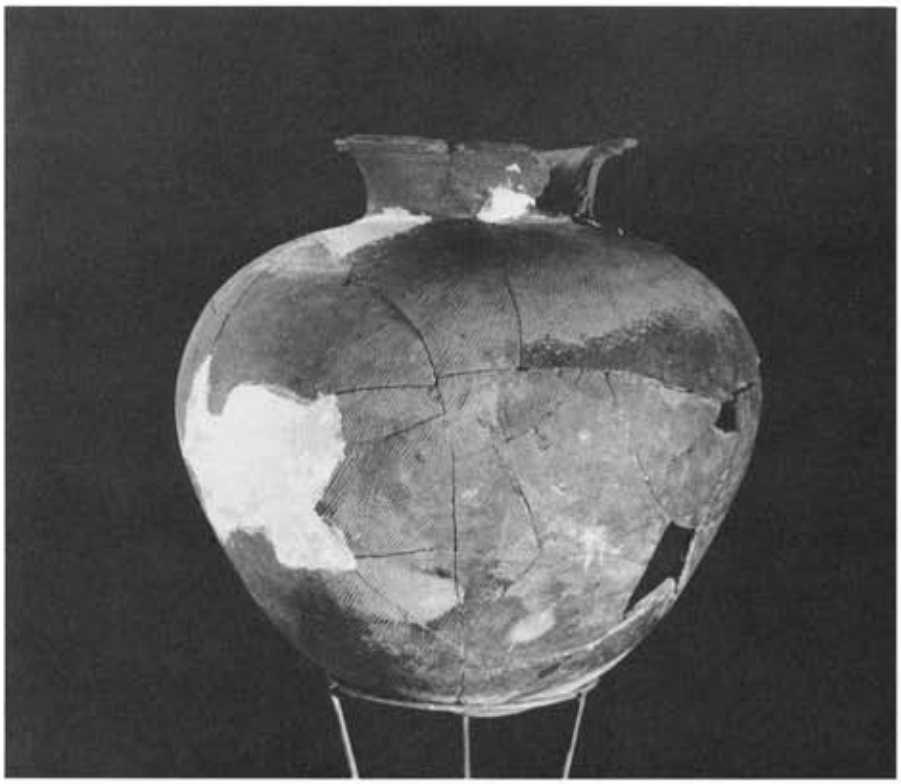
97


87

103

106

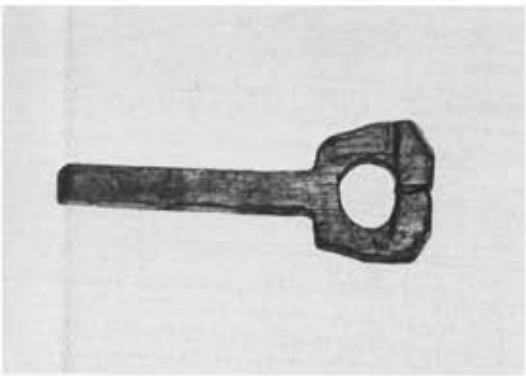
祭祀遺構出土土器(5)



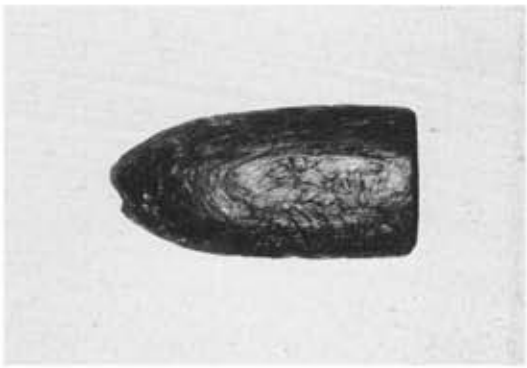
117

118

11



栓ぬき状木器



横槌

図版24　　木製品　鍬・糸巻

第Ⅲ部

赤司遺跡A地点

もくじ

赤司遺跡A地点

1．溝状遺構……77

2．礫集石群……77

3．館　　址……77

4．出土遺物……79

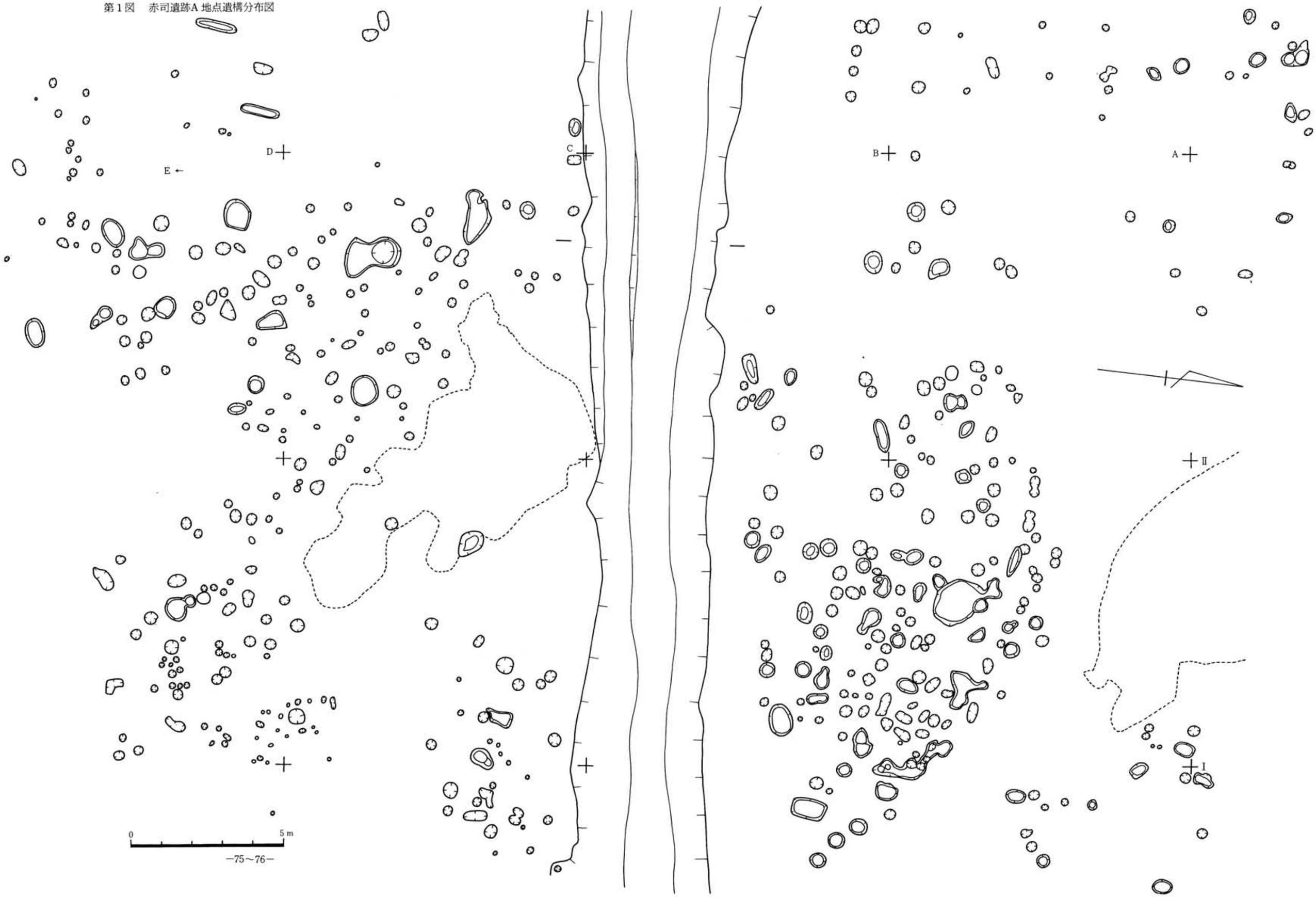
挿　図　目　次

第１図　赤司遺跡Ａ地点遺構分布図…… 75
第２図　溝状址断面図…… 77
第３図　柱址実測図…… 78
第４図　柵址実測図…… 79
第５図　Pit 実測図…… 79
第６図　土器溜実測図…… 80
第７図　土器出土状況…… 82
第８図　土師器・白磁・青磁実測図…… 83

図　版　目　次

赤司遺跡Ａ地点
図版１　1.赤司遺跡Ａ地点（後背集落は下赤司）…… 87
　　2.赤司遺跡全景（南部を望む）…… 87
図版２　1.柱穴の状態…… 88
　　2.柱穴の状態…… 88
図版３　Pit の状況（Ｐ―42）…… 89
図版４　Pit の状況（Ｐ―34）…… 90
図版５　Pit の状況（Ｐ―18）…… 91
図版６　土器出土状況…… 92
図版７　出土土器（土師器）・銅銭…… 93
図版８　土師器・瓦器・青磁器…… 94

第１図　赤司遺跡A 地点遺構分布図



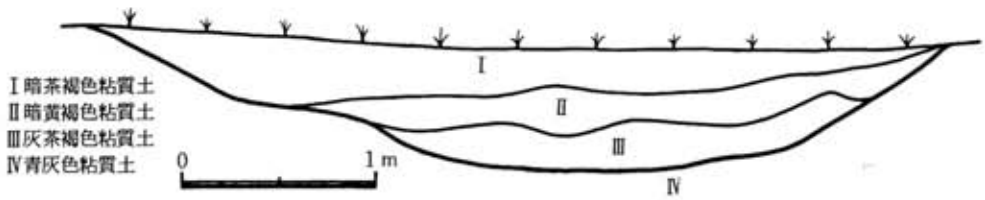
第Ⅲ部　赤司遺跡Ａ地点

赤司遺跡Ａ地点は、県道小城～北茂安線、大地町集落沿いの南方、上赤司部落の南約200m、赤司遺跡Ｂ地点の西方100mに位置する。標高約14mの圃場内に在って、南北約80m、東西約80mの広がりをもつ遺跡であって、今回の調査対象は遺跡の東部の東西約30m、南北約50mであった。この遺跡は中世前期の館址と推察される。

１．溝状遺構（第１図・２図・図版１）

遺跡のほぼ中央を東西に走る幅4.40m、深さ60cmの溝状遺構を検出した。この溝の北側上端部はＢＩ点からＢⅢ点へかけて６ｍの距離で平行に走り、南側上端部はＣＩ点からＣⅢ点にかけての線上に位置している。この溝は東西へ延びるものと推察される。溝は青灰色粘質土を基盤として、最下層（Ⅳ層）に灰茶褐色粘質土が20cmの厚さに堆積し、

第２図　溝状址断面図



その上層（Ⅲ層）には木片を含んだ暗黄褐色粘質土が厚さ10cmに、また最上層（Ⅱ層）には暗茶褐色土が堆積しているが、いずれの層からも遺物の混入は見られなかった。

２．礫集石群

溝状遺構をはさんで北と南に礫集石群が検出された。北の礫集石の広がりは、ＡⅡ点の北1.50mの遺跡の北端から東へ6.8mの幅で南東へ牛角状に５ｍの位置まで突出している。この礫集石は北への広がりも想定される。

南の集石は北端がＣⅡ点で溝状遺構と接し、南へ５ｍの位置で幅９ｍまで広がり、さらに幅２ｍで南東へ６ｍのび出し、面積約40m²を測る。この２つの集石群の礫の大きさは、径２～３cmから７～８cmあり、集石の厚さ20cmに達している箇所もある。また集石群内に少量の土師器が出土した。この２カ所の集石が自然によるものか否かは不明である。

３．館　　址

溝の北、ＢⅡ点の西２ｍ位置に柵址と推察される列杭が検出された。（第４図）残存

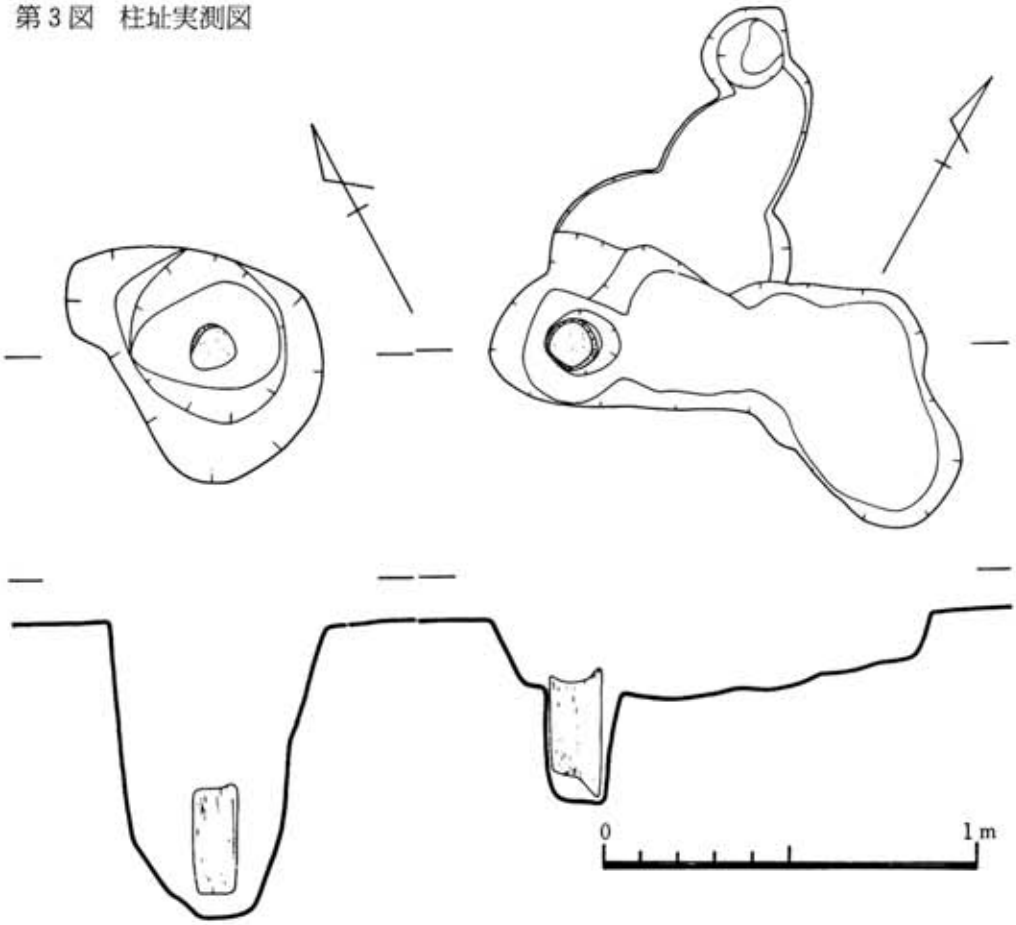
杭の径は３㎝内外で、杭間は85㎝・70㎝・85㎝で、杭穴の大きさはいずれも30㎝、深さは30～40㎝を測り１列をなしている。これら列杭はさらに西へのびているものと推察される。

また、遺跡の全域にわたって掘立柱の柱根が検出されたが、特に溝状遺構の北側に集中している。しかし建物として何棟分かは現時点では不明である。遺構の１つで、ＢＩ点の北4.5m 、東２m にある柱址（第３図―Ｐ21・図版２）の柱穴は径28㎝、深さ40㎝を測り、柱の大きさは直径６㎝と小さい。この柱址より南西へ５m 、ＢＩ点の北2.5m 、西2.5m の柱址（第３図―Ｐ25・図版２）は２本の柱が並び、中心間が55㎝ある。１本は柱の径14㎝、柱穴の深さ60㎝で、１本は柱の径６㎝、柱穴の深さ50㎝を測る。この２本の柱が同一時代のものであるか不明である。

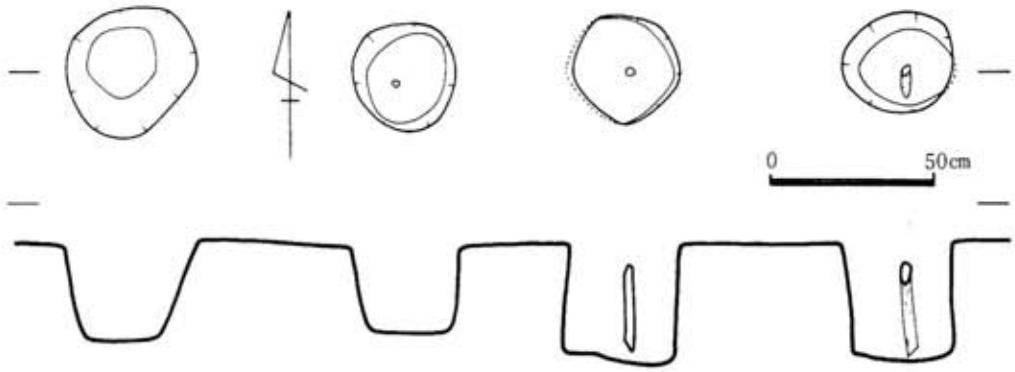
さらに、ＢII点の西2.7m にある直径50㎝の円形ピット内に比較的大きな石（扇形の扁平な自然石で20㎝×10㎝）が落ち込んだ状態で検出された。（第５図―Ｐ２）石は垂直に近い状態にあり、その下に土師器を出土した。

遺物の分布、特に土師器は溝状遺構の南から多く出土し、遺跡の南東隅、ＤＩ点の西

第３図　柱址実測図



第4図　柵址実測図



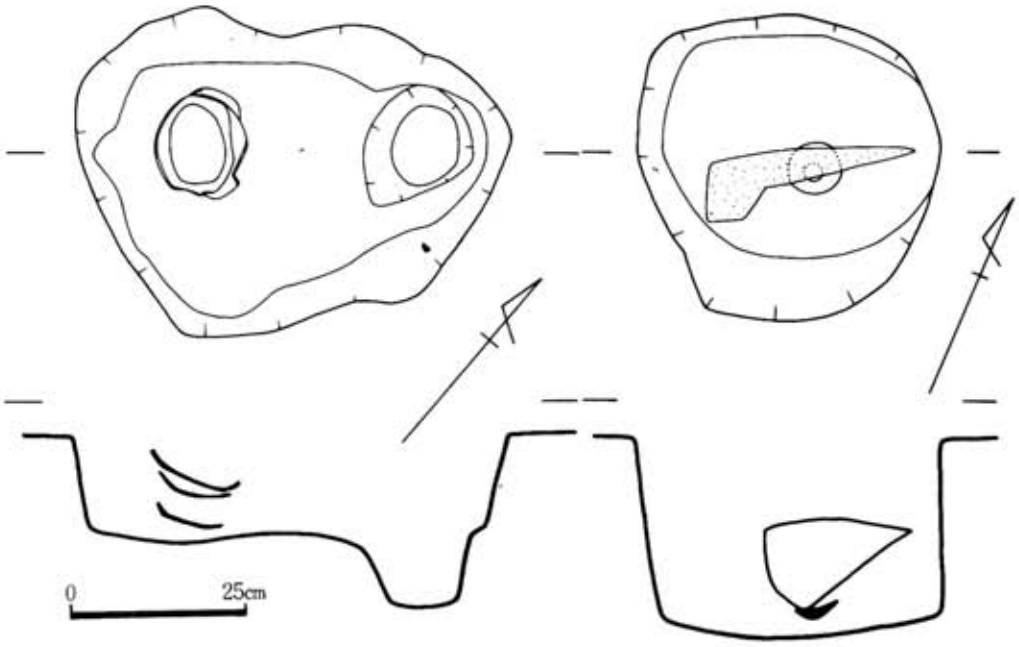
1.5m一帯では、東西2m、南北4mの範囲内で集中して検出された。(第7図・図版6)また集石の南の不整形ピット群の1つ、DII点の西4.5m、南2mの楕円形ピット内より3枚の土師皿が重なった状態で出土した。(第5図ーP18)

遺跡の南端、DII点の東4.5m、南6.7mの位置に、長径1m、短径50cmの楕円形状を呈する弥生式土器溜が検出された。(第6図)

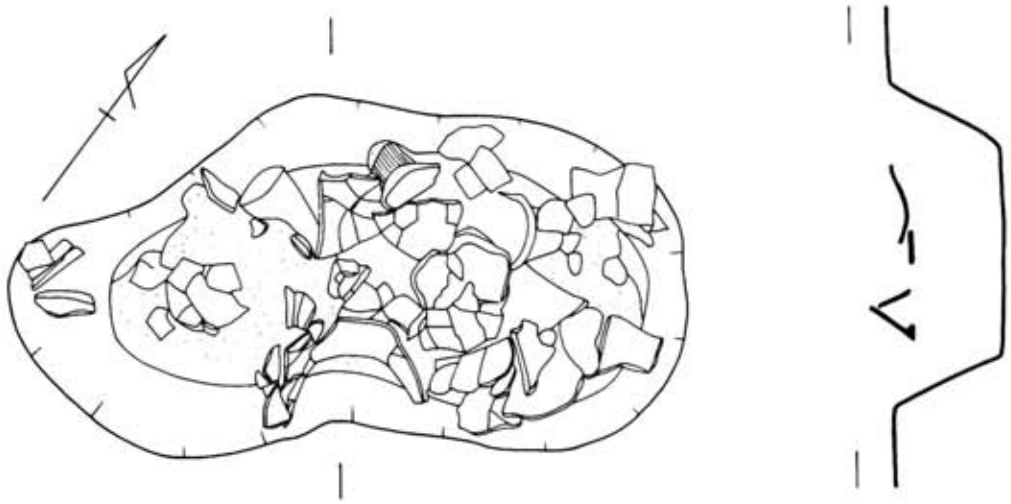
4．出土遺物

出土遺物については、遺跡の全域から青磁片や白磁片が出土し、土師器は溝状遺構の

第5図　Pit実測図



第６図　土器溜実測図



南、特に遺跡の南東部に多く出土している。ＡII点の東２ｍ、南2.5ｍの位置から石鍋の１部が、またＡIII点の東4.7ｍ、南３ｍの位置からは、上部2.4cm、下部3.5cm、厚さ0.7cmで上部に通し穴を有する使途不明の石製品が出土した。他には銅銭「洪武通宝」「熙寧元宝」がＡIII点の東4.5ｍ、南5.5ｍの地点から「聖宋元宝」に２枚が銹付いてＤIII点の東2.5ｍ、南3.6ｍの位置から「天禧通宝」と私鋳銭がＢＩの西１ｍの位置から出土している。

(1)　土師器

土師皿（第８図―13・図版８）　口縁径13.2cm、器高2.9cmを測り、底面は糸切りの上に板目をもつ。粘土質は良いが、粒子の荒い砂粒を多量に含む。焼成は普通で、淡茶褐色を呈する。器面は横撫、内底も撫調整がなされている。

土師皿（第８図―11）　口縁径13.0cm、器高9.2cmで口縁部先端はやや外に反り、底部は糸切り底である。良質の粘土に0.5～２mmの砂粒を含む。焼成はやや弱い。器面を横撫、内底も撫調整。

土師皿（第８図―12）　口縁径13.2cm、器高2.9cm、やや上げ底状の皿である。底面は糸切り痕に板目がある。焼成は普通で淡茶褐色を呈し、胎土は精選された粘土に１mm前後の砂粒を多く含む。器体は撫調整がなされている。

土師皿（第８図―10）　口縁径12.4cm、器高2.4cmを測る。良質の粘土に１～２mmの砂粒を少量含んでいる。焼成は良好で淡褐色を呈し、底面は糸切り、板目痕を有し、器面は横撫、内底も撫調整がなされている。

土師小坏（第８図―７・図版７）　口縁径7.6cm、器高2.4cmでやや上げ底である。良質の粘土に粗砂粒を含んでいる。淡茶褐色で焼成は普通である。底面は糸切り離しで、

器体は横撫調整がなされている。

土師小皿（第８図―１・図版７）　口縁径9.0cm、器高は1.5cmで、底面はヘラ切りの上板目痕を有している。胎土は良選された粘土に雲母を含み、焼成は普通で淡茶褐色を呈している。器体は撫調整がなされている。

土師小皿（第８図―６・図版７）　口縁径8.6cm・器高1.0cm、底面に糸切り痕がある。良選された粘土に細砂粒を含み、焼成は普通で淡茶褐色を呈している。器体は撫調整が施されている。

土師小皿（第８図―５・図版７）　口縁径8.9cm、器高1.3cmを測る。底面は糸切り離しである。精選された粘土に多量の雲母を含み、焼成は普通で淡赤橙色を呈している。器体全面に撫調整がなされている。内底面は大きく波打っている。

土師小皿（第８図―４・図版７）　口縁径は8.7cm、器高は1.2cmで底面には糸切り痕の上に板目がある。良選された粘土に細砂粒を含んでいる。焼成は普通であり、淡褐色を呈している。器体は撫調整が行なわれている。

土師皿（第８図―９）　口縁径9.6cm、器高1.9cmを測り、底面には糸切り痕を有している。精選された粘土に細砂粒を含み、焼成は普通で淡赤橙色を呈している。器体は撫調整が施されている。

土師小皿（第８図―３・図版７）　口縁径8.8cm、器高1.3cmで底面は糸切り離しである。粘土は良質で雲母を含んでいる。焼成は普通で淡茶色を呈し、器体は撫調整がなされている。

土師皿（第８図―８・図版７）　口縁径10.1cm、器高2.1cmを測る。底面に糸切り痕を有している。良質の粘土に細砂粒を含んでいる。焼成は普通で淡茶褐色を呈し、器体の全面に撫調整が見られる。

を有している。良質の粘土に細砂粒を含んでいる。焼成は普通で淡茶褐色を呈し、器体の全面に撫調整が見られる。

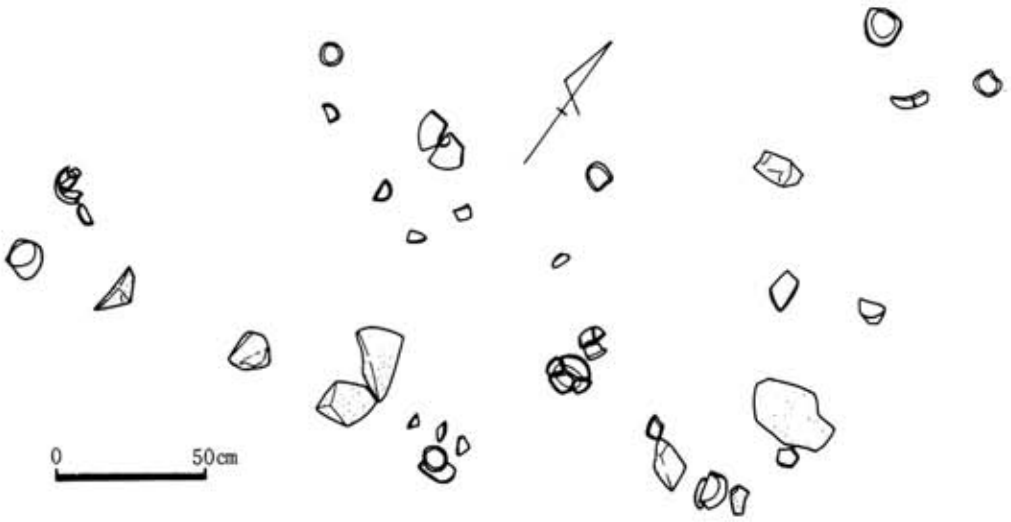
(2)　瓦器

高台付瓦器碗（第８図―15・図版８）　口縁径16.4cm、高台径6.6cm、器高6.8cmを測る。高台部に板目が見られる。良質の粘土に細砂粒を含んでいる。焼成は良好で灰色を呈しているが器面の一部は白色である。器体はヘラによる磨調整がなされている。高台は器体が乾燥した後に付している。

高台付瓦器碗（第８図―16）　口縁径17.7cm、高台径4.4cm、器高6.4cmで、精選された粘土に細砂粒を少量含んでいる。焼成は普通で灰白色を呈している。高台の先端は磨耗しているが、横撫調整がなされ、外底はヘラ削りで外器面はヘラ削りの後撫調整が行なわれている。高台は後に付着させている。

高台付瓦器碗（第８図―14）　碗の底部と器面のみで口縁部を欠いている。高台の外

第７図　土器出土状況



径は6.7cmを測る。初め輪積みをし、後にロクロにかけたものである。良選された粘土に細砂粒を含んでいる。焼成はやや弱く灰白色を呈している。器体は撫調整が施されている。高台は後に付着させ、横撫調整がなされている。

(3)　青磁・白磁器

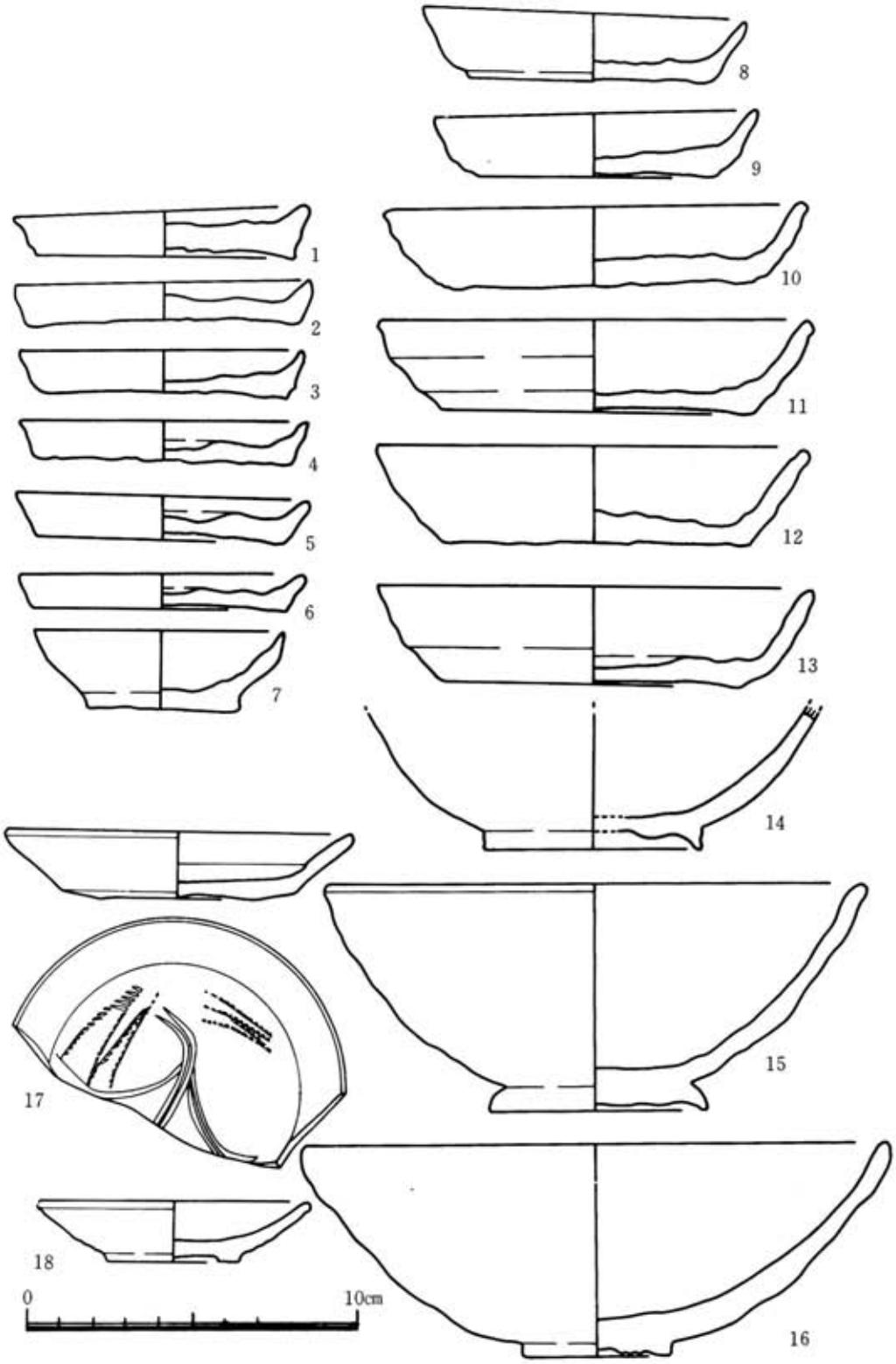
青磁皿（第８図―17・図版８）　口縁径10.5cm、器高2.1cmの小皿で底部は篦削り調整がなされている。胎土は濃灰色、薬釉は黄緑色で底部には釉は施されていない。内底部の中央に植物の図案化文様、その外に鋭く突き出した櫛歯文様が施されている。

白磁小坏（第８図―18・図版８）　口縁径8.2cm、器高1.7cm、高台の外径4.0cmを測る。高台は篦造り出しで、４カ所削り落して４脚高台となしている。同種・同形の小坏を重ねて製造したと推察され、内底面に４脚高台痕（外径4.0cm）が残っている。胎土は灰茶褐色を呈し、器体全面に淡黄色の釉が施されている。

青磁碗片

碗の口縁部から器面にかけての破片で、胎土は明灰色、薬釉は淡緑色で蓮弁が削り出されている。

第８図　土師器・白磁・青磁実測図



銅 銭 計 測 一 覧 表							
出土区	銭 貨 名	初鋳造年（西暦）	法量 直径（mm） 垂直	水平	外縁厚さ（mm）	重さ（g）	備考
A	洪武通宝	明太祖（1368）	23.46	23.38	1.40	2.6	
A	熙寧元宝	宋神宗（1068）	24.43	24.05	1.06	2.3	
A	聖宋元宝、他	宋徽宗（1101）	——	——	——	7.1	3枚密着
C	（私鋳銭）	————	——	——	——	2.6	外縁部裏面へ反り鋳名なく唐草模様
C	天禧通宝	宋真宗（1017）	24.00	24.00	1.20	2.9	
D	寛永通宝①	1264～1643	24.12	24.26	1.18	3.0	

ま と め

赤司遺跡A地点は祇園川北岸で標高14mに位置している。この遺跡は中世前期の館址と推察される。館址遺跡の例として、この遺跡の南西2kmに久米遺跡A地点、同B地点がある。館址の建物址を現時点では復元し得ないが、遺跡の全域に存在する多くのピットは、改築、移築の柱穴と判断される。内部施設など明確な遺構は確認できなかった。また、ここに館を構え、大陸からの輸入になる銅銭や青磁器等を所有していた館主の問題や輸入ルート、中世前期の館の規模・外部施設・内部施設等多くの課題を残しているが、それらの問題は将来に期したい。

（中島弘之）

第 Ⅲ 部

赤司遺跡Ａ地点

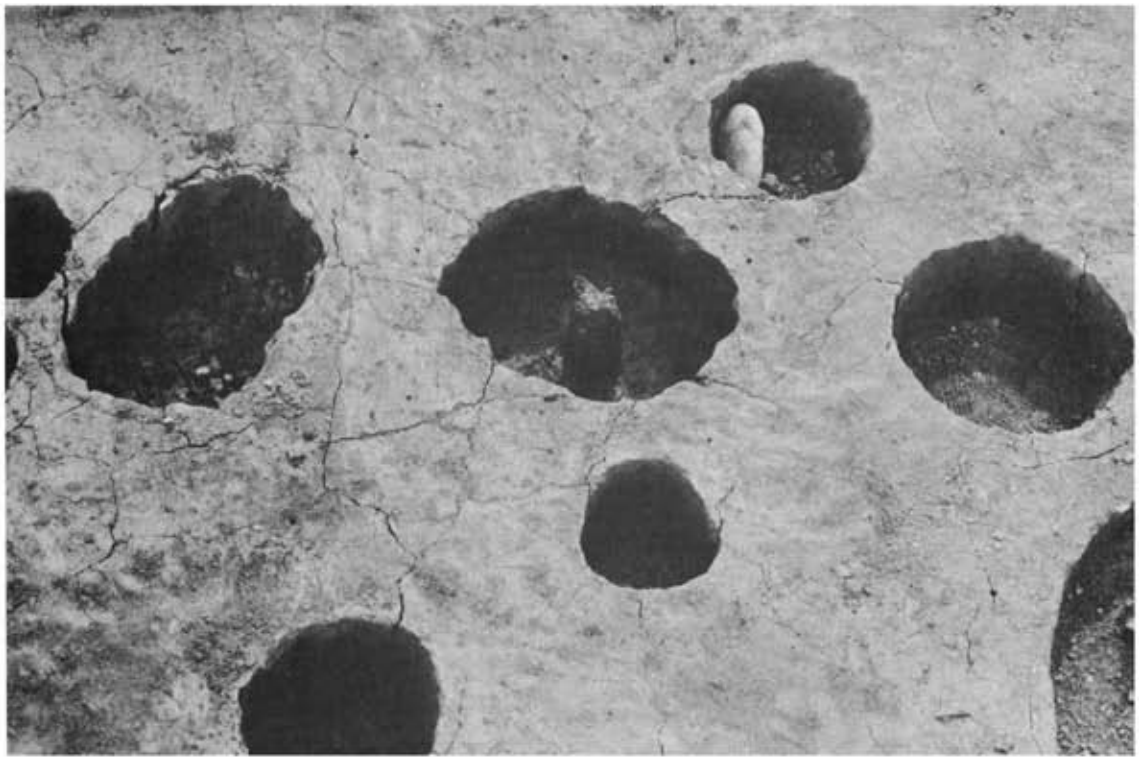
図

版

1．赤司遺跡A地点（後背集落は下赤司）　　図版1

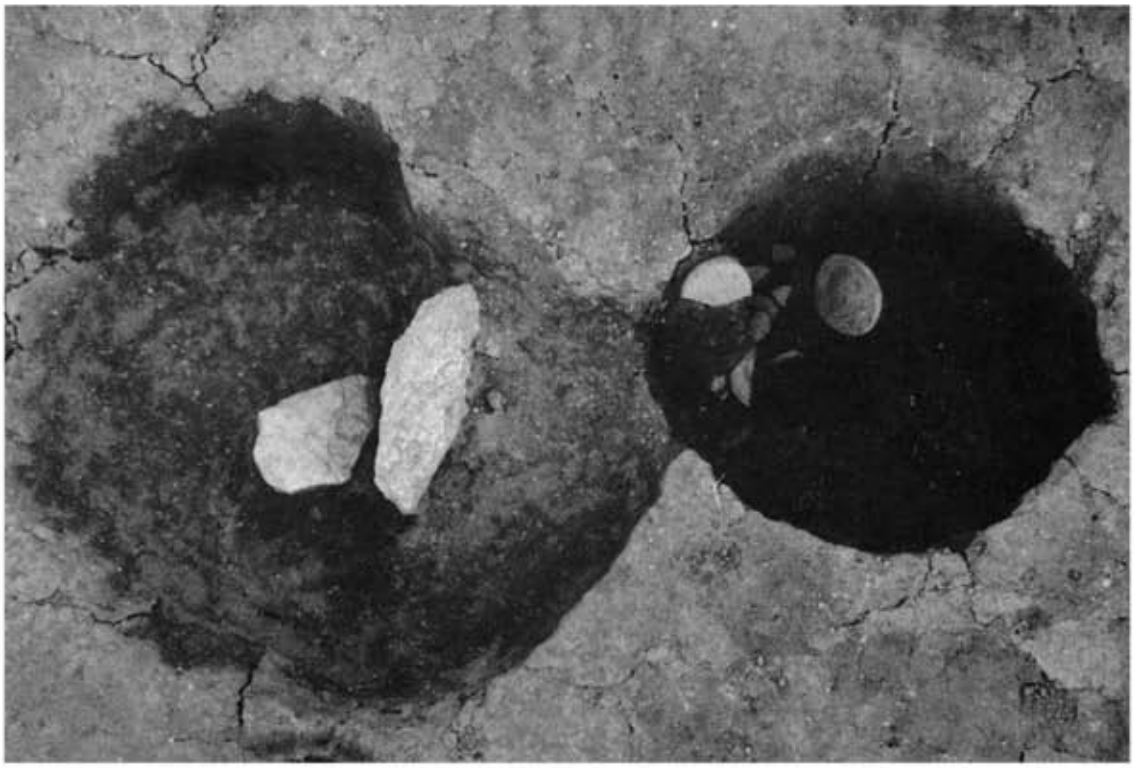
2．赤司遺跡全景（南部を望む）

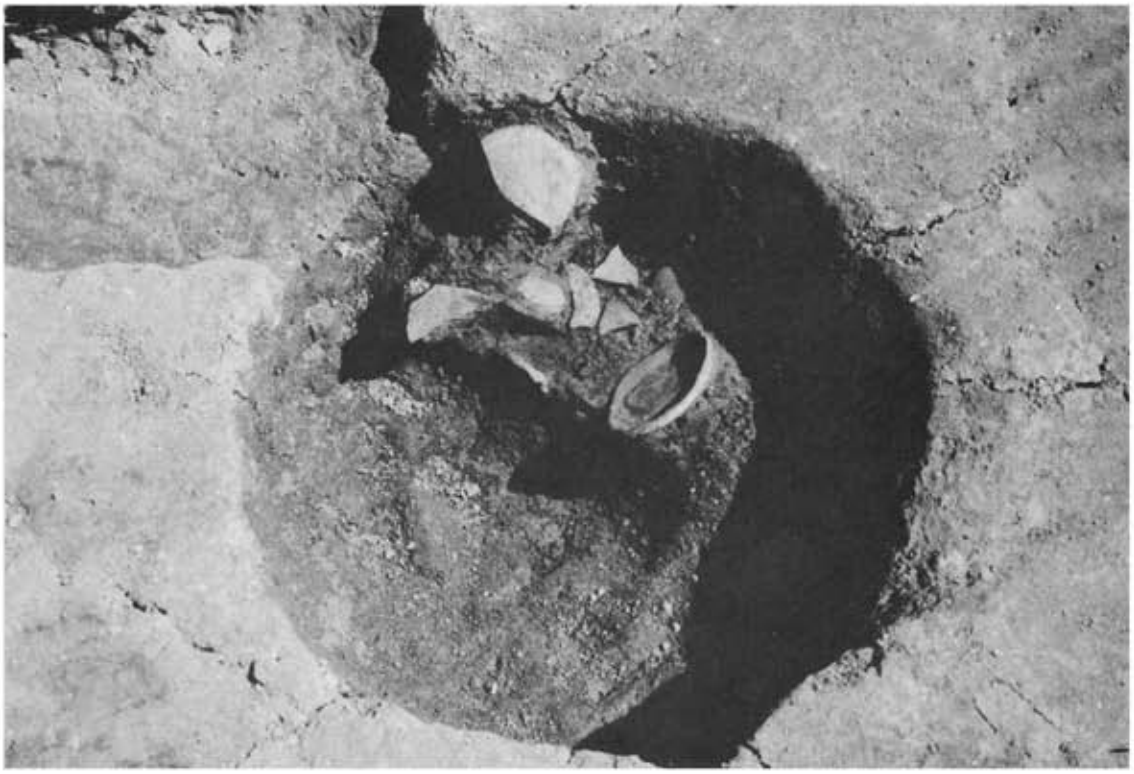
図版 2　　1．柱穴の状態



2．柱穴の状態

Pit の状況（P—42）　　図版 3



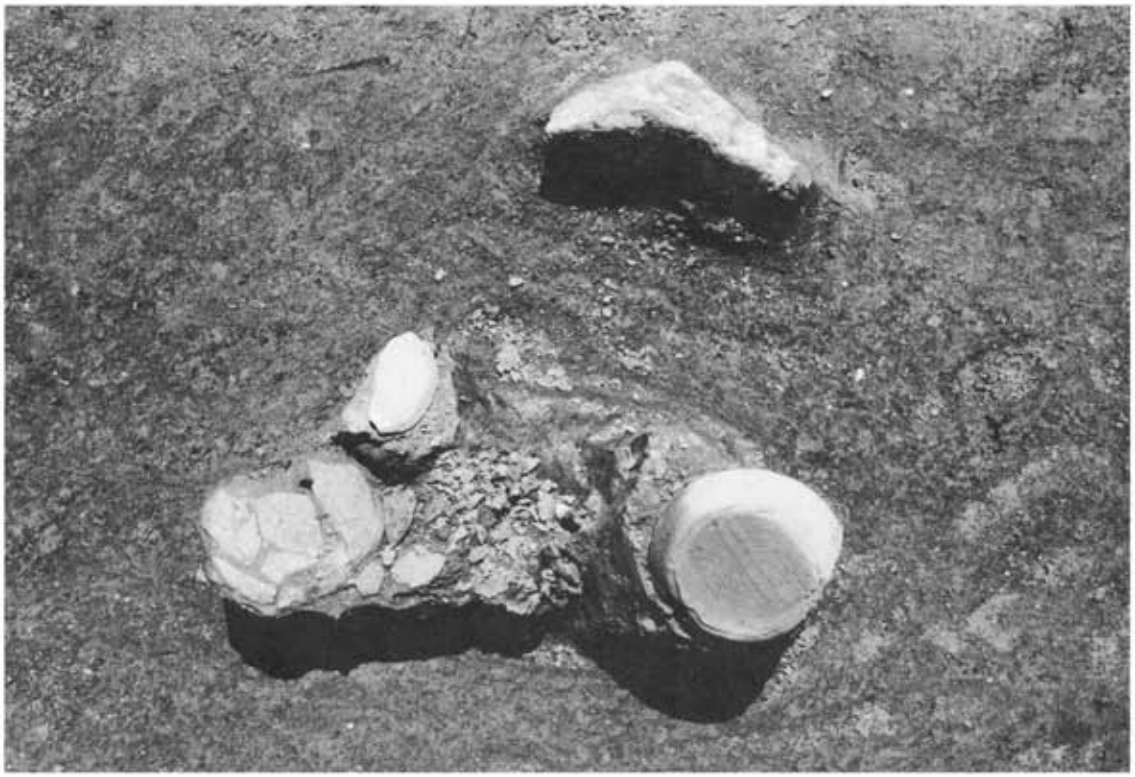


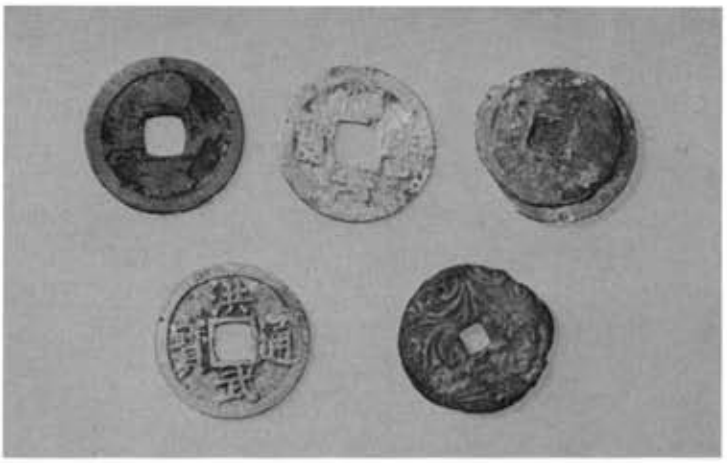
図版 4　　Pit の状況（P—34）

Pit の状況（P—18）

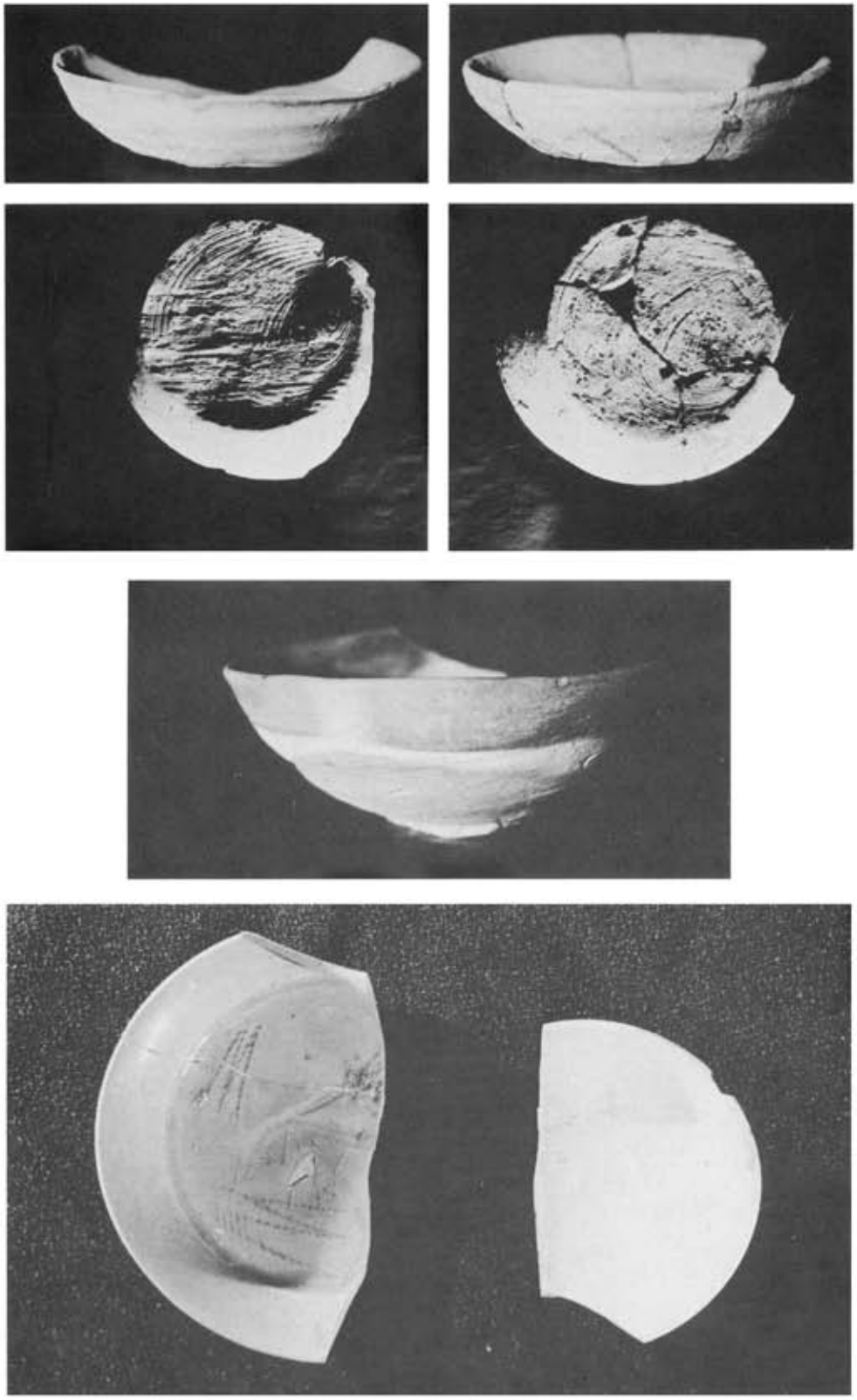
図版 5

図版 6　　土器出土状況





図版 8　　土師器・瓦器・青磁器



発掘風景（連日37度の高温に対処）

発掘調査参加の人々

〈付　　記〉

1．本報告書は昭和52年度に国庫補助金を得て実施した農業基盤整備事業に係る発掘調査記録である。

2．本報告書の作成担当は次の通りである。

遺物実測　木下巧・川頭久美・山本タカ子・大島もと子・友清淑子

トレース　川頭久美

執　　筆　第Ⅰ部　中島弘之

第Ⅱ部の1・2　中島弘之

3　　木下　巧

第Ⅲ部　中島弘之

編　　集　木下　巧

3．発掘調査に追い廻わされる現実での報告書作成であって、意を尽くしきれない点も多くあろうが、将来補足していきたいと思うのでご了解いただきたい。

昭和54年3月14日　木下巧記

佐賀県文化財調査報告書第44集

赤　司　遺　跡　群

発行　佐賀県教育委員会
昭和54年3月31日

編集　佐賀県教育庁文化課

印刷　合資会社　音成印刷所

佐賀県教育庁文化課